
バカとテストと戦略眼

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと戦略眼

【Nコード】

N0473X

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作小説です。TRPGを趣味とする少女『真海天音』。彼女はTRPGで培った戦術を試すために召喚システムと言う特殊なカリキュラムのある文月学園に進学した。待ちに待った召喚システムを使った試召戦争が実践できるようになった2年目の春。彼女は思い通りの試召戦争を行う事が出来るんでしょうか？

第1問（前書き）

どうも、毎度、おなじみのまあです。

思いつきから格上げの新小説です。

かなりネタの多い作品のため、多くの方はおいてけぼりになるとは思いますが楽しんでいただければ幸いです。

また、作者はTRPGの知識はリプレイを読んでいるだけです。詳しい方はアドバイスをいただけると幸いです。

第1問

「ついにきました。待ちに待った時が」

少女は桜舞い散る坂を上り、そう呟くと目の前に映る少女が通い2度目の春を迎える事になる文月学園の校門を前にして言う。

「この門をくぐる者は、一切の希望を捨てよ」

「……真海、お前は朝から、何をおかしな事を言っているんだ？」

少女は決意を込めた瞳で物騒な言葉を言い切るとそんな少女の様子に大柄の男が少女の名前を呼びため息を吐くと、

「おはようございます。教官」

「……誰が、教官だ。真海、お前は朝からおかしな事しか言えないのか？」

「教官はダメですか？ それなら……ベルフト王子？」

「……深海、お前は何が言いたいんだ？」

少女は大柄の男に向かい敬礼をするが男は少女の行動について行けないようで眉間にしわを寄せると少女は男が『教官』では納得がいかなかったと思ったように少し考えると男を何かのキャラクターに例えているのか『ベルフト』と呼び、男は少女の言葉にもう1度、大きなため息を吐く。

「だって、西村先生、聞いて下さいよ。私が好きなアリアンロッドの『ベルフト王子』に西村先生はそっくりなんですよ。力強いところですけど、先生、器用ですし、何より生徒に気配りができる事とか、『気配りのベルフト』の名に恥じないくらいにそっくりなんです！！」

「……真海、熱くなるのはかまわんがもう少し、状況を考えてくれ」
「状況ですか？ それはあれですか、どんな今回予告が出るんですか！！ コネクションは？ 関係は？」

「……いや、良い。それより、真海。これを渡すから、自分の教室に行くんだ」

しかし、少女の勢いは止まる事なく更なる加速をして行き、男は少女の勢いにどうして良いのかわからなくなったようで少女から目を逸らすと少女に一通の封筒を手渡し、

「これに今回のハンドアウトが？ キャラメイクはどうしよう？ やっぱり、王道のウォーリア／ウォーリアで行くべき？ それともアコライトは……状況が理解できる人か同類おなかもがいると最初に狙われるからダメね。シーフ／レンジャーかシーフ／ガンスリンガーも捨てがたいよね？」

「……真海、トリップするのはかまわんがクラスをしつかりと確認してきちんと自分の教室に行くんだぞ」

少女は封筒を手にぶつぶつと言い始めると男は眉間にしわを寄せて少女にキチンと封筒の中身を確認するように言う。

「は！？　そうでした。西村先生、すいません。少し、飛んでました」

「……元に戻ってくれて何よりだ」

少女はそこで正気に戻ったようで男を『西村教諭』と呼ぶとこの学園の生活指導の教師である『西村宗一』教諭は大きいため息を吐き、

「これに今年のクラスが書いてあるんですよね？」

「ああ」

少女は西村教諭から手渡されて封筒のノリの付いた部分をキレイに剥がすと、中からは1枚の紙が入っており、

「どのクラスかな？　無難にDクラスにはなれたと思うけど」

「まあ、真海の実力だと無難なところだな」

少女は少しだけわくわくしているようで紙を開くと、

『真海天音……Dクラス』

そこには少女の名前とこれから1年間過ごす事になるクラスが書かれており、

「予想通りですね……ファイアボルト」

「……真海、なぜ、お前はライターなど持っているんだ。これは没収だ」

「何を言っているんですか？ 情報はどんな些細なものだって隠蔽しないといけないのです。この情報が他の国に知られれば戦争の火種にだってなるかも知れません。誰の目にも触れる前に処理するべきなんです！！ ベルフト王子、フオーキヤスター軍師としての進言です！！」

自分のクラスを確認した天音はポケットからライターを取り出して封筒と自分のクラスが書かれていた紙を燃やすと西村教諭は天音からライターを取り上げると天音は西村教諭に状況を理解するように言うが、

「……良いから、もう教室に行け」

西村教諭は天音の相手をするのに疲れたようで彼女の背中を押すと、

「……ええ、私はこれからこのシェルドニアン学園に恥じない殺意と戦術を覚えて行きます。そして、その時はベルフト王子の右腕になって見せます！！」

「……ここは文月学園だ」

天音は校舎を見つめ、拳を握り締めて宣言するが西村教諭の言葉は酷く冷たい。

設定（前書き）

主人公『真海天音』の設定です。

召喚獣のデータは試召戦争が終了することに變更していくかも知れません。（苦笑）

設定

しんかいあまね
真海天音

所属 2 - D

性別 女

得意教科：日本史、音楽（130～150点）

苦手教科：数学、物理（90～100点）

総合得点：1438点

教科平均点：120点程度

備考

雄二、翔子と同じ小学校卒業だが別に友人と言うわけではない。

趣味はTRPGと言う少女。TRPG仲間の友人と戦術や戦略の話
を何時間でもする事が大好き。そのため、召喚システムと言う特殊
なカリキュラムだとゲームでつちかった戦略を行かせるのではない
かと言う理由で文月学園に進学する。ゲームが趣味なためファンタ
ジー系のゲームや小説も好んでいる。

性格は少しおっとりとしているがTRPGの話を始めると西村教諭
が引いてしまうくらいの勢いでまくしたて、西村教諭も問題児では
ないためか強く言う事ができないようにで苦笑いを浮かべている事が
たまに見られる。同じようにTRPGの戦術や戦略の話始めてい
る時も同様である。

TRPG中は作ったキャラクターを演技する事も多いため、試召戦
争時にも自分で考えた設定で動き回る迷惑な一面も持ち合わせてい
る。

容姿は赤みがかった茶髪のロングヘアをサイドポニーでまとめて
いる。瞳は茶色で少し垂れ目気味。性格が表すようにぼわわとし
た柔らかい感じで笑うが一度、スイッチが入ると目つきは鋭くなる。

彼女をよく知るTRPG仲間は殺意様が憑依したと言う。
身長は小柄で細身だが不釣り合いなくらいの大きな胸をしている。
美人と言うよりはかわいい系の女の子。

成長の伸びしろとしては実在の戦史から戦略や戦術を学ぶ事を考え、
日本史、世界史、また、アリアンロッドのクラスのダンサーやバー
ドにはまる事で音楽にも伸びしろが見える。

召喚獣（天音評価 データ作成時）

メインクラス：ウォーリア

サポートクラス：ガンスリンガー

種族：ヴィーナ、アウリル狼族

ライフパス（出自：闇の一族、境遇：親友、目的：戦い好き）

キャラクターレベル：1

種族スキル：オーバーパス（1）

ウォーリアスキル：バッシュ（1）、ウェポンルーラー（1）、ス

ラッシュブロー（1）

ガンスリンガースキル：キャリバー（1）、ガンパレード（1）

一般スキル：アスレチック（1）、シックスセンス（1）

武器：キャリバー魔導銃、双銃仕様

防具：レザージャケット

第2問

（ここから統一帝になるための挑戦が始まるのね……まあ、冗談ですけど、クラスにはどんな人がいるかな？ 殺意をまとったお姫さまとか、鼻からバラを出す面白い人はいないかな？ まあ、いるわけがないんですけどね。ここは現実であって、ゲームの世界じゃないわけだし）

天音は自分があり得ない事を考えている事が少しだけおかしいようで苦笑いを浮かべて、これから1年間、同じ時間を過ごす事になるクラスメート達が集まっているDクラスの教室のドアを開けると、

「あ、天音ちゃん、おはよう。同じクラスだね」

「おはよう。美紀ちゃん、1年間、よろしくね」

去年、とあるイベントで仲良くなった『玉野美紀』が天音の姿を見て駆け寄ってきて、2人で挨拶を交わし、

「ねえねえ。天音ちゃん、今度のイベントでコスプレして売り子をしてくれないかな？」

「良いですよ。どんなのですか？ あまり、露出の多いのは恥ずかしいですけど」

「大丈夫だよ。天音ちゃんなら、どんな服でも似合うから、一先ずはこんなのはどうかな？」

「こ、これはシェルドニアン学園の制服じゃないですか？ それも

こんな細部にまで気を利かせているなんて凄いです!!」

「これで驚いたらダメだよ」

「こ、これはシエルドニアン学園のサバイバル包丁!? す、凄
いよ。美紀ちゃん!!」

教室の席は特に決まっていなくて天音は美紀の隣にカバンを下
ろすと美紀としばらく話をしているがその内容は酷く濃く、2人の
周りにいた生徒達が2人から距離を取り始めた時、

『おはようございます。席について下さい。HRを始めましょう』

クラス担任が教室に入ってきて朝のHRが始まる。

（これと言って特徴的な人はいませんね。美紀ちゃんと……）

天音は始まったクラスメート達の自己紹介を聞きながら、特徴的な
クラスメート……言ってしまうえば1芸に秀でた生徒がいない事に少
しだけつまらなさそうにため息を吐き、

「美春は清水美春です。最初に言っておきますわ!! 男と言った
豚野郎と慣れ合うつもりはありませんわ!!」

（いた!! 面白いキャラクター!! どんな特殊能力があるの?
職業クラスを考えるとウォーリア/サムライと言った前衛タイプ
ね）

特徴的なツインテールをした少女『清水美春』が男子生徒全員を威
嚇するように叫び、天音は美春と言う少女を見て目を輝かせている

と、

「天音ちゃん、次は天音ちゃんの番だよ」

「あ、はい。ありがとう。美紀ちゃん」

天音の自己紹介の順番になったようで美紀がトリップ仕掛けしている天音の腕を突き、天音は美紀にお礼を言った後、立ち上がり、

「真海天音です。趣味はTRPGです。よく演じるキャラクターは冷静な軍師とかです。TRPGで培った戦術や戦略を駆使して試召戦争でクラスを勝利に導けるように立てた作戦が裏目らないように頑張りたいと思いますのでよろしく願います」

自己紹介を済ませるとクラスメートはTRPGと言う聞きなれない言葉に首を傾げているが、

「頼りにしてるよ。真海さん。最後は俺だね。今年、代表を任せられました。平賀源二です。上手くクラスをまとめられるかはわかりませんが一生懸命努力しますのでよろしく願います」

ざわつき始めているクラスメート達の言葉を遮るようにクラス代表である『平賀源二』が自己紹介を行いクラスメートの自己紹介が終わる。

第3問

(……代表は平賀源二くんか？ うん。言わせて貰えば指揮官としては無難なところかな？ 奇策とか奇襲は無理そうですね。そこは私がどうかフォローしましょう。それよりは……他の国と自国の戦力分析が重要ですね)

天音は自己紹介が終わると直ぐにノートを取り出して、現状で手に入れる事のできたクラスメート達の設定を書き込んで行き、試召戦争に使えるような設定をまとめていると、

「真海さん、何をしてるんだい？ ……戦力データ？」

「代表？ 待ってください！？ まだ、まとまってないんですから！？」

源二は天音の自己紹介で話をしておいた方が良いと思ったようで天音に声をかけると彼女が書いていたノートを見て首をかしげ、天音は慌てて隠すようにノートに覆いかぶさるが、

「いや、隠さなくて良いよ。それより、真海さんは本当に試召戦争をしたいみたいだね」

「それは、TRPGで培った戦略や戦術を使ってみたくて文月学園に進学したって言うのもありますから」

源二は天音の様子に苦笑いを浮かべると天音は少しだけ気恥ずかしそうに笑う。

「真海さん、それが戦力データだと言うなら、俺の得意科目や苦手科目とかを教えておいた方が良いかな？ 戦術や戦力を立てる上で必要になるだろ？」

「えっ！？ 代表、良いんですか？」

「うん。代表としてクラスの戦力を知るのは必要だし、俺はあまりゲームとかもするような人間でもないからそう言うのに詳しい真海さんがいてくれるのは心強いよ」

（……設定^{データ}の変更。代表は仲間を上手く使う術を心得ているか、最初から装備している。侮れないわ）

源二はクラス代表として天音に協力を仰ぎたいと言うと天音は源二の言葉に驚きの声をあげるが源二は当然の事だと言うと天音は口に出さないで源二の評価を少し上げると、

「みんな、悪いんだけど、試召戦争のデータ集めに協力してくれないかい？ 一先ずは得意科目と苦手科目……後は」

「総合得点も欲しいです。後は自分で思う自分の性格の長短所を」

「了解、総合得点と自分達の性格も教えて欲しい。試召戦争にかかわる事だから、なるべく全員が教えてくれると良いんだけど」

源二は自分だけではなくクラスメート達にも協力をして欲しいと言うとクラスメート達は代表である源二の言葉をむげにする事もできないと思ったようでぞろぞろと天音のそばに集まりだし、

「え、えーと、ま、待ってください。いきなり、こんなに設定^{データ}を渡

されても私はナヴァールでもマルセルでもないので処理しきれないです！？」

「天音ちゃん、落ち着いて。私も手伝うよ。みんな、メモ書きで良から自分の名前と代表が言った事をメモして持ってきてくれるかな？」

「……まったく、仕方ありませんわね。美春も手伝いますわ。豚野郎どもは美春の前に現れないでください！！ 豚臭いですわ！！」

「えーと、一先ずは男子は俺のところ。女子は玉野さんと清水さんのところ。真海さんはデータをまとめて」

「はい」

天音はクラスメート達が自分の周りに群がりだした事に直ぐに対処できないように慌て始めると天音の様子に美紀と美春が手伝いを申し出ると源二は美春の様子に苦笑いを浮かべながら、クラスを仕切りだす。

第4問

「どうだい？ 充分なデータは取れた？」

「そうですね。これで自国の戦力は把握できました。次は他国で
ね」

「まだ、やるつもりなのですか？」

クラスの戦力をまとめ終わると天音は次の行動に移りたいようにノ
ートを5冊取り出してA、B、C、E、Fの各クラスの戦力データ
と表紙に書き、美春は天音の行動に呆れたようにため息を吐くが、

「美春ちゃんはわかっていません！！」

「へ？」

「あ、天音ちゃんのスイッチが入った」

その一言が天音のおかしなスイッチを入れる事になり、

「良いですか？ 今はクラスに人が分かれたばかりの状況です。言
つてしまえばこの文月学園に新たな6つの国ができたと言って良い
でしょう。できたばかりの国と言う事はまだ国主は民の信頼を集め
ていません。それを手にいれなければ国を領土を守る事はできない
のです！！」

「……た、玉野さん、真海さんはどうしたのですか？」

「えーと、これから、ちょっと長くなるかも、スイッチが入ったみたいだから」

天音は美春に説明しなければいけない事があると言うと席を立ち、黒板の前に移動して黒板に大きく現状で各自が理解しなければいけない事を書きはじめ、美春は状況が理解できないように顔を引きつらせるが美紀は苦笑いを浮かべると、

「良いですか？ 文月学園のクラス分けは成績です。となると現状では私達は無策で上位クラスに挑んでも負けます。ですから、勉強をして回復試験を申請して成績を上げてから仕掛けるのが常道ですが、私が調べた情報^{データ}では、過去の進級時、4月の2年生の試召戦争の開戦データから見れば遅くても1週間以内に試召戦争が起きます。この確率は9割を超えます」

「1週間って、準備も何もできないじゃないか？」

「だからこそです。準備ができていないという事は戦術も戦略もありません。ただのぶつかり合いです。となると破壊力の差、すなわち、成績の差で下位クラスは押し切られるのは明らかです。しかし、クラスをまとめ切れる代表と戦略を立て実行する者の2人が居れば私達DクラスでもAクラスは無理ですが、Cクラス、いえ、Bクラスまでは駆けあがれます！！それを成すために必要なのはデータです。各クラスの重要な人物は？部隊を引きいれる人間がいるか？策を立てて実行に移せるだけの人間がいるか？それを知れば対処も撃退もできます！！だからこそ、私達は調べ上げないといけないんです！！データは常に正義です！！」

天音は近いうちに必ず、試召戦争が起きると告げ、そのために、今、行うべきはデータ収集だと黒板を勢いよく叩いて吠える。

「誰でも良いです。他のクラスに誰がいるか、今は曖昧な情報でもかまいません。それを調べて真実にし、そこから作戦を導き出せば必ず勝てます！！ 一気に駆け上がりましょう！！」

「……凄いね。わくわくしてきたよ」

クラスメート達にDクラス以外の事でわかる事を少しでも良いから教えて欲しいと言うとすでにDクラスの生徒達は天音の雰囲気のみ込まれているようで天音の宣言に同調するように叫び、源二は彼の中にある何かに火が点いたようで小さく口元を緩ませた時、

「失礼します。代表の方はいますか？」

Dクラスの教室のドアを頭の悪そうな少年が開け、キョロキョロと落ち着きがなさそうに教室の中を見回した後、代表である源二に用事があるようで代表を呼んで欲しいと言うと、

「……早速、きましたね」

「俺達に宣戦布告をしにきた使者だって言うのかい？ やっぱり、Eクラスかい？」

「いえ、Eクラスは例年、部活に力を入れている生徒達が集まります。ですから、Fクラスだと思います。代表、すいません。話し合いには私も同席させていただきます」

「ああ。こつちこそ、お願いするよ」

天音は教室に入ってきた少年がFクラスの宣戦布告の使者だと言う

と源二は少年と対談するために天音は源二に同席を願い出ると源二は大きく頷く。

第5問

「代表、ちょっと待ってください。誰か、使者を招きいれて相手をしていてください。すぐに試召戦争の話をせずに世間話でも良いです。そこから、クラスにいる人間を1人でも多く聞きだしてください」

「え？ 直ぐに対応しないのかい？」

「……はい。少し、彼を見極めたいので、それに知った名前が出てくれば、去年のクラスメートからその人間の得意科目、苦手科目を知ることができます。そこから、春休みを踏まえた成長率の計算など、情報^{データ}を手に入れる方法があります」

天音は直ぐに宣戦布告の使者に対応しようとするが天音は源二を引き止め、クラスメートに使者の相手をしていて欲しいと言うと2人のクラスメートが頷き、使者と軽い口調で雑談を始め出す。

「良いのかい？」

「……はい。さっきも言いましたが、彼の使者としての能力。捨て駒なのか、宣戦布告の使者をできるような状況を理解出来て即座に対応できる人物であるかを確認します……使者はFクラス『吉井明久』？」

源二は天音の行動の意味がわからずに首を傾げると天音は使者の能力を確認したいと言い、ノートを手にとると雑談から聞こえる使者とクラスメートの会話から使者は天音の予想通り、Fクラスからの使者であり、天音はFクラスのノートを選び、使者の口から出る言

葉1つ1つに集中し始めると使者が『吉井明久』だと聞き、天音は一瞬考えるような素振りをし、

「……真海さん、彼がどうかしたのかい？」

「……確か、吉井くんは『観察処分者』ですよ？」

「観察処分者？　クズですわね。バカの代名詞ではないですか？」

天音の様子に源二が何かあったのかと聞くと天音は使者である明久が『観察処分者』と言う肩書きを持っている事を確認するように聞くと美春はただのバカだと言うが、

「……いえ、油断しないでください。観察処分者は確かに成績には問題ありますが、召喚獣で先生達の仕事を手伝っている分、召喚獣の操作が上手いはず。その経験値を考えれば彼を倒すのは難しいでしょう。何か他の手段^てを考えるべきですね」

「そこまでの評価がいるのかい？」

「……召喚獣の操作性はかなり重要になると思います。彼をただの低得点者と油断すれば必ず足元をすくわれます」

天音は明久を見下すと自分達の首を絞める事になると言い、

「……そろそろ、頃合いでしょうか？　美紀ちゃん、美紀ちゃん？」

「……玉野さん、真海さんが呼んでますわよ」

使者である明久が世間話に飽きてきた様子が見えてきたようで天音

は次の段階に移ろうとしたようで美紀を呼ぶが美紀からの返事はなく、美春は美紀を肘で突き、

「ご、ごめんなさい。ちょっと、私の中の天使ちゃんに出会えたから」

「天使ちゃん？」

美紀は天音に謝るが彼女の視線は明久から外れる事はなく、天音は美紀の様子に首を傾げる。

「……美紀ちゃん、さっき見せてくれたサバイバル包丁を貸して貰いたいんですけど」

「う、うん。良いよ」

「玉野さん、大丈夫かい？」

天音は今は美紀がおかしい原因を追及する時ではないと判断したように美紀になぜか朝に話をしていたコスプレの小道具を貸して欲しいと言うと美紀は直ぐに返事をするが天音の話は聞こえていないようであり、源二は美紀に声をかけるが彼女の反応は薄く、

「真海さん、玉野さんはこのままで良いのかな？」

「……現状で言えば放置がベストです。このままでは代表と使者が対談しないで吉井くんが帰ってしまう可能性があります」

「そう？ それなら、真海さん、使者との対談に同席お願いするよ……あの、真海さん、どうして、髪型を変えてるんだい？」

源二は天音の美紀を放置しておいて良いのかと聞くと天音はそのままにしておいて欲しいと言い、源二は頷くと明久との話し合いに移ろうと天音に声をかけるとなぜか天音はサイドポニーまとめている髪どめを外して髪を下ろすともう1つ髪どめを取り出し、ロングヘアの1部を左右にまとめ始め、源二は先ほどから理解できない事ばかりのクラスの女子生徒の行動に顔を引きつらせると、

「気にははいけません。これは重要な事です。今から私が演じさせて貰うあの方に敬意を込める意味もあります」

天音は必要な事だと言うが、なぜか彼女の右手には一見、本物に見える包丁が握られている。

第6問

「ごめん、待たせたね。俺がDクラス代表の平賀源二です」

「Fクラスの使者の吉井明久です」

明久はDクラスにFクラスからの宣戦布告の使者としてきたのだが、直ぐにDクラスの代表とは話す事が出来ず、去年のクラスメート達と話をすればらくすると代表の源二が現れてお互いに頭を下げ、明久が顔を上げた時に、源二の隣に1人の少女が目映り、

(……かわいい娘だな？ な、何で、あの娘は手に包丁を持っているの！？)

明久は少女に一瞬目を奪われるが、その少女は何故か右手に包丁を握りしめている事に気づき、頭が処理しきれないようで顔を引きつらせると、

「Dクラスの真海天音です。Fクラスの使者の吉井明久くんですね。ちよっとお願いがあってなんですけど」

「な、何かな？」

天音は少しだけ恥ずかしそうに目を伏せて明久にお願いがあると言、明久は天音のかわいらしい仕草に一瞬、彼女が握りしめている包丁の事など頭の中から飛んでしまうが、

「あ、あの。試しになんですけど、殺してみてもよろしいでしょうか？」

（いま、目の前で何が起っているんでしょうか？）

天音の口から出た想像の斜め上を爆走する言葉に明久の血の気は一気に引いて行く。

「それじゃあ、逝きますね」

「ま、待った！？ ま、まずは落ち着こう。だいたい、僕は試召戦争の話し合いにきたのであってこんな事を！？」

天音は笑顔で包丁を振りかぶると明久は天音に落ち着くように言うが包丁は無情にも明久の机の上に乗せられていた手に向かって振り下ろされ、明久は寸前で包丁を交わすと一気に後ずさりして教室の壁まで逃げると、

「ダメですよ。宣戦布告の死者なんですから、見せしめにならないといけないんですから」

「ちょ、ちよつと、この人は何なの！？」

天音は焦点の合わない瞳で明久を見てくすくすと笑うと明久は天音の様子に声を上げるが、

「それじゃあ、さようなら」

「い、命だけは助けてください！？ な、何でもしますから！？」

天音は明久の事など気にすることなく包丁を握る手に力を入れると明久との距離を縮めて行き、明久は天音の出すいような様子に彼の

本能が生命の危機と判断したようでその場で土下座をして本気で命乞いをする。

「何でも？ それなら、死んでいただけますか？」

「そ、それは無しで！？ 無しでお願いします！？ 何でもします！！ 何でもしますから」

天音は包丁を明久の首元に押し当てて笑うと明久の命乞いはさらにみつともなくなっただけで行き、

「……あの包丁ってレプリカじゃなかったかな？」

「……迫真の演技ですわね」

天音と明久の様子にDクラスの生徒達はどしたら良いかわからないようであるが、

「そうですか？ 仕方ありませんね。ここで、私とする約束を守れますか？」

「ま、守ります！？ だ、だから、命だけは！？ 命だけは！？」

「わかりました。代表、それでは話し合いに移りましょう。吉井くんも座ってください」

天音はくすくすと笑いながら明久に命を助ける代わりに条件があると言うと天音の演技に完全に飲まれている明久は自分の身の可愛さに大きく頷き、天音は明久の返事に小さく口元を緩めると明久に包丁を握っていない左手を差し出し、明久は彼女の手を握り立ち上

がると天音は改めて明久を源二がいる場所に移動し、明久に席に着くように言う。

第7問

「それでは改めて始めましょうか？」

「は、はい！？」

天音は明久と対面する事なく、明久の隣に座るとコスプレの小道具の包丁でいつでも明久の喉元をかつ切れると言いたげに笑うとすでに明久の中では包丁は本物として認識されているようで顔を引きつらせたまま頷き、

「それじゃあ、吉井くんだったね。Fクラスから俺達Dクラスに宣戦布告って事で良いわけ？」

「Fクラスと私達の間にはEクラスがいるはずですが、私達を最初の相手に決めた理由はあるんですか？」

「い、いえ、ゆ、雄二が最初はDクラスを相手にすると言ったので」

源二は明久にFクラスが本当にDクラスに試召戦争を仕掛けるつもりかと聞くと天音は明久の隣で包丁を焦点の合わない瞳で見つめながら、Eクラスが相手じゃないのかと聞くと明久は天音に完全に怯えているようで『雄二』と言う生徒がDクラスを相手に選んだと言

い、
「雄二？それがFクラスの代表ですか？」

「は、はい。『坂本雄二』と言うゴリラにも似た不細工な男が僕達Fクラスの代表です」

天音は明久に雄二と言う生徒の名字を確認すると明久はFクラス代表のフルネームを『坂本雄二』と答え、

「坂本雄二？」

「真海さん、どうかした？」

「……いえ、『今』は良いです」

「そうかい」

天音はその名前に心当たりがあるようで小さくつぶやくと源二は天音に声をかけるが天音は他のクラスには情報^{データ}を渡したくないように『今』と言う部分を強調して返事をする^と源二も天音の様子に何か気付いたように頷く。

「それで、あの、試召戦争を受けてくれるのかな？」

「それは……」

「受けます。当然です。下位勢力からの宣戦布告は断れないルールですから」

明久は天音が隣にいるのが居心地が悪いように早く宣戦布告をして教室に戻りたいように宣戦布告を受け入れてくれるかと聞くと源二は天音の考えを聞きたいように彼女に視線を送ると天音はルールだからと頷き、

「そ、それじゃあ、開戦は午後からって事で、僕はこれで帰らせて

もらい!? な、何?」

「……下位勢力の使者の運命など決まっていますわ」

明久は逃げるようにDクラスを出て行こうとするがやはりDクラスの生徒は下位クラスのFクラスからの宣戦布告が気に入らないように美春を先頭にして明久の逃げ道を潰しており、

「ま、待つて!? は、話し合おう」

「話し合い? 必要ありませんわ」

「待つてください。吉井くんはFクラスからの使者です。暴力は止めましょう」

明久は話し合いを要求するが美春は話し合いをする気はないと言った時、先ほどまで迫真の演技で明久を翻弄していた天音がDクラスの生徒達の行動を止める。

「真海さん、どうしてですか? この豚野郎はFクラスから傷めつけても良いと言う前提で送られてきた使者ですわ。八つ裂きにして窓の外からぶら下げておいても何も言われませんわ」

「約束ですから、約束をきちんと守っていただければ、『命だけ』は助けるとそうですね? 吉井くん」

「は、はい!？」

美春は下位勢力の使者などどうしても言いと言うが天音は右手に包丁を握りしめて明久とは『約束』があると言うと明久は大きく首を

縦に振り、

「それでは約束です。Fクラスの人達に私達と何か話したか？ もしくはそれと似たような事を聞かれたら『何もなかった』と答えてください」

「そ、それだけ？」

「はい。その代わり、約束を破ったら試召戦争の勝敗に関係なく……あなたには死んでもらいますよ。吉井くん」

天音は明久を無事に帰す代わりの条件を話すと明久はたいした事ではなかったため、首を傾げるが天音は焦点の合わない瞳で約束を破った時の責任は覚えておいて欲しいと念を押し、

「わ、わかってます!？」

明久は大きな声で返事をする。と天音と自分へと暴力を振るおうとしていたDクラス生徒から逃げ出すように教室を出て行き、

「真海さん、あれで良いのかい？　なんか思っていたより、無理難題も出さなかったし、直接、Fクラスの事も聞けたんじゃないのかい？」

「いえ、あれで良いんです。代表や私が話を聞けば警戒するはずですから聞きだしたいものは手に入らない事が多いでしょうし、それに戦火の中で咲く花の種は任せていただきましたから、後は栄養を与えてあげるだけです」

源二は天音が明久との対談を早々に打ち切った事に違和感を覚えた

ようで天音に聞くが天音は小さく口元を緩ませ、

「開戦は午後からです。今はやれる事を全員で行いましょう!！」

右手の包丁を高く掲げて叫ぶとDクラスの生徒は天音の声に呼応する。

第8問

「……坂本さんの相手ですか？　どんな作戦を考えてくるでしょうか？　吉井くんから聞き出せたメンバーを考えると土屋くん、木下くんには気をつけないといけないでしょうし」

明久がFクラスの教室に戻った後、天音はクラスメイトからの他国ほかのクラスの情報収集を源二と美春に任せると明久が口を滑らせた情報からFクラスの戦力を分析しようとするがFクラス代表の『坂本雄二』の名前とそれ以外にも『土屋』と『木下』と言う生徒の名前をつぶやき考え込んでいると、

「真海さんはFクラスの代表の事を知っているのかい？　さっきは吉井くんの前では話したくなかったみたいだけど」

「代表？　はい。同じ小学校に通っていました。クラスが同じになった事はありませんが、当時は勉強のできるあまり可愛くない子供と言う印象でした」

「えーと、俺も噂くらいは聞いた事があるよ。神童って呼ばれていたんだよね？」

源二は他の男子生徒に情報収集を任せてきたようで考え事をしていて天音の姿に作戦を考えているのに行き詰っていると思ったようで彼女に声をかけると天音はFクラスの代表である雄二の事を知っているといい、源二も昔の噂を聞いた事があると言っ。

「はい。ある事件がなければ名門進学校である霜月大学の付属中学に入れたと言う話です」

「そんなに凄かったのに今は最低クラスなのかい？」

「はい……そのせいと言って良いかは私にはわかりませんが、中学時代はケンカばかりしていましたから、堕ちた神童、悪鬼羅刹と今も言われていますね」

「なら、そこまで、警戒しなくても良いんじゃないかな？ 今は最低クラスなんだし」

天音は同じ小学校出身と言う事で雄二がエリートコースから外れた理由を聞いた事があるようで眉間にしわを寄せると源二はあまり警戒する必要はないと思っているようであり、天音に気にしないように言うが、

「……いえ、彼を最低クラスと判断してはいけません。彼は小学生時代に高校の教科書でも勉強してしたとも聞きます。もしかしたら、今もその理解力は健在かも知れません。ただ……」

「ただ？」

「お勉強ができれば作戦を立てられると言うわけではないと言う事を教えてあげようと思います。私が昔、噂で聞いた彼ならば面白い戦いになると思います」

天音は雄二を危険な相手と認識していながらも雄二との対決を心待ちにしているようにも見え、

「面白い戦い？ 真海さん、クラスの代表として言うておくよ。あまり、試召戦争を私物化しないようにね。君が作戦や情報収集の重

要さを教えてくれた事には感謝してるけど、みんながみんな、君に従うかはわからないんだからね」

「わかってます。私ができるのは作戦や戦術を考えるだけです。それが実行できるかは皆さんしだい、そして、相手しだいです。だから、私は勝てる確率をあげる作戦や戦術を考えるだけです。Dクラス
の勝利のために」

「そうだね。わかっているなら良いよ」

「はい。フォーキャスター軍師だけでは戦争はできません。それを支えてくれる皆さんの事、守るべき国主だいひょうの事を考えた作戦や戦術を立てたいと思いますのでよろしくお願いします」

「うん。頼りにしているよ」

源二は天音にもっとクラスメート達の事を見て欲しいと言うと天音は承知していると大きく頷き、源二は天音がクラスのために頭を動かしているのもわかるようで天音に笑顔を見せる。

第9問

「……噂は広がってますね」

天音は明久に約束を取り付ける過程で明久の口から発せられた『命ごい』をしっかりと録音しており、その命ごいとともに明久が自分が補習室送りにならないために『Fクラスの生徒の情報』を引き換えにしたと言う噂を流しており、開戦を前にその噂は学年全体に広がり始めている。

「……吉井くんを安全に返したのはこう言う事かい？」

「卑怯だと責めますか？」

Fクラスとの試召戦争前に天音は最初のカードを切ると源二は天音の作戦に少しだけ不快感を覚えたようで眉間にしわを寄せると天音は自分でも卑怯な事をしている事を知っているようで表情を引き締めたまま答えると、

「……いや、作戦は任せると言う話もしたし、でも、こんな作戦では真海さんの信頼してもらえないとは思えないよ」

「しかし、策としては無難な策です。それに集めさせて貰ったFクラスの生徒の性格を考えるとこれ以上の策はないです。もしかしたら、こんな事をしなくてもみなさんはFクラスに負けないと言うかも知れませんが先ほども言わせていただきましたが、吉井くんは危険です。成績はあまりよくありませんがベル……西村先生を1年間困らせている実績は成績だけではない何かがあります。彼をクラスメートから引き離すのは必要な事です」

源二は卑怯な方法では天音がクラスメート達から信頼を得る事はできないと言うが天音はそれを知った上での作戦だと言い、

「代表、すいませんが開戦時に私は前線に出ます。クラスのみなさんから信頼を勝ち得るために後ろで策だけを弄しているわけにはいきませんから」

「……止めても無駄そうだよな」

「天音ちゃん、実は好戦的だしね」

天音は源二に頭を下げると開戦時は源二のそばで作戦や指示を出せない事を謝ると源二はため息を吐いて頷き、美紀は天音の行動に苦笑いを浮かべる。

「そ、そんな事はありませんよ!？」

「とか言いながら、召喚獣がどんな装備をしているかをみたいんだよね? 前線で戦えるなら、前線で指揮を執りたいんだよね?」

フォーキャスタール

「ち、違いますよ!?! 今回は軍師を演技したいから杖とローブが良いな? とか思ったり、でもでも、召喚獣はしつぽがあるから、ヴァーナっぱいから、ウォーリア系の装備の方が似合いかな? とか、考えてないです!! 素早い動きのヴァーナが縦横無尽に戦場を駆け抜ける姿を想像なんてしてません!!」

天音は美紀の言葉を否定しようとするが慌てたせいか、その口からは召喚獣がみたいと言う本音が駄々漏れであり、

「……何か、真海さんが試召戦争を心から楽しんでいる事はわかるよ」

「……ですわね」

源一と美春は天音の様子に大きくため息を吐き、クラスメート達は天音の慌てる姿に今までとは全く違う印象を持ったようで笑いをこらえていると、

「そ、そんな事はない事もないですけど！？　ち、違っんです！？　わ、私は戦闘好きじゃないです！！　で、でも、たまに『殺意様』が降りてきてしまう事があるだけで！？」

「いやいや、ここは否定しようよ」

「あ、あう」

天音はクラスメート達の視線に恥ずかしくなってきたようで顔を真っ赤にしてうつむいてしまい、

「……まったく、真海さん、行きますわよ」

「は、はい」

美春は天音の様子に少しだけ冷静にさせた方が良いと思ったように廊下近くまで天音を引きずって行く。

第10問

『吉井を殺せ！！』

『裏切り者には死の鉄槌を！！』

屋上で作戦会議を行っていたFクラス的主力メンバーである明久、雄二、『木下秀吉』、『土屋康太』、『姫路瑞希』、『島田美波』の6人が教室のドアを開けるとクラスメート達が次々と明久へ殺意を向けて襲いかかる。

「な、何！？ 裏切り者って、僕は何もしてないよ！？」

「お前達、落ち着け。いったい何があったんだ？」

明久はクラスメート達の様子に死の危険を感じ取り、顔を真っ青にして自分の無実を主張し、雄二はクラスメート達に何があったかと聞く。

『聞いてくれ。代表、裏切り者の吉井明久は宣戦布告の使者をした時に殺されそうになったから、自分の身の安全と補習室送りにならない事を条件に俺達の情報を売り渡した裏切り者だ！！』

「なんですって？ 吉井、あんたね」

「ちょ、ちょっと待ってよ！？ み、美波、落ち着いてよ！？ ぼ、僕はそんな事はしてないよ！！」

クラスメート達は天音が流した明久が自分の身の可愛さに自分達の

情報を売り渡したと言う噂を完全に信じているようで明久を血祭りにしなければ気がすまないようであり、明久を引き渡すように叫ぶと美波はその言葉を信じたようで明久の腕をつかむ。

「……なるほど、明久を無傷で帰してきたのはこう言う事か？」

「雄二、こう言う事とはどう言う事なのじゃ？」

「……簡単な事だ。本来、下位勢力からの宣戦布告の使者なんて上位クラスから見れば見せしめにリンチを受けるはずだ。俺も明久ならどうなっても良いから、明久を使者に立てたわけだしな」

「雄二、貴様、やっぱり、そのつもりだったんだな！！」

雄二は今の状況を全て理解したようで舌打ちをするとこの状況を収めるために自分が明久を宣戦布告の使者にした理由を話し始めるが明久は雄二の言葉が許せなかったようで彼を怒鳴りつけるが、

「役に立たないんだ。他に使いようもないしな」

「何だと！！」

「実際、その通りだろ。お前がぼこれればこんな不利な状況にならなかったんだよ」

雄二は明久を役立たずだと言い、2人はにらみ合いを始める。

「あ、あの。坂本くん、不利な状況と言うのはどう言う事でしょう？」

「ああ。明久は悪知恵が効くからな。中堅部隊の指揮を執って貰おうと思っただけだが、この状況じゃ、誰もこのバカの指示には従わないだろ。まあ、この程度では俺の作戦は崩せないけどな」

瑞希は雄二の言葉に不安そうな表情をすると雄二は小さくため息を1つ吐き、部隊を任せられる1人を潰されたと事を話すが彼は試召戦争前に策を弄してきた人間がいる事に少し楽しくなってきたように口元を緩めると、

「ちょっと、坂本、大丈夫なの？」

「当然だ。ただ、明久」

「な、何？」

「お前を嵌めたのはどんな奴だ？」

美波は試召戦争に勝てるのか不安そうな表情をするが雄二は強気なままだであり、噂を流した生徒の事を知りたいようで明久に声をかける。

「えーと、僕を無傷で帰してくれるって言ったのは、真海天音って娘だよ。えーと、一言で言うなら『殺可愛い』感じの女の子？」

「……殺可愛い？ 意味がわからないぞ」

「難しいんだよ。顔はもの凄く可愛いんだよ。背も小さくて一見、守ってあげたくなるような女の子だけど、背中に真っ黒な殺意をまとって……包丁を振り回していた」

「……明久、お前に聞いた俺がバカだった。現実と妄想が理解できないなんてな」

明久は雄二に天音の印象を話すが雄二は明久の言葉を信じる事なく大きなため息を吐く。

第11問

「美春は真海さんの指揮に従いますわ。ですから、落ち着きなさい」

「は、はい。すみません」

「始まりましたわ。行きますわよ」

美春は先ほどまでは自信に満ちていたはずの天音が小さくなっている様子にため息を吐き、天音が美春に頭を下げた時、試召戦争の開戦時間を告げるチャイムが教室に響き渡り、天音と美春を中心としたDクラスの先行部隊が廊下に駆け出して行く。

「あれですわね。真海さん、行きますわよ」

「は、はい。Dクラス真海天音」

「同じく、清水美春がFクラスの豚野郎どもに現代文勝負を挑みますわ！！ 試^{サモン}獣召喚！！」

「試^{サモン}獣召喚です」

美春は廊下の先にこちらに向かって駆け出して来ているFクラスの生徒を見つけると天音に声をかけて2人で召喚獣を呼び出すと天音と美春の足元には機械的な魔法陣が描かれ、『ポン』と言う小さな音とともに2体の召喚獣が現れ、天音の召喚獣は1対の魔^{キャリバー}導銃にレザージャケットを装備したガンナータイプ、美春の召喚獣はグラディウスにロリカ・セグメンタタを装備したローマの剣士タイプである。

「行きますわよ……し、真海さん？」

「み、美春ちゃん、見て。か、可愛いよ！！ 私の召喚獣は魔導銃だよ。それも双銃仕様だよ！！ レザージャケットだし、これはヴァーナのサブクラスはガンスリンガー、メインクラスはウォーリア？ それとも、シーフが良いかな？ いや、ツヴァイクンと同じが良いからメインクラスをウォーリア、サブクラスをガンスリンガーに決まりだよ！！ 美春ちゃんの召喚獣はメインクラスはウォーリア、サブクラスはサムライかな？ こっちはあつちは？」

「……真海さん、落ち着いてください」

美春は呼び出された召喚獣を見て、Fクラスに攻撃を仕掛けようとするが天音はこの場に呼び出された召喚獣を見てテンションが上がっているようであり、美春はそんな彼女の様子に頭を押さえる。

「す、すいません。それでは行きます。良いですか！！ 点数差がありますからFクラスは連携をとってきます。必ず、1対1、もしくは点数差があってもこちらに人的優位立つようにしてください！！」

「了解しましたわ！！ 真海さんは装備が銃なのですから、後ろに下がってください！！」

天音は美春の声に冷静になったようで、大きく深呼吸をするとDクラス生徒に指示を出し、美春とDクラスの生徒はFクラスの生徒に向かい駆け出して行く。

『良いか！！ 代表の言っていた通りにまずは指揮官を潰すんだ！』

！ 指揮官はあの銃を装備した召喚獣を使う奴だ！！」

「真海さん！！ 逃げてください！！」

「……美春ちゃん、違いますよ。これは銃ではなく、キャリバー魔導銃です。そして、武器を持った人間が後退する事などあってはいけません！ 戦士は常に顔をあげて戦場を見据えるべきです！！」

Fクラスの生徒は指揮官を先に潰すように指示を出されているように天音に向かい、5人の生徒が天音に飛びかかるように攻撃を仕掛けてくるが天音の召喚獣は後方に飛び、空中でキャリバー魔導銃の引き金を引くと、

「……なるほど、行けますね」

キャリバー魔導銃の銃口からは光が放たれ、Fクラスの生徒の召喚獣を撃ち抜いて行き、その様子に天音は口元を小さく緩ませると天音の召喚獣は着地と同時に3体の召喚獣に囲まれて押され始めている美春の召喚獣の援護に駆け出していく。

第12問

『指揮官が駆け出してきたぞ!! 狙え!!』

「真海さん、何をしていますのですか!？」

天音の召喚獣が駆け出す様子に気づいたFクラスの生徒達の召喚獣は天音の召喚獣に群がるが、

「……甘いです。ガンスリンガーが後方でしか攻撃をしないとかわないでください」

「戦死者は補習!!!!!!」

天音の召喚獣は魔導銃キャリアーの銃身で攻撃を受け止めると後方に飛び、次々とFクラスの生徒の召喚獣を撃ち抜いて行き、Fクラスの生徒は西村教諭に補習室に運ばれて行く。

「あ、あの。真海さん、あなたは どうして、そんなに召喚獣の扱い方が上手いのですか？」

「どうして? 決まっています。それはキャラクターにこの子に向けた『愛』です!!」

「そ、そうですか」

美春は天音の召喚獣操作が自分を含めた生徒達より、1ランク以上上手い事に疑問に思ったように首を傾げると天音は何の迷いもなく言い切り、天音以外の生徒はDクラス、Fクラスともに天音の様子

に少しだけ気落とされたようで彼女から1歩下がると、

「行きますよ。美春ちゃん！！　今が攻めどきです！！　戦場に出
ていながら、自分の身を守るだけにしか剣を振るえないような人達
に負けるわけにはいきません！！」

「は、はい。わかりましたわ」

天音はFクラスの様子にDクラスに突撃指示を出し、Fクラスの生
徒は次々とDクラスに狩られて行き、

『ちっ！？　撤退だ！！　戦線を下げるぞ。　木下の部隊に援護を頼
むんだ。　点数が減った人間は回復試験を』

「真海さん、追いかけますか？」

「……いえ、私達の点数も減っています。私達はFクラスより、戦
場に出てきた生徒は少ないです。それにあまりにもFクラスの生徒
達が不甲斐無いですから、このまま攻め込んでしまうと伏兵が待ち
構えていて足元を救われる可能性もあります。教室に伝令、部隊を
入れ替えましょう。中央階段は他の階に伏兵を潜めてあり、私達が
先行した場合に挟み撃ちにされる可能性があります。この場所です
ばらく待機します。増援部隊が合流したら点数の減りの激しい生徒
は回復試験にそれ以外は伏兵の確認に移ります」

Fクラスの先行部隊は撤退を始め出し、Dクラスは前のめりになり
ながらFクラスを追いかけようとするが天音は伏兵を警戒している
ようで中央階段の手前で部隊を止めて教室に伝令を出す。

「……………真海天音を発見。伏兵も読まれている」

「……そうか。戦術がわかる奴がいるとはな。前のめりになつてくれれば戦力を削れたんだがな」

Fクラスは天音が警戒していた通りに伏兵を用意していたようで伏兵部隊を率いていた康太は無線を使用して代表の雄二に連絡を取ると無線機の先で雄二は舌打ちをした後、

「ムツツリーニ、伏兵が読まれているなら、ばれないように伏兵を撤退させる。伏兵がいるように思わせればそれで良い。その場所ですまってくれば俺達にとって好都合だからな」

「……………了解、伏兵を撤退させる」

「後はお前の情報網でわかる事で良い。教室に戻ったら真海の情報を見せてくれ」

康太に伏兵の撤退を伝え、康太達伏兵部隊はDクラスから仕掛けられる前に撤退を開始する。

第13問

「……そうか」

「雄二、真海さんについて何かわかったの？」

雄二は康太から、天音の情報を聞いて眉間にしわを寄せると明久は雄二が次の作戦を思いついたのかと聞くが、

「……真海天音か？ まったく、どう言う人間かわからん」

「そうなの？」

雄二は康太の情報と伏兵を読んだり、宣戦布告の使者を逆手に取った天音の人間像が重ならないようであり、大きく肩を落とす。

「ムツツリー二が持っていた。去年の真海の情報では真海はおつとりとした人間だ。わかりやすく例えるなら姫路タイプだろ。それなのにさつきは前線で部隊を指揮するだけではなく、先陣に立っていた。それどころか、明久をはめて、こつちに楔まで打ってきたんだぞ。戦術とか戦略とかわかるように思えるか？ もしかしたら、真海を使つて裏で作戦を立てている人間がいる可能性もあるしな」

「確かにね。仮にどつちかが演技だとしたら、秀吉と同程度の演劇の才能があるって事だよな？ 秀吉、真海さんって演劇部じゃないの？ それとも、本気で僕を殺そうとしていたのかな？」

「うむ。まったく、聞いた事はないのじゃ。仮に明久の言う通り、それが演技だとしたら、勧誘したいところなのじゃ」

雄二が天音の人間像が見えないと言うと明久はDクラスでの天音から向けられる殺意を思い出したようで血の気が引いてきたようで顔を真っ青にすると教室は天音をどう言う扱いをして良いのかわからないように首を傾げるが、

「まあ、だからと言っても俺のとおきの作戦は読み切れないだろ。戦況にはまったく問題はない。秀吉、島田は戦線を維持する事に力を注いでくれ。戦死者はなるべく出さないように入れ替えながらだ。明久、お前も付いて行け。お前は罠にはまったんだ。華々しく戦死でもしてこいよ」

「戦死しろ？ いやだよ。僕は観察処分者なんだから、攻撃を受けると痛いんだよ」

「良いから行け。少なくともそんな事を言っていたら、勝っても負けてもFクラスにお前の居場所はないと思え、次の試召戦争はお前にやって貰う事もあるんだ。少しでも信頼回復する事を考えろよ」

雄二はそれでも自分達Fクラスの勝利は揺るぎないと思っているようにであり、秀吉、美波に指示を出すと明久には死んでこいと言い、明久は観察処分者には召喚獣の受けたダメージが召喚者にも反映されるため、嫌そうな表情をするが雄二は明久の信頼を少しでも回復させる必要があると言う。

「……わかったよ。行けば良いんだろ」

「明久、お主は召喚獣の操作が上手いのじゃ、頼りにしておるのじゃ」

「う、うん」

納得はいかなさそうな明久の様子に秀吉が声をかけると明久は何故か頬を赤く染めて頷き、3人は廊下に駆け出しに行き、

「ムツツリーニ、引き続き、真海の情報調べてくれ。どんな些細な事でも良い。他にも真海を使って自分は裏で策を弄している奴はいないかもだ」

「……………了解」

雄二は3人の背中を見送ると教室に残っていた康太に引き続き、天音の情報収集を頼み、康太は教室を出て行く。

第14問

「……伏兵はなさそうですね」

「と言うより、撤退したって感じですね。わざとらしく、人がいる形跡を残してあります」

Dクラスの増援が合流し、天音と美春は数名の生徒を連れて中央階段から伏兵を警戒するために他の階を見て回るがFクラスの生徒は見えない。

「撤退ですか？」

「はい。伏兵は成功すればかなり有効な手段ですが最初の攻撃で私達が勢いに任せたまま中央階段を超えなければ置いておく意味がないですから」

「……あのまま、進んでいたら挟み撃ちになったと言う事ですか？」

「そうですね……」

天音はDクラスに伏兵を意味がなくなった事を説明すると次の雄二の手を考え始めるがこれと言ったものは出てくる事はなく、

「一先ずは1度、生徒を残して教室に帰りましょう。坂本くん最後の1手を予測しないといけません」

「最後の1手ですか？」

「はい。先ほど、集めさせて貰ったデータから考えるとFクラスで代表を倒せるのは現状で言えば土屋くんの保健体育のみ、後は2人もしくは3人で代表に襲い襲いかかる事、Dクラスは新校舎の隅ですから、保健体育のフィールドを展開するのは警戒ができます。現状の成績差では2人か3人を無傷で代表のところまで運ぶ戦力はFクラスにはありません。勢いに任せた突撃は無謀です。私がFクラスの指揮官ならこんな愚策以下の策は執りません。坂本くんの事ですから勝機があつてDクラスにしかけてきたはずですよ。見落としていた情報^{データ}がある可能性があります。ですから、情報^{データ}の見落としも考えられるので確認に戻りたいと思います。それに1つ、あまり信じたくない噂を思い出しました」

天音は集める事ができたFクラスの情報^{データ}からでは決め手がないため、状況を確認するために教室に向かい歩き出し、美春は天音の後を追いかけて行く。

「真海さん、どうしたんだい？」

「天音ちゃん？」

「……」

中央階段を完全に抑えているため、天音と美春は安全に教室まで戻ると源二と美紀が天音に声をかけるが天音は右手の人差し指を立てて口元に運び、静かにするように2人に頼むと、

「回復試験をしておこうと思ったんです。補習室はやっぱ嫌ですから、戦った限りはFクラスは突撃しかできないようですから、どうやら、作戦も立てられない。もしくは作戦を覚えられないくらいの脳容量しかないみたいです」

『……………Fクラスにいる土屋くんは盗聴をしていると言う噂を聞いた事があります。坂本ちゃんと土屋くんは1年時にも同じクラスですし、その噂が本当かどうかはわかりませんが警戒する必要はあります。適当に話をして必要な事は筆談でお願いします』

天音は口ではFクラスをバカにするように言うが、何かを警戒しているようでクラスメート達に見えるように黒板にクラスメートに本当に伝えたい事を書き込み、

「それじゃあ、特に何も考えないでDクラスに仕掛けてきたって言うのかい？」

『……………流石にそれはないと思うけど』

『……………待て。平賀、俺達も盗聴や盗撮には心あたりがある。もしかしたら、その土屋ってヤツが寡黙なる性職者^{ムツリーニ}かも知れない』

源二は天音の警戒はやりすぎだと言いながらも天音の指示に合わせて男子生徒達がざわざわとし始めた後に天音の言っている事は正しいかも知れない事を源二に知らせる。

第15問

『……』

『天音ちゃん、『……』は書く必要はないんじゃないかな?』

『気分です』

天音はクラスメートの言葉に少し考えるような素振り見せるとそれを表現したいようで黒板に『……』と書き、美紀は苦笑いを浮かべながら天音にツツコミを入れる。

『……となるとやはり、教室の会話^{こわい}は聞かれている可能性は高いですね。重要な事は筆談でお願いします。後は余計な事を話してください……違いますね。なるべく、私達が油断しているように見せかけるため、Fクラスをバカにしてください』

『待ってください。試験召喚戦争中に盗聴なんてバレたら停学ものですわよ』

『……携帯電話でも停学だしね』

天音は盗聴はあると判断してクラスメートに指示を出すが源二と美春はそこまでの危険を起こしてこないと思っているようで天音にそこまでの警戒は必要はないと言いたさそうである。

『そうです。バレたら停学ですがバレなければ合法です。手段を選ばなくても良いのなら、正直、私も情報^{データ}収集に使いたいです』

『いや、代表としてそれは止めさせて貰うよ』

『……仕方ありませんわね』

源二は合法だと言い切る天音の姿にため息を吐き、美春は何かあるのか自分の席に移動すると自分のカバンを漁り始め、

『美春ちゃん？』

『……盗聴器、ありますわ』

『……清水さん、それは何？』

『気にしないでください』

美春はカバンから小さな機械を取り出して電源を入れるとその機械は小さなノイズ音を発し、美春は盗聴器がある事を確信したようである。

『……真海さん、美春は盗聴器の取り外しにかかりますわ』

『……美春ちゃん、お願い。偽情報を流すのに使えるから壊さないでね』

『了解しました』

美春は天音に視線を送ると天音と美春の中ではアイコンタクトが成立したようでお互いに親指を立てて意志の疎通を確認すると源二は付いて行けないようで大きくため息を吐く。

『代表、皆さん、情報の整理をしたいと思いますので協力をお願いします』

『『『『了解』』』』』

『情報収集の範囲を狭めます。土屋くん以外で、Fクラスの生徒、及び、知り合いのFクラス候補で1教科だけでも得点が高い生徒を知っていたら教えてください。言い方は良くないのですが去年の成績が悪い人間がFクラスに固まっているはずです。去年のクラスメートでバカだと思った生徒は十中八九いるはずです。Aクラスとは逆の意味で情報は集めやすいはずです』

天音は改めてFクラス生徒の情報を集め始めるとすでにその頃にはDクラスの生徒達はおかしなテンションになっているようで筆談はすでにノリノリになってきており、

『……このクラスは本当に大丈夫なのかな？』

『代表、みんな、楽しんでるし、良いんじゃないかな？ 試召戦争で空気がピリピリしてるよりは楽しいと思うよ。天音ちゃん、私もデータ分析を手伝うよ』

『美紀ちゃん、お願いします』

源二はクラスメート達の様子に肩を落とすと美紀は心配ないと声をかけると美紀の言葉に多くのクラスメート達は苦笑いを浮かべながら頷き、

『……わかったよ。クラスの意見を聞くのも代表の仕事だね。真海さん、俺も手伝うよ』

源一は1度、ため息を吐いた後に美紀と一緒に天音の手伝いを始める。

第16問

(……試召戦争が始まって1時間ですね。しかし、Fクラスの戦い方がおかしいですね。仕掛けてきたわりには戦闘の意思が見えませんが、前線ではなく、^{クラス}国単位で凄味が感じられません)

Fクラスとの試召戦争が始まって1時間が経つが試召戦争は最初の一当てからは特に激しい戦いもなく、天音は集めたFクラス^{データ}の情報を見つめながら眉間にしわを寄せる。

(……改めて集めた情報^{データ}から見れば、Fクラスで代表を単体教科で倒せそうなのは土屋くんの保健体育、これは学年トップレベル。そして、島田美波さん、美春ちゃんが言うにはドイツからの帰国子女で日本語が読めないからFクラスに入ったはずだと言う事、日本語の少ない数学はBクラス程度。目だった成績をとっているのはこの2人。島田さんは数学の成績を考えれば元々の頭は悪くないと思うけど……『彼氏にしたい女子ランキング』の上位入賞者と言う事を考えると作戦系はダメだと思って良い)

天音は新たに手に入れた『島田美波』^{データ}の設定から警戒は必要ではあるが戦況に影響はないと判断したようでノートに書いてあるFクラス代表『坂本雄二』の名前に目を止め、

(……何を考えているんだろう？ こう言う時は初心に戻ると良い考えが浮かぶんだよね。Fクラスの情報^{データ}を見れば奇襲や奇策でしかDクラスには勝てないはずなのにこんなに時間をかけて?)

天音は初心に戻ろうと生徒手帳の試召戦争のルールを開いた時に彼女の思考は何かに行きついたようで確認するかのように勢いよくノ

ートをめくり、まとめてあるFクラスであろう生徒達の名前を全て確認して行くと、

（……これって、そう言う事？ 盲点だった。完全に頭から排除してた）

『……天音ちゃん、何かわかったの？』

天音は勢いよく立ちあがると美紀が筆談で質問し、天音は大きく頷くと黒板の前に移動する。

『真海さん、何かわかったのかい？』

『はい。これはまだ予想の域を脱していませんが、Fクラスには成績上位者が紛れ込んでいます』

『真海さん、何を言い出すんですか？』

天音は黒板の前に移動するとFクラスに成績上位者がまぎれている可能性を示唆すると誰も信じられないようにで教室はざわざわとし始めるが、

『単体教科や去年の情報^{データ}、Dクラスとの成績の比較から考えるとFクラスの総合点数1000点以下だと推測します』

『それなら、成績上位者がいるわけがありませんわ』

『これは仮定の話です。まだ、確証はありません。成績上位者がFクラスにいるとします。その成績上位者はどうしてFクラスにいますか？』

天音はFクラスに成績上位者がいるとしたら何があるかと聞くが誰も思い浮かばないようであり、

『1つはなりたかったから、Fクラスに入った。試召戦争をやつて下位クラスから一気にAクラスまで駆け上つてみたい。上がいればいるほど燃える迷惑なタイプの人間』

天音の黒板に書いた言葉は誰かと重なったようであり、クラスメイト達は全員で天音を指差し、

「ち、違います。私は殺意になんか溢れていません!？」

天音はクラスメートの行動に恥ずかしくなったようで筆談をしていた事など忘れて顔を真っ赤にして声を張り上げる

第17問

『真海さん、落ち着いて。話を続けて』

源二は苦笑いを浮かべると天音の肩を叩き、ノートに書いた言葉を見せると天音は1度、大きく深呼吸をし、

『成績上位者のこのタイプは正直、どうでも良いです。Fクラスの坂本くん相手だと衝突してたいした結果は出せません』

『天音ちゃん、どうして、そんな事を言えるの?』

天音は戦闘的な成績上位者は雄二とはそりが合わない決めつけ、美紀は首を傾げる。

『坂本くんは言い方が悪いですけど、今も昔を他人をバカにしています。昔は神童だったから、自分以外はバカ、今は元神童の俺が本気を出せば他の人間が敵うわけがないって感じです。そのため、あまり、友人と言える人間がいません。使者にきた吉井くと去年のクラスメートからの話、私の過去の記憶を総合した結果です』

『それはムカつきますわね』

天音は雄二が人を見下していると事をクラスメートに伝えると美春を中心にした多くのクラスメート達は不機嫌そうな表情をする。

『好戦的な成績上位者はバカだと思っている生徒を上手く使う気であるだけであり、目障りな代表は邪魔者以外の何者でもありません。まあ、指揮系統を見ると対立をしている様子はありませんから、こ

のタイプはいないと判断して良いでしょう』

『なら、他にどんなタイプの成績上位者がいるんだい？』

『代表、思い出してください。文月学園^{ウチ}は何主義ですか？』

『実力？ ……違うね。実戦主義かな？』

『そうです。実戦主義なんです。いくら、テストで良い点を取つていようとそれが本番で生かせなければ意味がない』

天音は源二に文月学園が掲げているものは何かと尋ねると源二は自信がなさそうに答え、その答えは天音が求めていたものであり、彼女は大きく頷き、

『『彼女』は振り分け試験で欠席もしくは途中退席をして総合得点が0点の生徒です』

『彼女？ 真海さんはそれが誰か予想は付いているのかい？』

『誰なんですか？』

天音は雄二が隠し持っているのは振り分け試験を受ける事が出来なかった生徒だと推測するとクラスメート達は天音の次の言葉を待っているように息を飲み、

『……姫路瑞希、彼女がFクラスのジョーカーです』

天音は黒板に『姫路瑞希』と大きく書くとその名前を教室のクラスメート達は全員知っているように驚いたようにだが声を漏らさないよ

うに口を両手で塞ぐ。

『待つて。真海さん、どうして言い切れるんだい？』

『先ほども言いましたがFクラスとAクラスは情報を集めやすいんです。その中で得た情報です。彼女は身体が弱いと言う設定が書かれています』

天音は先ほど集めた情報データにあつたとAクラス候補の生徒のノートを見せると瑞希のページには『病弱』と記されており、

『誰か、振り分け試験で姫路さんと同じ教室で試験を受けた方はいませんか？』

『……そう言えば、振り分け試験は一緒じゃなかったけど、試験が終わった後に吉井が姫路が倒れたとか、その時の教師の対応が悪かったとか文句を言っていたな』

『そう言えば、俺も聞いた』

天音は情報データに信憑性を持たせたいようで瑞希と同じ教室で振り分け試験を受けた生徒を探すと天音の言葉に去年、明久と同じクラスだった生徒が手を上げ始め、

『……決まりですね。代表、これから、全軍を持つての総攻撃を提案したいと思います』

『待つてよ。真海さん、姫路さんがいるかも知れないならもつと慎重にならないと』

『違います。代表、時間を伸ばすと彼女の点数が上がるんです。試験戦争が始まって1時間弱、開戦後から回復試験を受け始めたとして現在は2教科目です。総合得点勝負にすれば彼女は倒せます。彼女の受けたテストで仕掛けられても直ぐにその教科以外に替えれば彼女は倒せます。時間がありません。代表、出撃許可を』

『……わかったよ。Dクラスは全軍を持ってFクラス坂本雄二の首を獲る。真海さん、前線の指揮は任せるよ』

天音は総攻撃を源二に提案し、源二は時間をかけられない今の状況ではリスク覚悟にならないといけない事を理解したようでDクラスに総攻撃の指示を出す。

第18問

『それでは指示を出します。美春ちゃん、集めた盗聴器はどこですか？』

『ここにありますが、どうするつもりですか？』

天音は美春に取り外した盗聴器の事を聞き、美春は集めた盗聴器を指差す。

『天音ちゃん、何をするの？』

『せっかくの盗聴器ですから利用させて貰おうと思って、私達がFクラスを舐めていて全力で仕掛けるつもりはなく、ほとんどの生徒が教室に残っているように見せかけます』

『見せかけるって、どうするつもりですか？ 美春達は全員で総攻撃をかけるのではないですか？』

天音は懐からボイスレコーダーを取り出すと先ほどまでの教室の会話を録音していたようでFクラスをバカにする会話を盗聴器が音を拾うように配置を始め出し、

『……真海さん、どうして、そんなものを持っているんだい？』

『TRPGプレイヤーとして当然の持ち物です。キャラクターを演^ル技した時の会話を残しておくために必要な物です。そうやってキャラクターに『魂』を込めて自分とキャラクターに一体感を持たせて行くんです。標準装備品です。これを持っていないプレイヤーはキ

ヤクターにおける『愛』が足りません！！　ここは重要なので覚えておいてください』

源二は状況が理解できないように眉間にしわを寄せるが天音にとってはボイスレコーダーは絶対に欠かせない物のようで黒板に書かれた『標準装備品』のところには赤いチョークで二重下線が引かれている。

『そ、そうなのですか？』

『当然です！！』

『天音ちゃん、暴走気味だから落ち着いて』

天音は何かに火が点いたようで拳を握り締めるとその姿に若干、教室にいる生徒達は引き気味になり、美紀は苦笑いを浮かべて天音に落ち着かせようとし、

『……それでは次の行動に移りましょう。私達は部隊を3つに分けて少し、時間をあけて中央階段まで移動します。最初の部隊は私と美春ちゃんが率います。次は美紀ちゃん、最後は代表にお願いします』

『3つに分けて移動するのかい？　短期決戦じゃなかったのかい？』

天音は美紀からの言葉で自分を落ち着かせようと大きく1度、深呼吸をして戦闘前に高ぶった気持ちを落ち着かせ、総攻撃の前に教室に残っているDクラス生徒を3つに分けると事を伝えると源二は天音の作戦の意図がわからないように首を傾げる。

『最初の部隊が中央階段前に陣取り、今の部隊を4階に上げます。第2陣は2階に第3陣が到着したら、私達と代表の部隊は前進、2階と4階の部隊はFクラスの後方に回り込みます』

『挟み撃ちと言うわけかい？』

『そう言う事です。私と美春ちゃんが教室に戻ってくる前に伏兵がない事は確認してあります。まあ、元々、少数を伏兵に残して置くほどの予備兵力も火力もありませんけど』

『ええ。他の階の新校舎を確認させていただきましたわ。旧校舎も大部、奥まで行きました』

天音はFクラスの残りの戦力も計算しているようであり、美春も天音とともに行動していたため、伏兵は気にする必要はないと言い切り、

『それでは行きましょう』

『ええ』

天音と美春はDクラスにいた生徒の3分の1を引きつれて教室を出て行く。

第19問

「それでは健闘を祈りますわ」

「美春ちゃんも、天音ちゃんもね」

中央階段の後ろにDクラス全員が集まると美紀は所定の位置に移動を開始しようとする。

「……美紀ちゃん、戦闘開始は5分後です。こっちに注意を引きますからよろしくお願いします」

「うん。天音ちゃんもね。そうだ。天音ちゃん、良い事を思いついた。美春ちゃん、美春ちゃん、こっち来て」

「何ですか？」

天音と美紀は作戦の成功を確認すると美紀が何かを思いついたように美春を呼び寄せ、

「美春ちゃんも……」

「な、何を言っているのですか！？ なぜ、美春がそんな事を」

「良いから、良いから、天音ちゃん」

「私がかまいませんけど」

美紀は天音と美春の耳元で何かを頼み、美春は美紀の言葉に慌てる

が美紀は美春の背中を押して天音、美紀、美春の3人は顔を見合せて小さく笑みを浮かべると、

「『みなさんに女神アリアンロッドのご加護がありますように』」

3人は天音がよく遊んでいるTRPGの神に祈るように声を合わせると3人の様子にクラスメート達は一瞬、息を飲み、

「それじゃあ、3人の戦乙女が勝利に導いてくれる事を信じて総攻撃と行こうか？ みんな所定の位置に移動して」

『……まったく、代表までのせられるのかよ』

『まあ、せつかくの美少女3人が勝利を願ってくれたんだし、気合を入れられないとな』

『何？ 3人のためだけ？ 真海さん、玉野さん、清水さん、わたし達もやる。みんなでやろうよ』

源二は苦笑いを浮かべながら総攻撃の準備を指示するとDクラスの生徒達は総攻撃の前の割には落ち着いており、

「やりませんわ。こんな恥ずかしい事は2度としませんわ!!」

「流石にちよつと恥ずかしかったね」

「そうですね」

美春は盛り上がる女子生徒陣に恥ずかしいようで顔を真っ赤にする

と天音と美紀もちよつとだけ恥ずかしかったようで苦笑いを浮かべる。

「天音ちゃん、美春ちゃん、行ってくるね」

「はい」

美紀は自分の部隊を所定の位置に移動して行き、

「……それじゃあ。真海さん、行こうか？ Dクラス、進め！！」

「はい。Dクラス、真海隊、清水隊、動きます。一気にFクラス本陣まで攻め込みます！！ 良いですか、注意すべきは土屋くんの保健体育、島田さんの数学、この2教科は避けてください！！」

「良いですか。無駄な時間はかけられませんわ。一気に行きますわよ！！」

源二は総攻撃の指示を出すと、天音と美春はDクラスの生徒を鼓舞すると旧校舎に駆け出していく。

『な、何だ！？ Dクラスが攻めてきたぞ！！』

「Dクラス、真海天音隊」

「同じく、清水美春隊がFクラスに化学勝負を挑みますわ！！」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

Fクラスは戦況が膠着状態になっていたため、油断をしていたよう

で、天音と美春の部隊の突撃に一瞬、対応が遅れ、廊下に陣取っていたFクラス一気に半減し、

『ちっ、不味いぞ。後ろに増援と奇襲の連絡を！？』

「……すいませんが、そんな事はさせません」

Fクラスの部隊長の1人が援軍要請とDクラスの強襲を伝えようと指示を出そうとするが天音の召喚獣の持つ1対の魔導銃からは光が放たれ、Fクラス部隊長の召喚獣を撃ち抜き、

「Dクラス本陣、真海さんと清水さんの部隊の援護を！！」

遅れて戦場に現れた源二が率いるDクラス本陣がFクラス前線部隊をすり潰し、Fクラス前線部隊全員を補習室送りにする。

第20問

天音と美春の部隊が前進するとFクラスの部隊が立っているがDクラスの突撃により、Fクラスの前線部隊が全滅した様子を見ていたためか、完全に浮足立っており、

「美春ちゃん、行きますよ!!」

「ええ」

すでにDクラス突撃部隊として連携を重ねている天音と美春の2人は流れるようにFクラス生徒を補習室送りに行き、

「……みなさん、そろそろ、援軍が来ますよ」

「全員、突撃じゃ!!」

天音はFクラスから増援が来る頃合いだった時、爺言葉でFクラスから突撃指示が出る。

「……爺言葉？ あれが木下くんですね？ 他には吉井くんと」

「そこにいるのは美波お姉さま!!」

天音は援軍にきたFクラスの生徒を自分の頭にある情報データと重ね合わせ始めると美春が女子生徒を見て目を輝かせ、

「美波お姉さま？」

「み、美春!？」

天音は美春の様子に首を傾げると美春の視線の先にいる女子生徒は美春を見て、後ずさりを開始する。

「美波お姉さま? ああ、美春ちゃんが言っていた。島田さん」

「こ、こっちに來ないで!? ウ、ウチは男が好きなのよ!? あんたも納得してないで助けなさいよ!？」

美春は試召戦争など関係なくなつたようで召喚獣と一緒に想い人『島田美波』に飛びついて行き、天音は2人の様子に納得が言つたようでポンと手を叩くと美波は天音に助けを求め、

「そんな事はありません!! お姉さまは美春の事を愛してくれてゐるはずです!！」

「そうなんですか。本当に同性愛つてあるんだ。初めて本物を見ました。美紀ちゃんがいれば喜んでくれたよね」

「ちょ、ちよつと、勘違いしないで!? ウチはノーマルだから!？」

天音は同性愛があるんだと頷くと美波は全力で否定するが、

「美春ちゃん、私、お友達として応援します。世間が、周りが認めてくれなくも私は美春ちゃんと島田さんを応援します」

「ありがとうございます。真海さん、いえ、今から美春は真海さんを友達として天音と呼ばせて頂きますわ!！」

天音は美春の事を両手を握りしめて応援すると美春は天音の言葉にさらに勢いが増して行き、

「な、何で、そうなるのよ!? 吉井も見えてないで助けなさいよ!」

「よ、よし、島田さん、ここは君に任せた!!」

美波は全力で美春から逃げ出したいように明久に助けを求めるが彼は同性愛を理解できないように美春と美波から距離をとって行く。

「ちょっと待ちなさいよ!? 今、ウチは乙女としてピンチなのよ!」 『ここは僕に任せて!!』とかじゃないの!!」

「そんなセリフ、リアルじゃ通用しない……」

『い、命だけは助けてください!? な、何でもしますから!?!』

美波は距離を取る明久にもう1度、助けを求めるが明久は完全に美波を見捨てようとしており、彼女に背を向けた時、天音は明久がDクラスで行った命乞いを録音しておいたようにボイスレコーダーを懐から出して再生し、

「ちょっと、このタイミングで何をする気!?!」

「いえいえ、タイミング的には今しかないと思ひまして」

明久の命乞いの証拠にFクラスの生徒の視線は明久に集中する。

第21問

「……美春、ちょっと待っててくれない。ウチは今から吉井をグロテスクに殺さないといけないから」

「ま、待って。落ち着いてよ!? 美波もみんなも!? ぼ、僕は無実だよ。これは……」

美波を中心にFクラスの生徒の大半は試召戦争より裏切り者の明久を虐殺する事に目的がすり替わり始め、明久は誤解を解こうと言い訳を始めようとした時、につこりと笑っている天音と目が合い、Dクラスの教室で自分の身に起きた恐怖を思い出したようで顔を引きつらせる。

「ま、待つんじゃない!? 落ち着くのじゃ!? 雄二はこれはDクラスの罠じゃと言っておったのじゃ!?」

「……木下くん、よそ見とはずいぶんと戦場を舐めていますね」

秀吉はFクラスの生徒に落ち着くように説得を始めた時に、彼の袴姿に薙刀を持った召喚獣の前には天音の召喚獣が移動しており、

「……Dクラス、真海天音がFクラス部隊長木下秀吉の首を貫い受けます」

「な、何じゃと!?!」

天音の召喚は魔導銃キャリバーの引鉄トリガーを引き、秀吉の召喚獣を光が撃ち抜き、

「Dクラス攻めますよ！！ 『約束通り』、吉井くんには攻撃をしないようにお願いします！！」

『おう』

天音が部隊長である秀吉を討ち取った事にDクラスの士気はさらにあがり、天音は明久の裏切りを強調するように攻撃の指示を出す。

「……吉井、あんた、本当に裏切ってるみたいね？」

「ちが！？ 僕は裏切ってなんかいない！？ 何も、何もなかったんだって！？」

『い、命だけは助けてください！？ な、何でもしますから！？』

「ちょっと、何度もそれを流さないで！？」

美波は背中に天音にも負けない殺意をまとって明久を追いつめると明久は顔を真っ青にして裏切りを否定するがその姿がさらに疑いの色を濃くしているようで明久の周りはFクラスの生徒に囲まれて行き、

「美春ちゃん、すいませんが、時間がないので島田さんを討ち取らせていただきます」

「天音、それなら、お姉さまは美春の手で討ちますわ！！」

天音と美春は明久を囲んでいるFクラスの生徒に襲い掛かり、

「お姉さま、どうして、お姉さまは美春ではなく、そんな豚野郎を

「見ているのですか？」

「み、美春？」

美春は美波の名前を呼ぶと彼女はどうかやら思い込みが激しいようで美波を巻き込んでおかしいな空気を作りだし、美波は美春の様子に顔を引きつらせると美春の召喚獣は美波の召喚獣を薙ぎ払い、美波を補習室送り手前まで追い込み。

「お姉さま、勝負はつきましたね？」

「み、美春！？ い、嫌ッ！？ 補習室は嫌あッ！？」

美波は我に返ったようで顔を蒼白にして補習室には行きたくないと叫ぶが、

「補習室？ お姉さま、今ならベッドは空いてますから、天音、少しだけ外しますわ」

「うーん。美春ちゃんが抜けるのは少しきついかも知れないけど応援するって言ったし、こっちはどうにかするよ」

「よ、吉井！！ 早くフォローを！！ このままだとウチは補習室より危険な気がするの！？ あんたもどうして美春を応援するのよ！？」

美春は美波を補習室に送るつもりはないようで彼女の手を握ると2人でどこかに移動しようとし、明久と美波以外を蹴散らした天音は2人の背中を見送ると美波は余程あせっているのか先ほどまで命を狙っていた明久に助けを求める。

第22問

「殺します……美春達の邪魔をする人は全員を殺します……」

「島田さん、君の事は忘れない……！！」

「何で戦う前から別れのセリフなの！？」

美春は自分と美波の邪魔をする人間は殺すと背中に真っ黒な殺意を
まといて言う。明久は美波を見捨てる。

「……普通は先ほどまで自分を殺そうとしていた人は助けないと思
いますよ」

「だよね。えーと、清水さん、僕は邪魔をするつもりはないから、
頑張ってる」

「豚野郎、あなたに言われなくてもわかってますわ」

天音は自分で明久裏切りの謀略を仕掛けながらも、美波の行動は理
解できないようでありため息を吐き、明久は美波からの恐怖から逃
げるために美波を美春に売り渡す。

「島田、危ない……」

「す、須川君！？ 助かったの？」

美春と美波の様子にFクラスの須川が美波を助けようと美春に試召
戦争を仕掛けようとするが、

「真海天音、受けます!!」

「な、何だよ!？」

無情にも須川の召喚獣を天音の召喚獣が撃ち抜く。

「わたし、美春ちゃんと島田さんを応援するって言いましたし」

「違うでしょ!？　ウチはノーマルなの!!　美春になんか興味はないの!？」

天音は美春のために頑張ると2人を応援するように両手を小さく握り締めるが、美波は天音の応援は間違っていると声をあげるが、

「さあ、お姉さま、これで邪魔者はいなくなりました。美春と2人で愛を語り合いましょう」

「い、嫌あああ!!!!??」

美波は美春に引きずられて召喚フィールドを出た時、

「敵前逃亡は補習!!!!!!」

「に、西村先生!？　ど、どう言う事ですか!？　み、美春はお姉さまとの甘い時間を!!」

「た、助かったの?」

召喚獣に止めを刺さずに召喚フィールドから出た事を敵前逃亡とみ

なされたようで西村教諭に2人は補習室に連れて行かれ、

「し、真海さん、清水さんはどうしたんだい？」

「えーと、きつと、愛のために戦ったんだと思います」

「そ、そうだね」

源二が本陣を引きつれて合流し、西村教諭に連れて行かれる美春と美波の様子を見て首を傾げると天音と明久は苦笑いを浮かべる。

「それより、吉井くん、Fクラスはあなた1人だけみたいですけど、どうしますか？」

「ま、待った！？ それは待った！？ 代替、命だけは助けてくれるって」

「……真海さん、どこから、その包丁を取り出すんだい？」

天音は本陣が到着した事でこの場にいたFクラスが明久以外全滅したため、笑顔で右手に包丁のレプリカを手にして明久にこの後の事を聞くと明久は自分に最も死への恐怖を刻みつけた少女が目の前に立っている事を思い出して直ぐに土下座をして命乞いをする、

「そうですね。約束ですから、命は助けてあげます。その代わり」

「天音ちゃん、代表、こつちも終わった……天使ちゃん？」

旧校舎の側から回り込んだDクラスの生徒もFクラスを殲滅したように美紀が手を振っていたのだが、美紀は明久を見た瞬間に目を輝

かせる。

「天使ちゃん？」

「み、見つけた。きよ、去年の入学式に舞い降りた私の天使ちゃん」

「去年？　って、そう言えば、吉井くんって入学式の時にセーラー服を着てましたよね？」

天音は美紀の言葉に明久が入学式におかしな格好をしてきた事を思い出すと、

「ち、違うんだ！？　あれは寝坊して急いでいたから、間違えて姉さんの昔の制服を着ちゃったんだ！？」

「……普通は間違えないと思うよ」

「そうですね」

明久は全力で言い訳を始めるが天音と源二の反応は冷たい。

第23問

「まあ、命は助けると言う約束ですし、吉井くんの事は美紀ちゃんに任せても良いですか？」

「うん。問題ないよ。むしろ、任せてだよ」

「え、えーと、あ、あのさ。僕は酷くイヤな予感しかしないんだけど」

天音は美紀の様子がいつもとは違うため、少しだけ彼女と距離をとって明久を美紀に引き渡すと明久は去年の恥でしかない話の流れから1つの答えを導き出したようで後ずさりを始めるが、

「まあ、捕虜扱いだろうから、仕方ないんじゃないかな？」

「天使ちゃん、一先ずはこれに、これに着替えて!!」

源二も明久に起こる事を理解したようで苦笑いを浮かべると美紀は朝に天音に見せていた衣装を手に明久ににじり寄って行き、

「ま、待つて!？」

「玉野美紀ちゃんです」

「た、玉野さん、落ち着こう!? 僕はそんなものを着る趣味はないよ!? だいたい、そう言うのは真海さんとか玉野さんが着た方が可愛いと思うんだ!!」

明久は美紀を説得しようとしているようで美紀に向かい叫ぶ。

「あ、あう」

「真海さん、どうしたの？」

「い、いえ、あ、あの。可愛いなんて言われないので逃げる口実だとしてもあの」

天音は明久の言葉に驚いたようで顔を真っ赤にして視線をそらす、

「大丈夫だよ。天音ちゃんも似合うけど、天使ちゃんも負けないくらいかわいいから♪」

「そんなわけない!!」

「待つて。天使ちゃん♪」

美紀が止まる事はなく、明久との距離を縮めて行き、明久は顔を引きつらせると美紀から全力で逃げ始めるが美紀は衣装を手に明久を追いかけて行く。

「……真海さん、玉野さんはどうしたら良いのかな？」

「は、はい。今はこのままにするしかありません。観察処分者の吉井くんの動きを封じていると考えれば悪くないでしょう」

源二は眉間にしわを寄せて美紀の背中を見送ると天音に声をかけると天音は自分を落ち着かせるために大きく深呼吸をして美紀に明久の足止めをしていて貰うと言い、

「それでは代表はこの場所に残ってください。両入口から一気に攻め込みます。良いですか。注意するのは土屋くんの保健体育、姫路さんの回復試験を終わらせた教科です。良いですか。相手の土俵に乗ってはいけません。相手の出方もありますが慌てないでください。この戦力差では負けません。それでは行きます!!」

「Dクラス、Fクラス代表坂本雄二の首を獲れ!!」

源二の声でDクラスの生徒はFクラスの教室に雪崩れ込んで行く。

「……あれが土屋くんですね」

「ちつ、ムツツリーニ、反撃だ。代表自ら負けに来てくれたんだ。ここまで来たら出し惜しみをしてる余裕はねえ」

「……………了解、Fクラス」

天音はFクラスの教室に入ると生徒が入り乱れている教室の中で冷静にFクラスの切り札になる『土屋康太』を探し始めると康太は保健体育担当教師の『大島教諭』とともに雄二のそばに控えており、保健体育の召喚フィールドを展開しようとするが、

「Dクラス真海天音がFクラス土屋くんに総合科目勝負を挑みます
!!
試獣^{サモン}召喚!!」

「承認します」

康太の宣言を遮るように天音が叫び、学年主任の『高橋洋子教諭』の声が響き、総合科目のフィールドが展開される。

第24問

「すいません。クラスの運命がかかっているので保健体育学年トップの土屋くんの土俵で戦うなんてバカな真似はしません」

「……こっちの戦力はばれているってことか？」

「はい。Fクラスは戦力が調べ安かったですよ」

天音が康太を総合科目のフィールドに引きずり込んだ事に雄二は感心したような表情をすると天音はにっこりと笑う。

「確かにな。Fはバカの集まりだからな。調べようと思えば簡単か？ けどな」

「切り札の才女さんがいる事は読めてないだろ？ とでも言つつもりですか？」

「!？」

雄二はこの危機的状況をひっくり返す手段を持つているため、彼の口元は緩んでいたが天音の一言に彼女が自分の戦略を読みきっている事にそこで初めて気づき、その余裕に満ちた表情は一瞬、歪み、

「姫路、Dクラス代表の元まで一気に駆け抜ける!!」

「で、でも、回復試験がまだ」

「良いから、行け!!」

雄二は自分が討たれる前に自分の作戦が読みきられていると言う事実を隠すためにFクラスのジョーカーである元Aクラス候補の才女『姫路瑞希』を場に出そうとするがとっさの事で瑞希は慌てて行動が遅れてしまう。

「落ち着いてください！！ 先ほども言いましたが、彼女は回復試験の途中です。試召戦争開始からの時間で考えれば単体教科で仮に400点を取れていても総合科目では800点前後、総合科目のフィールド内では彼女は何もできません！！」

天音の口から瑞希がFクラスにいる事が予想されていると聞かされていたがいざ目の前に瑞希が現れるとひるんでしまったように教室内にいるDクラス生徒は動きを止めてしまう。天音はクラスメート達の不安を感じ取ったように声を張り上げて今の瑞希は自分達の敵ではないと叫び、その声にDクラスの生徒3名が瑞希を指名して彼女を総合科目のフィールドに引きつける。

「……お前、どこまで見えていた？ Dクラスは俺達をバカにしていたはずだ？ それをわざわざ、ここまで調べ上げやがって」

「すいません。坂本くんが思っている以上に情報と言うのは貴重な戦力なんです。いくつかの小さな違和感を拾い集めた結果。私にはあなたの戦略と言うには幼稚で拙い作戦の底が見えました」

雄二は瑞希まで押さえられてしまったために目の前の少女が何を考えているのかを読み取るうとするが天音はすでに戦略面での勝負は着いたため、あまり興味がなさそうであり、

「それでは土屋くん、勝負と行きましようか？」

「……………舐めるな」

天音は雄二を守るように立っている康太を真つ直ぐと見ると康太の召喚獣は武器である2本のクナイを構えると天音の召喚獣が魔導銃キャリバーのため、距離を縮めようと一直線に駆け出し、

「……………何？」

「甘いですよ。魔導銃キャリバーが遠距離用の武器だとは思わなくてください」

天音の武器の特性上、懐に入ればクナイの方が有利だと思っていたようだが天音の召喚獣は器用に魔導銃キャリバーの銃身で康太の召喚獣の攻撃を受け止め、

「……………土屋くん、私はどうやらあなたを過大評価していたようです。私達の戦い方ではなく、どうやら戦場で舞う、女子生徒のスカートの中しか見ていなかったようですね」

「……………そんな事実はない」

天音はあれだけの盗聴器と言った道具を学園に持ち込んでいる康太が自分の戦い方を何も理解せずに突っ込んできた様子に残念そうにため息を吐くと康太はぶんぶん大きく首を横に振る。

第25問

「それでは行きます」

「!？」

天音のその一言と同時に彼女の背後には真つ黒な殺意のようなものがまとわれたような気がし、天音の変化に康太は一瞬、怯み、後ろに下がりそうになり、

「……武器の特性上、下がってはダメですよ」

「……………だろうな」

天音はその一瞬を見逃す事なく、康太の召喚獣を追いかけようと前に出ようとするが康太は天音から発せられる殺意を振り払うように前進し、クナイと魔導銃キャリバーの銃身は再度、ぶつかりあい、

「……やっぱり、戦闘はこうでないといけませんね。先ほどまでは指揮を執らないといけなかったのでこの緊張感はありませんでしたから」

「ただの戦闘マニアかよ……って事はもう1人いるな。まさか、Dクラス程度にこんな人間がそろってるなんて思うかよ」

天音は先ほどまではDクラスの指揮を執るために戦闘を早めに切り上げるように戦っていたようで戦況が有利に展開し始めた事に1度の戦闘に濃密な時間をかける事に集中しているようであり、雄二は天音の様子に天音を『戦闘マニア』と判断したようで自分の作戦を

読みきられた人間が他にいると考えたようでDクラスを舐めていたと舌打ちをする。

『う、嘘だろ。姫路さんが!?!』

『ど、どうすれば良いんだよ。坂本!?!』

総合科目では回復試験の途中であった瑞希にはやはり分が悪かったようで瑞希はDクラスの生徒に討ち取られてしまい、その様子を見たFクラスの生徒の戦意は低下して行き、

「ちっ」

「……………無念」

「……………良い勝負でしたよ。土屋くん」

雄二は点数差で負けた事より、先の事を考えた時に瑞希が負けた事の重要さに気づき舌打ちをすると瑞希が討たれた事で少なからず康太も動揺したようであり、天音はそのスキを見逃す事なく、天音の召喚獣の魔導銃キャリバーから放たれた光は康太の召喚獣の頭を撃ち抜き、

「簡単に姫路さんを使って奇襲で勝てるなんて思った自分を責めてください」

「おい。お前、明久はどうした? あいつは観察処分者だ。簡単には討ち取れなかったはずだろ?」

天音は康太を討ち取ったため、自分の前にはFクラス代表の雄二しかいないため、にっこりと笑って召喚獣の魔導銃キャリバーを構え、雄二に召

喚を催促するが雄二はそれでもこの不利な状況をひっくり返す手段を考える時間が欲しいようであり、作戦を立てている人間は天音と別だと思っているところもあるため、時間稼ぎで明久の居場所を聞く。

「吉井くんですか？　そうですね。坂本くんは彼を時間稼ぎに使いたかったんですよね。ですから、早めに排除させていただきましょ。これを使つて」

『い、命だけは助けてください！？　な、何でもしますから！？』

「クラスの特徴をつかんで上手くクラスメートを煽つて開戦に踏み切つたのは坂本くんの才覚なんでしょうけど、それが弱点でもある事から目を逸らした時点で指揮官としては3流以下です」

天音は明久を釘付けにするために使つたボイスレコーダーを取り出してにつこりと笑うと敗因は弱点から目を逸らした雄二にあると言いい切り、

「それより、早く終わらせましょう。あまり遅くなると放課後になつてしまいますから」

「待て。FクラスからDクラスに同盟を申し込みたい。俺の作戦はDクラスにとつても悪い作戦じゃない」

「イヤですよ。設備を壊した犯人にされるのは、それにそれは戦後処理に話し合う事でしょう。開戦を始めたあなたには責任があるんですから、きつちり、補習室送りになつてください」

天音はもう1度、雄二に召喚獣を呼び出すように言つと雄二はここ

で負けては試召戦争が終わってしまったため、同盟を持ちかけるが天音は雄二の見苦しさのため息を吐く。

第26問

「ちょっと待て！？ 設備破壊って、お前達の軍師はどこまで俺の作戦を読んでやがる！？」

「何を言ってるんですか？ 坂本くん、あなたの事ですから卑怯な手を使って幼なじみの霧島さん相手に1対1の勝負に持ち込んで霧島さんの惚れた弱み突いてを勝とうとしてるくらいはお見通しですよ」

雄二は天音の口から出た言葉に雄二は驚きの声をあげるが天音は雄二の考えている事などすでに読みきつていていると言い切り、

「それより、早く召喚獣の呼び出しをお願いします。私はこの後、約束があるんですから、放課後まで戦後処理をしているヒマもないんです」

「ち、何なんだよ。試獣召喚^{サモン}！！」

「はい。終わりです」

天音は放課後に用事があるようで雄二に早く召喚するように言い、雄二は召喚獣を呼び出すとその瞬間に天音の召喚獣の魔導銃^{キャリバー}の銃口からは光が放たれ、雄二の召喚獣の眉間を寸分の狂いもなく撃ち抜き、

「終結します！！」

天音と雄二の立会いをしていた高橋教諭が試召戦争の終結を宣言し、

「真海さん、終わったみたいだね」

「はい」

源二が戦後処理のためにFクラスの教室に入つてくると雄二は自分の戦術を見破った人間を探そうとDクラスの生徒の顔を見渡す。

「坂本、何をしてるんだい？」

「……俺の作戦を見破ったのは誰だ？」

「誰って、そこにいる真海さん」

源二は雄二の様子に首を傾げると雄二は自分の作戦を読み切った人間を源二に尋ねるが源二は苦笑いを浮かべながら天音を指差し、

「はい。全部、読みきらせて貰いました」

「はあ？ 何で、こんな奴が？」

「こんな奴とは失礼です。だいたい、そうやって、他人を見下して^{ひと}いるから負けたのにその態度を改める気はないんですか？」

雄二は天音はただの突撃部隊の隊長だと思っていたようにで驚きの声をあげ、天音は雄二の言葉は失礼だと頬を膨らませる。

「坂本、そんな事を言ってるから負けたんだろ。少なくとも軍師としてはお前より、ずっと上だ」

「……わかってる。それで戦後処理だけど、悪いんだが同盟として平和的に終わらせてくれないか？」

「……坂本、それは都合が良すぎないか？」

「いや、俺の話を聞けば、納得する。そっちの真海も俺の作戦は読んでいるんだろ。なら、俺達と同盟を組めばBクラスの設備は取れるのはわかってるよな？」

雄二はここで負けるとAクラスと戦えないため、Dクラスに和平交渉を提案し始めるが当然、源二は良い顔をするわけもなく、雄二はDクラスの頭脳である天音に同意を求めるが、

「そうですね。作戦的には悪くないんですけど、私達は坂本くんを信用出来る人間だと思っていないと言う事を忘れてはいませんか？確かに坂本くんの作戦に乗ればBクラスの戦力を削れますけどね。設備破壊の汚名を受ける事を負けたクラスから提案されて納得できると思いますか？」

「真海さん、設備破壊って、どう言う事だい？」

天音は雄二がDクラスを最初の相手に選んだ事にも予想が付いているように当然、良い顔をするわけもなく、天音の口から出た言葉に源二は眉間にしわを寄せる。

第27問

「えーとですね。それを説明するには先に穴だらけの坂本さんの作戦から話さないといけないんですけど」

「……」

天音は雄二の作戦を穴だらけと言いつき、雄二はその言葉に眉間にしわを寄せるが、

「遠くを見すぎて足元も見えてなかった坂本さんに反論できますか？」

「……できねえよ」

天音は雄二の態度にため息を吐くと雄二は納得がいかなさそうだが頷き、

「坂本くんが私達Dクラスを最初の相手に選んだ理由は私達の教室の位置です」

「位置？」

天音はFクラスの黒板の前に立つが黒板にはチョークはなく、眉間にしわを寄せて教室の配置が関係している事を話すが源二は意味がわからないようで首を傾げる。

「えーと、坂本くん、すいませんがDクラスの教室までご足労願えますか？ この教室には必要なものが不足しているせいか説明

もままなりませんから」

「……ああ。わかったよ。Fクラスの生き残りも連れて行った方が
良いか？」

「俺達はどちらでも構わないよ」

天音はFクラスの教室では説明するのが困難なため、Dクラスの教室への移動を提案し、Dクラス、Fクラスの生き残りはDクラスの教室に移動を開始しようと教室を出た時、

「子猫ちゃん、これに着替えて」

「イヤだよ！？ 僕は秀吉じゃないんだ！！ 女子の制服何か着ないよ！！」

美紀は飽きる事なく、明久を追いかけてこちらに向かってきており、

「……うちのクラスもおかしいと思ったが、Dクラスにもおかしいのはいるんだな」

「まあ、個性は人それぞれですからね。それを生かし切れなかったのも坂本くんの敗因だと思いますけど」

「……そうだな」

雄二は2人の様子に眉間にしわを寄せるが天音は美紀の行動を個性と言い切り、雄二はそんな天音の様子に小さくため息を吐くと、

「明久」

「雄二、助けてくれるの!!」

「いや」

「ごぼっ!？」

明久が自分の前にきた時に腹いせなのか明久の腹を殴りつけて彼を止め、

「子猫ちゃん、さあ、お着替えしようか？」

「ゆ、雄二、貴様、僕になんの恨みがあつてこんな事を!!」

「お前がまともに使者をしてればこんな事にならなかったんだ。その責任くらい。取りやがれ」

明久は美紀に捕まり、雄二は明久にこれから起きる不幸で天音に負けた気分を晴らそうと思ったように楽しそうに笑う。

「美紀ちゃん」

「何、天音ちゃん？」

「真海さん、助けてくれるんだね。やっぱり、君は殺意をまとった天使なんだね」

「……天使は殺意なんかまとわねえよ」

「そうだね」

天音は美紀と明久の様子に小さくため息を吐いて美紀の名前を呼ぶと明久は天音が自分を助けてくれるものだと思手に判断して目を輝かせると雄二と源二は明久の言葉に眉間にしわを寄せるが、

「廊下だと問題になつては困りますし、教室に移動しましょう」

「うん。そうだね」

「ちょっと、助けてくれないの!？」

天音が美紀に言いたかった事は明久の考えているような甘いものではなく、明久は美紀に引きずられて先にDクラスの教室に消えて行き、

「……なるほど、明久の言う意味が何となくがわかった気がする」

雄二は確実に明久にダメージを与えてくる天音の様子に顔を引きつらせる。

第28問

「オネエサマ、オネエサマ」

「ちよつと、あんた達、ウチを助けなさいよ!？」

試召戦争が終結したためか補習室送りになった生徒達もDクラスの教室に戻ってきたようでありに人数が多すぎるのも邪魔だと言う事でFクラスは雄二が選んだFクラスの主戦力がDクラスの教室に集まり、教室の中では美波が美春から襲われかけているが誰も関わり合いたくないようでも美波を助けに行かない。

「それでは坂本くん、Fクラスは坂本くん、吉井くん、土屋くん、木下……くん？」

「ワシは男じゃ!？」

天音はFクラスのメンバーを確認して行くがその中で『木下秀吉』の顔を見て、一瞬、考え込むと秀吉は大きく声を張り上げて自分を男だと主張し、

「失礼しました。あまりにかわいらしかったので」

「頭を下げられるとそれはそれでどうして良いのかわからないのじゃ」

天音は秀吉に向かって深々と頭を下げると秀吉はどうして良いのかわからないように眉間にしわを寄せる。

「真海、後は姫路と島田、この6人で参加させて貰う。気にしないで初めてくれ」

「はい。了解しました」

雄二は天音と秀吉の様子に苦笑いを浮かべると美紀に捕まり、着替えさせられている明久とそんな明久をシャッターが擦り切れる勢いで写真を撮っている康太と目を輝かせて見ている瑞希を無視して天音に説明を願い、天音は苦笑いを浮かべて頷くと、

「まずは坂本くんがDクラスを初戦に選んだ理由からですね」

「設備破壊って言うてたけど、どう言う事なんだい？」

「それはですね」

天音は説明を始めると言うとき黒板に2学年の教室のある3階の設備を描いて行き、

「坂本くんは次の相手をBクラスと定めていました。だから、わたし達を倒して勢いを付けるのと設備交換をしない代わりに設備破壊と言う汚名を着せようとしたわけです」

「室外機を壊す？ 何の目的があつて？」

天音はDクラスの教室の隣にあるBクラスの教室の室外機を赤いチョークで囲むが源二は意味がわからないようであり、首を傾げる。

「ここからは坂本くんの人員の使い方による予想です。間違っていたら、ご指摘をお願いします」

「ああ」

天音はこれから話す事はあくまで推測である事を話し、雄二に何かあったら説明の補助を願うと雄二は短く返事をする、

「今回、坂本くんが絶対にしなければいけなかった事は姫路さんがFクラスにいる事を他のクラスに印象付ける事、そして、土屋くんを隠す事です」

「ムツツリー二を隠す事？ 雄二、どう言う事なのじゃ？」

「聞いてればわかる」

「本来、Dクラスの設備が欲しいだけなら回復試験を終わらせて姫路さんと土屋くんの保健体育を主力に一気に攻め立てる事、これがもっとも安全で確実性のある戦術です。言い方は悪いんですけど、保健体育にしばって2人を主力で出されたら、Cクラスが相手でも簡単に蹂躪されていたと思います。それほど、保健体育での土屋くんは侮れないんです。それなのに土屋くんをメインで戦場に持って行く気はなかった。そう考えれば今回の試召戦争で坂本くんがDクラスを狙った事に他の意図がある事は簡単に予測できます」

天音は雄二の策で引っかかっている点の1つに康太の起用法だと言、康太と瑞希の名前を黒板に書き込む。

第29問

「確かにムッツリー二を早く出せば、戦況はひっくり返せた気がするのじゃ」

「そうだな。土屋の点数を考えれば俺達じゃ敵う人間はいないな」

秀吉と源二は雄二が康太を使わなかった理由が理解できないように首を傾げると、

「今回は警戒なく、Dクラスの代表を姫路さんで奇襲して勝つのが前提での作戦です。ですから、姫路さんが回復試験を終わらせるまでの時間稼ぎが目的でした。戦況を維持するだけの戦力が把握もできていないのに」

「……」

天音は雄二の作戦以前の問題を解決していないで試召戦争を始めたと言つと雄二の眉間にはしわが寄る。

「坂本くんが土屋くんを隠したかったのはBクラス戦で姫路さんを囷にして土屋くんを試召戦争を終わらせたかったからです。そのために姫路さんには目立って貰う必要がありました」

「……だから、姫路さんを目立たせるために1つ上のEクラスじゃなく俺達Dクラスを狙ったわけか？」

「はい。それ以外にもEクラスを狙わなかったのはEクラスは部活を重要視している体育会系の生徒が多いから、最初の相手になると

勢いに任せて攻め立てられる可能性がありますからね。性格上の問題です」

「なるほど、それで設備破壊と土屋を隠すって言うのは？」

天音は雄二がDクラス相手に仕掛けた理由を話すと源二は頷くと気になっている事を天音に聞き返し、

「土屋さんにBクラス代表の首を取らせるために姫路さんを囷に試召戦争を仕掛けます。新校舎の奥には階段がありませんから、姫路さんが中央階段を越えるとBクラスの逃げ道はありません」

「うん。それはわかってる。でも、それは奇襲も掛けられないだろ？」

天音は黒板に書いた瑞希の名前から矢印を引き、Bクラスの教室の前まで伸ばすが源二は雄二の考えている作戦が理解できないように首を傾げるが、

「ですから、これが生きてきます」

「室外機？」

「室外機を設備交換の代わりにDクラスの生徒に破壊させる。そうすると試召戦争の熱気もあるため、体感的に温度は上昇します。それに室外機が壊されている事でさらに暑さに関しては過敏になります。そうすると」

「窓を開けるのじゃ」

天音は黒板に書かれた赤く囲った室外機の下に二重線を書き、室外機を破壊する事でBクラスに起きうる事を話すと天音の言葉に数名の生徒がBクラスの人間が取るのであるう行動に気づき、

「そして、土屋くんが得意な教科は保健体育、担当教師は『大島先生』」

「……いや、納得しかけてるんだけど、窓から奇襲は常識的に考えたらダメだろ」

「そうですね。常識で考えては策など立てられませんよ。策とは常套手段から外れる事、相手が思いもよらない事を考え、実行する事にあります。この面に関しては坂本くんは良いところまで行っていますが」

天音の言葉に源二は雄二の作戦が窓からの康太の奇襲である事に気づくと常識的な事ではないため、顔を引きつらせるが天音は気にする事なく、雄二の作戦立案能力を誉めるが口元は小さく緩んでおり、

「残念ながら、坂本くんには作戦を立てるだけの才覚はありませんでしたが、それを実行する才覚はありませんでした」

「……楽しい、楽しいダメだしタイムってことか？」

雄二は天音の口から出る言葉から天音が自分の作戦を完全に読みきっている事は理解できてしまったため、この後に自分に起きる事を理解しているようで大きく肩を落とす。

第30問

「楽しい、楽しいダメだしタイムってなんですか？ 私は楽しいなんて思っていないです。心外です」

「……いや、充分に楽しそうに見えるんだけど」

「だよな」

天音は雄二の言葉が不服なようで頬を膨らませるが源二を中心としたDクラスの生徒は今日の天音の様子を見ていたため苦笑いしか浮かべる事はできず、雄二もDクラスと同じ意見のため、眉間にしわをよせると、

「……良いですよ。そこまで言うなら、思う存分、ダメだします」

「……お手柔らかにしてくれ」

天音は拗ねたのか徹底的に雄二にダメだしをすると告げると雄二はため息を吐き、

「それで俺に作戦を実行するだけの才覚がないってのはどう言う事だ？」

「そうですね。まずは宣戦布告の使者の重要性を理解していない。確かに吉井くんはあまり役に立たなさそうですし、捨て駒に使いたくなるのはわかります。観察処分者が使者できてしまえば相手にやっぱりFクラスはバカだと印象付ける事もできますし、自分達をザコだと思わせつけ、相手の油断を誘う事も出来るかも知れません」

「……良く俺の考えを理解してるな」

「ちょっと待つてよ！？ 今の言葉は傷つくからね！？」

天音に自分の失敗を尋ねると天音は雄二が明久を宣戦布告の使者にした意味を読みきっており、雄二は大きく頷くがバカにされた本人の明久は美紀に着替えさせられた服のまま2人に向かって叫ぶが、

「普通は観察処分者みたいな人は戦力外だからね」

「ああ。明久だからな。死んでも構わん」

「そう言うのはどうかと思いますよ」

源二は一般的な常識で考えた時には明久に価値がないと苦笑いを浮かべ、雄二にいたっては明久が死のうがどうでも良いと言い切り、天音は雄二の言葉をいさめると、

「真海さん、優しい！！ 雄二、お前も真海さんを見習えよ！！」

「吉井くんはどうでも良いですけど、クラスみなさんが吉井くんを殺したせいで犯罪者になってしまったらと考えるとわりに合わないと思いませんか？ それにそんな事で警察が来て試召戦争をできなくなってしまうては困りますし」

「そうだな。明久みたいなゴミクズを処分したせいでDクラスの間が犯罪者になるのは考えてなかった。明久の息の根を止める事のためらってくれた事、感謝する」

明久は天音から出た優しい言葉に雄二に天音を見習うように叫ぶが
天音は明久の事など微塵も心配しておらず、

「何だよ。みんな、僕の事が嫌いなんだ!!」

「待つて。子猫ちゃん、まだ着て欲しい服がいっぱいあるの」

明久は天音の言葉に傷付いたようで泣きながら教室を出て行き、美
紀が明久を追いかけるように続いて行き、

「宣戦布告の使者で油断させるのも手段の1つかも知れませんが、
それよりは戦争を長引かせたいなら坂本くんが数名の生徒を連れて
きて、宣戦布告をするべきだったね。そうすれば吉井くんからFク
ラスの情報が漏れる事はなかったわけですし」

「……やっぱり、負けたのは明久が余計な事を言ったからか？」

天音は明久の事など気にする事なく、話を続けて行くと雄二は明久
が宣戦布告の使者の時に余計な事を話したせいだと舌打ちをする。

第31問

「違いますよ。負けたのは坂本くんのせいです。それを認められない限り、私達と同盟を組んでも同じ事の繰り返しです。だいたい、姫路さんがFクラスにいる事を今日の試召戦争の終わりまで隠したのなら、自分達の戦力以外にも相手の戦力を見極める必要性は絶対にあると思いますよ。Fクラスでそれができそうな人間って限られてきませんか？ そのために坂本くんが自ら使者になり、全員とは言えなくても去年のクラスメートや姫路さんのように何かハプニングがあつて本来の実力を出せなかった人間が敵にいないかを見極めないといけなかったはずですよ」

「ぐっ！？」

天音はFクラスが負けたのを明久のせいにしてしている雄二の様子に大きく肩を落とすと雄二は冷静に情報を見極めると言う部分が自分に抜けていた事に気づいたようで苦虫をかみつぶしたような表情になるが、

「それに宣戦布告の使者を1人にする事がどれだけ危険かを分かっていません。戦争映画では宣戦布告の使者は捕えられて殺される事もありますし、捨て駒を考えると考える事も一理あるのかも知れませんが、先ほども言った通り、1人でそれも吉井くんなら簡単に情報を話してしまいます。吉井くん以外でも捕まえてしまえば拷問による情報の搾取もできますし、使者を帰さずにこちらから開始時間と同時に全力で奇襲もできたわけです。私達は使者を解放しましたが、Fクラスには戻っていない。でも、私達は使者の言う通りの時間から試召戦争を仕掛けましたと言った感じです」

「……真海さん、それは卑怯だと思っただけど、代表として賛成はできないよ」

「代表、勘違いしないでください。あくまで仮の話です。それに私はそんな卑怯な手段^ては使いません！！ そんな卑怯な手段^てでは国^{クラス}を守る時に国内に亀裂が入ります。私は軍師^{フォーキャスター}です。この戦闘以外にも先の事を考えないといけません。何より、戦えな……」

天音の卑怯な作戦を取ろうと思えばいくらでもできたと言うと源二はそんな作戦は許可できないと首を振るが天音は卑怯な作戦で試召戦争の時間を削られる事は本意でないと叫びをあげ、Dクラスの生徒は時折見え隠れする天音の本性^{せんとうしんき}に苦笑いを浮かべる。

「ち、違います！？ わ、私は戦闘が好きなのじゃないです！！」

「真海さん、それはもう説得力の欠片もないからね」

「あ、あう」

天音はクラスメートからの視線に慌てて否定しようとするがすでにDクラスでは天音はクラスを守った英雄でもあるため、天音の戦闘好きはクラスに受け入れられている節もあり、Dクラスの生徒は天音に優しい視線も浮かべると天音の顔は真っ赤に染まって行き、

「そ、それに相手のクラスだけでなく自分達のクラスの情報^{データ}を集めないから、自分達に不利な状況にだってなっただんです。試召戦争を長引かせたいなら、土屋くんや姫路さん以外の戦力^{せいせき}を調べ直しましたか？ 島田さんの数学はBクラス相当のはずです。彼女以外にも数学がそれなりにとれている人間を軸にしていれば私達だって迂闊に攻撃は仕掛けられませんでした」

「確かにそうなんだが、一気に威厳がなくなったな」

天音は恥ずかしいようで話を変えようと雄二のダメだしの続きを始めようとするが雄二は天音の変わりように苦笑いを浮かべる。

第32問

「あう」

「真海、それなら、ワシらはどうするべきじゃったのじゃ？ どうすればDクラスに勝てたのじゃ？」

天音は顔を真つ赤にしたままうつむいてしまうと秀吉は苦笑いを浮かべて、天音ならどうやってDクラスを責めたかを聞く。

「そうですね。坂本くんの作戦を考えるとまずはさっきも言った通り、宣戦布告の使者は坂本くんを中心とした数名でFクラスはあまり部活動をやっている人間はいないですが、木下くんは演劇部ですし、去年のクラスメート以外でも知り合いがいるかもしれませんが、木下くんもメンバーに入れとくべきでしょう。坂本くんは中学時代あれていた事は有名ですし、坂本くん相手に力づくって行動は取りづらいですし」

「うむ。確かにこのクラスにも演劇部がいるのじゃ。それに雄二の事も納得なのじゃ」

天音は宣戦布告の使者は雄二と秀吉を中心にすべきだと話し、秀吉は大きく頷き、

「そこからはまずは必要な情報^{データ}の整理ですね。まあ、私達が調べた限りでは単体でDクラス代表を倒せるのは姫路さん、土屋くんの保健体育、島田さんの数学、後は観察処分者の操作性と言う利点を使って1対1に持ち込んだ場合の吉井くんと言ったところでしょう」

「そうだな。それ以外じゃ、最低、3人で囲まないと勝てなさそうだ」

天音はFクラスで源二の首を取れる4人の名前をあげると雄二も同意見のようであり、

「ここでカードを切る順番を坂本くんは間違えました。最初はFクラスの半数を使って軽く一当てをします。あまり深追いしないように指示を出し、時間をかけて戦闘を行う感じです。Fクラス数名が討ち取られた時に後退して、DクラスにFクラスはやはりこの程度かと思わせるくらいの戦闘でかまいません」

「それだと一気に攻め立てられる可能性はないかのう？」

「確かにそれもありますが、私達は次の試召戦争を考えて、なるべく戦力の温存をしないといけません。深追いはしません」

天音はFクラスの最初の手では主戦力は温存しても良かったと告げると秀吉は首を傾げるが天音はDクラスには直ぐにFクラスを攻め立てる事は出来なかったと話し、

「……そうか。連戦の可能性があるからか」

「はい。私達が簡単に勢いに任せてFクラスに総攻撃を仕掛けるに踏み切る事はできない理由がありました。Fクラスを全力で倒した場合点数の減少が大きくなり、Eクラスが狙ってくる可能性が高いですから、私達は回復試験を受けながら戦争を続けるしかありません」

源二はDクラスが総攻撃に出れない事に気づくと天音は黒板に『E

クラス』と書き込む。

「1時間はこれでどうにかかります。坂本くんが2時間は上手く時間を稼げると思っていた理由もここにありますが」

「ああ。Dクラスが弱ればEクラスは必ず仕掛けてくると考える人間が出てくるはずだと思った。だからこそ、立てた作戦だ」

「はい。それ自体は間違っていないですね。でも、ここで切るカードがありました。回復試験を受けた姫路さんはここで投入するべきでした」

「そ、そうなんですか？」

天音は回復試験を1時間だけ受けた瑞希をここで使うべきだったと言っていると瑞希は自分の名前が出てきた事に驚いたようできょんとした表情をする。

第33問

「単体教科で姫路さんを使います。そうすれば姫路さんを警戒しすぎて私達の攻撃の手は1度、止まってしまい姫路さんの対策のために作戦を立てる事になります。その間に姫路さんはもう1教科の回復試験を受けに戻ります」

「でも、お前が居れば姫路が単体教科しか点数がない事は気づくだろう？」

「どうでしょうか？ 強力な戦力を持つ人間を前にした時、冷静な判断をできるかはわかりませんね。それに私だけならまだしも」

「……確かにクラスの考えをまとめきる事はできないかもしれない」

天音は瑞希を披露する事でDクラスの中に生じる人の迷いに付け込むと言うと源二は瑞希相手では勝てる自信はないため、疑心暗鬼になる可能性は否定できないと頷き、

「後は姫路さんを警戒する事で授業の終了とともにDクラスへの警戒を緩め、代表が学園外に出ようとしているところを島田さんの数学で狙います。島田さんの数学では私達は誰も敵いませんから、そして、Bクラス級の点数を持った島田さんがいる事が他のクラスに伝われば姫路さんと島田さんの2枚看板として開戦に踏み切ったと他のクラスに見せつける事が出来る」

「……ムツツリー二を隠すには充分じゃのう」

「……確かにな。だけど、それはかなり希望的なものが入ってるだ

る」

天音は最後の1手に美波を持つてくる事が最良だと笑うと秀吉は頷くが雄二は天音の考えも上手く行くとは限らないと首を振るが、

「それでも坂本くんの作戦よりは勝率は上だと思いますよ。そして、最初の時点で坂本くんが使えなくしてしまった。Fクラスのもう1枚のジョーカーは残せてますよ」

「……真海、お前は明久を評価してるのか？」

天音は雄二の作戦よりは勝率が高いと笑うと明久をFクラス切り札だと考えており、雄二は天音の明久の評価が信じられないようで眉間にしわを寄せる。

「そうですね。観察処分者の召喚獣の操作性は十分な戦力になりえると思います。それは坂本くんも同じ意見ではないのですか？」

「……そうか。失敗したな。確かに負けたのはDクラスの戦力を見極められなかった俺のせいかな」

天音は明久がいない今なら雄二の本心が聞き出せると思ったようにくすりと笑うと雄二は意地でも明久を誉めたくないようで舌打ちをした後に乱暴に頭をかくと、

「……秀吉、ムツツリーニ、姫路、島田は……良いか。帰るぞ」

「ちょっと、坂本、助けなさいよ!？」

天音相手では同盟も成り立つ事はないと思ったようでFクラスに帰

ろうとするが、

「待ってください。話はこれからですよ。坂本くんの様子しだい、私はDクラスの軍師^{フォーキャスター}としてFクラスとの同盟はありだと思っ
ていますから、そして、FクラスがBクラスに勝てるように同盟者として坂本くんの作戦を立てるお手伝いもしようと思っています」

「し、真海さん、どう言う事だい？　今までの流れで行けば同盟は成り立たないだろ」

「……なるほど、俺達を上手く使おうってところか？」

「そうですね。否定はしませんよ。だいたい、坂本くんはBクラスの設備になんか興味はないんですから問題ありませんよね？　それに同盟を持ちかけてきたのは坂本くんですよ」

天音は雄二を呼び止めるとこれからの話次第で天音はDクラスとFクラスの同盟は成り立つと言うとと雄二は天音の考えている事が理解出来たようであり、交渉の余地はある事を理解すると天音は楽しそうな笑みを浮かべる。

第34問

「……真海さん、好戦的だね」

「だ、だから、違います!？」

「……いや、説得力無いからな」

天音の表情を見て源二が苦笑いを浮かべると天音は慌てて否定するが雄二はため息を吐き、

「だいたい、真海はBクラスの設備を取るつもりなんだから。それなら」

「そうですね。室外機を壊されると正直、困ります」

「当然だ。備品破壊は下手をしたら大事故だ」

雄二はDクラスの生徒達は自分の考えた作戦で重要な部分を占める室外機破壊に協力的ではないため、同盟も成り立たないと思っており、天音も源二を室外機を壊す気はないようでDクラスの生徒達も試召戦争に勝った自分達が雄二の作戦に乗るのはおかしいと声をあげる。

「なら、この作戦は無理だろ」

「坂本くん、どうして、その作戦に執着するんですか？ Dクラスが同盟として協力すると言っているんです。それに執着する必要はありませんよ」

雄二はため息を吐くと天音はくすりと笑い、

「坂本くんはFクラスとDクラス以外の情報データはどれだけ集め終わっていますか？」

「情報データ？」

「……先ほど、説明しましたよね。情報データを集めておけば作戦立案や作戦変更が余儀なくされた時に次の行動に移りやすいんです」

天音は雄二の持っている他のクラスの情報提供を求めるが雄二は意味がわからないようで首を傾げると天音は雄二の様子に大きくため息を吐き、

「現状で私の持つデータている設定ではBクラス代表は自己顕示欲の強い小者です」

「自己顕示欲の強い小者？ ……ああ、根本か」

「……2人とも、その言い方は流石に失礼じゃないかな？」

天音は自分がDクラスの生徒に協力して集めた情報からBクラスの代表を『小者』と言い切ると雄二は天音が誰の事を言っているか理解したようで『根本』と言う生徒の名前をあげると源二はため息を吐く。

「Bクラス代表『根本恭二』。目的のためなら手段を選ばない。カニンングの常連。ケンカにナイフは標準装備と噂だけでも小者臭せんにょうくがします。実力を持ち合わせていれば別ですが圧倒的な学力せんりょくがあるわ

けでもないのに人望もないとなるとたいした敵ではありません」

「そうだな。言われると根本が小者なのを再認識できるな……後は髪型も最低ランクを付けようぜ」

「そうですね。あの髪形はセンスが感じられませんか、最低評価で良いですね」

「あ、あの。それはどうかと思うんですけど」

天音はBクラス代表の『根本恭二』の名前を出すと天音が集めた情報から予想される恭二の成績を黒板に記入して行き、その成績の中には人望と人間の器も記させており、雄二の言葉で髪形が追加され、3つは最低評価が付けられ、瑞希は苦笑いを浮かべて2人を止めると、

「それで、根本の戦力を俺達に見せてどうするつもりだい？」

「簡単ですよ。Bクラスの弱点はこの小者な国主です。こう言う小者が立てる作戦なんて限られてきますから、対処の仕方なんかいくらでもあります。それも自分が優秀だと思っている節もありますからね。実力の伴っていない自信過剰の将を倒すのなんて簡単です。Dクラスの成績では少しきついですが姫路さんが戦力を削ってくれるなら、私達も楽に倒せますしね」

源二は天音と雄二に恭二の悪口を言わせておくと話が進まなさそうなので、2人の間に割って入ると天音は口元を緩ませながらBクラスを倒すのは簡単だと笑う。

第35問

「……真海さんが味方で心底良かったと思うよ」

「……確かになぜか負ける気はせんのか」

天音の笑顔に源二と秀吉は負ける事は考えられないようで2人は苦笑いを浮かべると、

「代表、Bクラスの設備を勝ち取るためにFクラスと同盟を組んでも良いですか？」

「いや、作戦は良いのかな？ 真海さんと坂本が組むと敵に回したくないって事は理解できたけど同盟を組む理由にはなっていないし」

天音は笑顔のまま、源二にFクラスと同盟を組む事を了承して欲しいと言うが源二は作戦も決まっていなかったため首を傾げる。

「現状で言えば、作戦を説明すると他に漏れる可能性もありますから、それに私達はFクラスがBクラスに仕掛ける前にEクラスを倒す必要がありますからね。坂本くん、作戦立案の打ち合わせをしたので後でメールアドレスと携帯の電話番号を交換してください」

「……Eクラスをどう言う事だい？」

天音はFクラスの試召戦争が開始される前にEクラスと決着をつける旨を話すと源二は首を傾げるが、

「真海、アドレス交換は問題ない。これを渡しておく」

「ありがとうございます」

「平賀、後ろへの防備を固めておくのは重要だと思うぞ。さっきも話に出てただろ。EクラスはDクラスの戦力を下がっているのを見たら仕掛けてくる可能性が高い」

「後は作戦を伏せるのは先ほども言いましたが、Bクラスの代表は小者ですから、情報を集めるために、何かをしてくる可能性があるのでギリギリまで口の堅い人間以外には作戦は話せません」

雄二は生徒手帳のメモ部分に携帯番号とメールアドレスを書くとき破って天音に渡し、Dクラスが上の設備を狙う事には必要な過程だと話す。

「……確かに、根本の場合は危険じゃのう」

「……確かに隠すのは納得できるけど、本当にEクラスとの試召戦争になるのかい？　いくらなんでも試召戦争が終わったばかりにしかけてはこないだろ」

秀吉は噂で聞いた事のある恭二なら、下位クラスの生徒を見下し、暴力で作戦を聞き出す可能性もあるため、作戦を伏せる必要があると頷くが源二はEクラスとの試召戦争の事は考えられないようで首を傾げたままである。

「目の前に弱った獲物がふらついているんですから、仕掛けてきますよ。部活をしていてスポーツマンシップにのっとなって正々堂々なんて絵空事です。人とは罪深き生き物ですから」

「そうかな？」

「まあ、仕掛けてこなくても真海は攻める気だぞ」

天音はEクラスとの試召戦争は必ず起きると話すが源二は納得がいかなさそうであり、雄二はそんな源二の姿に苦笑いを浮かべながら、Eクラスから試召戦争の宣戦布告がなくても天音はEクラスに攻め込む気だと言い切り、

「攻め込めますよ。私達はEクラスに攻め込ませるためにFクラスと同盟を組むんですから」

「……なるほど、そう言う事か。確かに餌と自分達の安全性が確保されてるなら仕掛けてくる可能性は大きく跳ね上がるな」

天音はFクラスとの同盟はEクラスが自分達に攻め込んでくるようにさせるための布石だと笑い、雄二は天音の考えがうつすらと見えたように楽しそうに笑うと、

「……あの2人を引き合わせたのは失敗だった気がするよ」

「……平賀、お主も苦労するのう」

源二と秀吉は2人の様子に大きいため息を吐く。

第36問

「あ、あの。坂本くん、真海さん、Dクラスが私達と同盟を組むとどうしてEクラスがDクラスに攻め込んでくるんですか？」

「それは人の弱いところを突くわけです」

瑞希は天音と雄二の言っている理由がわからないように首を傾げると天音はくすりと笑い、

「私達はFクラスを倒しましたが設備を落とす事なく、平和的に終わらせます。そして、私達はFクラスの試召戦争を終えたばかりのため、成績は下がっています。現状で言えば回復試験を受けなければEクラスと同等、もしくは私達が不利と言ったところでしょうか？」

「俺達が試召戦争を仕掛けて負けたのに和平で決着がつかない引き分けと言う形で終わらせた。そうなるとEクラスは自分達がDクラスに負けてもDクラスは設備を落とさないんじゃないか？ って希望的な考えが頭をよぎる。それに戦力を考えても対等以上に戦えるなら仕掛けてくるのだろ。いくら、部活中心で勉強に興味がなくてEクラスにいるって言っても目の前に餌が見えてるんだ。確実に食いついてくる」

「……それが餌と安全性ってヤツかい」

天音と雄二はEクラスは必ず攻め込んでくると思っているようであるが源二はそう思えないのか眉間にしわを寄せるが、

「本来なら、私達が回復試験を終えてから、上に挑んだ後に仕掛けてくるのが効率は良いんですけどね。効率で動ける部活中心の人間は上位クラスにいますからね。Eクラスは目先のものに食いついてきます」

「いや、でも、それは真海さんと坂本の希望的なものが多いだろ」

「そうですね。でも、これを聞けば代表もみなさんも納得すると思いますよ」

天音は自分ならこのタイミングでは仕掛けないと苦笑いを浮かべている姿に源二は仕掛けてこないと言うが天音は絶対的な自信があるように口元を緩ませ、

「……EクラスはもつともFクラスに感覚が近いクラスです」

「……それは仕掛けてくる可能性が高いね」

「おい。今まで反対してたのにそれで納得するのはどうなんだ？」

天音はEクラスにはFクラスに近いものがあると言い切ると源二を中心にしたDクラスの生徒は衝撃を受けたように頷いてしまい、雄二は大きいため息を吐く。

「実際、そうですね。部活を中心と言っても、全員がレギュラーを取れているわけではない。それなら、何か1つでも人を見下せるものが欲しい。どれだけきれい事を並べても悲しい人間の性さがです。坂本くんだって、嫉妬とかいろいろと負の感情をあおって開戦に踏み切ったんですから」

「まあ、そうだな」

天音は人間の汚い部分だと少しだけ悲しそうに笑うと雄二は頷き、

「Eクラスと戦いたいのは他にも召喚獣の操作になれると言う意味もあります。点数が互角の状況でどう乗り切れるかで適性も確認します。点数差が小さい相手、上の相手と戦った時の様子で試召戦争の役割が変わってきますからね」

「……了解したよ。上を狙うために必要だつて言うのはわかったよ。それで、こちらから、Fクラスに出す条件は何だい。対等ってわけにはいかないだろ」

「そうですね」

源二を中心としたDクラスの生徒は天音の軍師としての能力の高さを認めているため天音に任せると言うとな音はFクラスに出す条件はすでに決まっているようにぐすりと笑う。

第37問

「そうですね。まずはこれは必須ですけど、私達がEクラスを倒して回復試験を終えるまではBクラスとの開戦には踏み切らない。後は当然、室外機は壊しません。」

「まあ、それに関しては妥当だな。俺達もDクラスがこけると何もできないし、こっちは設備を落とすのを待って貰ってる身だ。文句は言えない。室外機も今となつては必要ないだろ」

天音の条件に雄二は天音の作戦も理解できているため、苦笑いを浮かべながら頷き、

「後は情報^{データ}を提供して貰います。Fクラスの生徒……主に土屋くんに協力して貰いたいんですけど、去年の友人達がどのクラスにいるか。わかる範囲で良いので得意教科、苦手教科、総合得点、性格等、何でも良いです。どの情報^{データ}を使うかは私が決めますから、些細なものでもかまいません」

「……………男の情報になど興味はない」

天音はFクラスだけではなく他のクラスの情報を集めようとするが康太は男の情報を調べる気はないと首を振ると、

「土屋くん、男子の分もお願いできませんか？ わかる範囲で良いんです」

「……………男子の情報には期待するな」

天音は康太の顔を見上げて頼み込むと康太は天音から視線を逸らして頷き、鼻の下からは赤い液体が流れ出始める。

「……あいつ、上手いな」

「うむ。迫真の演技なのじゃ。演劇部に入部してくぬか。頼んで見るかのう」

「……いや、どちらかと言えば、天然かな」

雄二は康太を天音が陥落させた事に舌打ちをするが秀吉は天音の演技に関してるように頷くと源二は2人の言葉を首を振って否定すると、

「一応は3カ月間の不可侵条約も付けましようか？」

「良いのか？ 俺達がAクラスの設備を取ったら、攻め込んでこなくて」

「現状で言えば、私達に姫路さんを倒すだけの学力も作戦もありませんから」

「現状か？ そのうち、姫路だけじゃなく、Aクラスも倒すって言いたいみたいだな」

天音の言葉に雄二は天音との再戦の事を考えているようでニヤリと笑う。

「こちらからの条件はこんなものですな。これでFクラスと同盟を組みたいと思いますけど、何か追加する条件はありますか？」

「ありますわ！！ 美春はお姉さまを求めますわ！！」

「な、何を言ってるのよ！？ そんなのは却下よ！？ 坂本、それを条件にするなら、負け、負けにして！？」

天音はDクラスの生徒にFクラスに付ける条件は他にないかと聞くと美春は美波を自分のものにすると呼び、美波に襲い掛かったままであり、美波は声をあげるが、

「島田美波さんと美春ちゃんの際の許可も条件に追加です」

「おい！？ お前、何を言ってるんだ！？」

「真海さん、その条件はおかしいから、そんな条件は出せないから」

天音は真剣な表情で美春の言葉を同盟の条件に出すと源二、雄二の両代表は美春の言葉を却下し、

「で、でも、私は美春ちゃんを応援するって約束しましたし」

「真海さん、恋愛は力づくは良くないよ」

「そうだ。無理強いは良くない。最後の条件は無しで同盟を組ませしてくれ。そうだな。島田は渡せないが、明久なら、グロテスクに殺しても良いから、平賀、同盟なんだが組んで貰えるか？」

「ああ。よろしく頼むよ。坂本」

天音は美春との約束を守りたいと言うが源二と雄二は首を振ると源

一と雄二は同盟成立と言いたげに握手を交わす。

第38問

「……あ、あの」

「豚野郎、誰が、話しても良いと言いましたか？」

DクラスとFクラスの同盟が成り立つと雄二にグロテスクに殺しても良いと言われた明久はDクラスの教室で正座をさせられており、美波を手に入れる事が出来なかった美春は機嫌が悪そうに明久にあたっている。

「美春ちゃん、ごめんなさい。私の力が足りなかったせいです」

「何を言ってるのですか。天音はまったく、悪くありませんわ。悪いのはこの豚野郎です！！ だから、美春の手で八つ裂きにします！！ だいたい、この男はお姉さまに色目を使う豚野郎です。生かして置いても害にしかありませんわ！！」

「ど、どうして、そんな話になるんだよ！？」

天音は美春に向かい申し訳なさそうに肩を落として謝ると美春は天音を責めるわけにもいかない事は理解しているようで生贄に差し出された明久に止めを刺そうと明久との距離を縮めて行くが、

「ま、待ってください。ダメです。吉井くんとは最初に命だけは助けるって約束したんですから」

「そ、そうだよ。清水さん、落ち着いてよ！？」

天音は美春の腰に抱きついて彼女を止めようとし、明久は美春の様子に本気で生命の危険を感じているようで顔面を真っ青にして首を振ると、

「……仕方ありませんわ。今回は天音に免じて許して差し上げますわ」

「み、美春ちゃん、ありがとう」

美春は自分と美波の事を応援してくれている天音のため、今回だけは明久を見逃してやると彼を見下ろしながら言い、天音は美春の言葉に笑顔を見せる。

「真海さん、実際、坂本から、吉井を渡されたわけだけど、どうするんだい？ 別に俺達は吉井をグロテスクに殺す意味なんてないし」

「そうですね。私達はFクラスではないですし、吉井くんを殺すのはちょっと、えっ！？ どうして、そんな目で見るんですか！？」

源二は3人の様子に苦笑いを浮かべて明久の処置を話し合おうとすると天音は常識的に人は殺せないと言うがクラスメート達は天音に疑いの視線を向け、天音はクラスメートの視線に驚きの声をあげ、

「それは、まあ……真海さんの殺意、怖いし」

「吉井も思った」

「それは僕は実際に包丁を向けられてるわけだし」

明久はDクラスの生徒達の言いたい事もわかると頷くが、

「あれは作戦を成功させるために必要な事であっただけで、それが私の殺意とはいわないです。だいたい、私程度では、あの偉大な殺意様には敵わないですし、殺意を語るなんておこがましくて、だから、違うんです!!」

「……いや、殺意と言われる時点でどうかと思うよ」

「……と言うか、本当は悪い気はしてないんじゃない?」

天音は自分に殺意にまみれていると言われる事を全力で否定するがその否定の仕方はおかしく、明久と源二は肩を落とし、

「だから、違います。私はただの戦闘好きです!!」

「……天音ちゃん、それもあまり変わらないからね」

「そ、そんな事はないです!!　そ、そうですね?」

天音は自分を『戦闘好き』だと吠え、美紀は天音の様子に苦笑いを浮かべると天音はクラスメートに同意を求めようとするがクラスメート達は全員が首を横に振る。

第39問

「あう……」

「あ、あのさ。それで、結局、僕はどうしたら良いのかな？」

天音がクラスメートの反応に教室の隅で小さくなっていじけ始め、明久は天音の様子に苦笑いを浮かべながら、自分の処置に付いて聞くと、

「とりあえず、真海さん、預かりで」

「真海さん、あんな感じだけど」

「さっきも言ったけど、俺達は吉井をグロテスクに殺すつもりもないし、有効に使ってくれるのって真海さんだけかな？ それとも、清水さんが玉野さんに引き渡されたいか？」

「え、遠慮するよ！？ し、真海さんでお願いします」

源二は明久の処遇をどうするか困ったように天音に丸投げすると明久に伝えると明久は引き合いに出された2人を見て、身の危険を感じたようで大きく頷き、

「それじゃあ、今日は解散かな？ 真海さんの予想では明日の午前中から、Eクラスとの試召戦争になると思うから、各自、しっかり休む事、後は状況次第で試召戦争中に回復試験を受ける事になると思うから、今日、使った教科を復習しておく事かな？ 真海さん、これくらいで良いかな？」

「は、はい。問題ないです」

源二はクラスメート達に解散を支持すると生徒達は帰宅を始め出すが、

「わたし、殺意が高いわけじゃないです……」

「あ、あの。平賀くん、真海さんは話を聞いてなかったんじゃないかな？」

「……吉井、後は任せた」

「ちょ、ちよつと、平賀くん、逃げないで!？」

天音はあまり話を聞いていなかったようので教室の隅でいじけたままであり、明久は源二に天音をどうにかして欲しいと頼むが源二もどうしたら良いかわからないようで明久に任せて逃げ出す。

「……あ、あのさ。真海さん? ……僕の声に気付かない? それなら、スカートの中を」

「……天音におかしな事をしたら、この場で首をかつ切りますわ」

「な、な、何を言ってるんだよ!? 僕は紳士だよ。女の子のスカートの中をのぞこうなんて思ってるじゃないよ!？」

明久は天音に近づいて声をかけるが天音はかなり落ち込んでいるようで反応はなく、そんな天音の姿に明久の頭には邪な考えが浮かび、天音のスカートの端をめくろうとした時、明久の背後からは殺意の

こもった美春の声が聞こえ、明久はおかしな事は考えていなかったと慌てて弁明を始め、

「まあ、良いですね。今日は美春は店の手伝いをしなければいけないので帰りますが、天音におかしな事をしたら、美春が豚野郎の臓物を引っ張り出してあげますわ！！もちろん、天音を見捨てて帰っても同じようにしてあげますわ！！」

「き、きちんと真海さんが正気に戻るまで、護衛させていただきま
す」

美春は明久を信じてはいないようだが、彼女も時間がないようで明久に天音を任せると教室を出て行き、

「……あ、あの。真海さん、僕はいつまで学校に残ってないと行けないのかな？」

「へ？　よ、吉井くん、今、何時ですか？」

「何時って、6時かな？」

「ど、どうして、そんな時間になっているんですか！？　そ、それにどうして、吉井くんが残っているんですか」

天音が正気に戻ったのは6時を回る手前であり、慌てる天音の様子に明久は苦笑いを浮かべると、

「まあ、帰りながら話すよ。カバン、取ってくるね」

「ま、待ってください。私も行きます」

明久はFクラスの教室からカバンを取ってくると言ってDクラスの教室を出て行こうとし、天音は自分のカバンを持つと慌てて明久の後を追いかけて行く。

第40問

「ただいま」

「吉井くん、それは流石に」

明久はこの時間には教室に誰もいないと思ったようであだ言を言いながらFクラスの教室のドアを勢いよく開けると天音は明久の様子に苦笑いを浮かべた時、

「よ、吉井くん!？」

「あれ？ 姫路さん？」

教室には瑞希が残っていたようで驚きの声をあげる。

（あれはラブレターを書いてる？ …… 吉井くんを止めた方がいいかな？）

瑞希は明久の登場に驚きを隠せないようで慌ててちゃぶ台の上に置かれている便せんや封筒を隠し、天音は瑞希が残ってやっていた事に理解したようでおかしい考えをしていそうな明久の顔を見て苦笑いを浮かべると、

「これはですね。その!？ きゃっ!？」

「吉井くん、そう言うのを覗くのはルール違反だと思いますよ」

瑞希はラブレターをかき集めて立ち上がった拍子に転んでし

まい、持っていたラブレターをぶちまけてしまい、明久は拾おうとするが天音は明久を止め、

「真海さん？」

「手伝います。やっぱり、男の子には見られるのは嫌ですもんね」

「は、はい。ありがとうございます」

そこで瑞希は天音がいる事に気づき、首を傾げると天音は男の子の明久には見せない方が良さと思い彼女のラブレターを拾い集めると瑞希は天音に頭を下げる。

「それじゃあ、吉井くん、帰りましょうか？」

「そうだね。姫路さんはまだ残るの？」

「わ、私も帰ります。あ、あの」

「それじゃあ、一緒に帰りましょう」

瑞希は天音と明久が一緒にいるのが気になるようで声をかけようとするが天音と明久は何も気にする事なく瑞希に声をかけ、3人で教室を出て歩き出し、

「あ、あの。吉井くんはどうして、真海さんと一緒にいるんですか？」

「えーと、同盟の件で僕はDクラスに引き渡されたわけだろ。それで、僕の処遇は真海さんに一任されちゃったんだよ」

「そうなんですか？ …… へ？」

瑞希は遠慮がちに2人が一緒にいる理由を聞くと明久は簡単に自分に起きていた事を説明し、天音は落ち込んでいたせいか話をまったく聞いていなかったようであり、きょとした表情をすると、

「本当に聞いてなかったんだね」

「はい。まったく、聞いていませんでした…… どうでしょうか？」

「いや、僕に言われても」

明久は天音の様子に苦笑いを浮かべ、天音はどうしたら良いのかわからないようで困ったように苦笑いを浮かべ、

「とりあえずはどうしましょうか？ …… そうだ。この後、買い物に付き合ってください。荷物持ちをお願いします」

「荷物持ち？ そんなので良いの？ 僕はもっとグロテスクに殺されたり」

「えーと、ですから、普通に考えたら殺すってところには行きつかないと思いますよ」

天音は明久の処遇を自分に任されても困るように簡単に済ませようとするが明久は天音の言葉が信じられないように驚きの声をあげ、天音は明久が驚く意味がわからないようで大きく肩を落とし、

「それじゃあ、行きましようか？ 姫路さんも買い物行きませんか」

？ 男の子が居れば荷物制限が外れますし」

「そうですね。吉井くん、お願いします」

「ま、待って、いくらなんでも2人分の荷物は持てないからね!？」

天音は瑞希も誘い、瑞希は天音が明久には特別な感情を持っていないように見えたようで安心したのか大きく頷き、2人で先を歩き出すと明久は慌てて2人を追いかけて行く。

第41問

「TRPG？」

「はい」

3人は商店街を適当にぶらつくとき天音は本屋で目的の本を手にしたように楽しそうに笑っており、明久は天音が買った本に興味があるようである。

「確か、テーブルトーク・ロールプレイング・ゲームの略だったよね？」

「吉井くん、知ってるんですか！！」

「え、う、うん。名前だけは聞いた事があるよ。やった事はないけど」

「そうですか」

明久は天音の趣味である『TRPG』の名前だけは聞いた事があるように苦笑いを浮かべると天音は少し残念そうな表情をすると、

「あ、あの。吉井くん、真海さん、それは何なんですか？」

「姫路さん、興味があるんですか？」

「い、いえ、そう言うわけではないんですけど」

「大丈夫です。任せてください。興味を持っていただけのように最初からしっかりと基礎を教えます!!」

瑞希は2人の話に入って行こうとしたようだが、それは天音のおかしなスイッチを入れる事になり、天音は瑞希に飛びついて行く。

「……真海さん、そろそろ、帰らない？　あまり遅くなると姫路さんも真海さんも危ないし」

「そ、そうですね」

「まだ、良いじゃないですか。そうだ。それなら、私の家にきませんか。ご飯を食べながらゆっくりとお話しましょう」

天音のスイッチが入って1時間が過ぎたころ、明久はこのままでは帰れないと判断したようで天音に声をかけるが天音の勢いは止まる事なく、明久と瑞希を自分の家に誘うと、

「あ、あの。流石にご家族の方にご迷惑になると思いますし」

「ご飯？　……それも真海さんの家で？　真海さんは可愛いし、そんな子の家で夕飯をごちそうして貰えるのか？　僕って勝ち組？　いや、待てよ。でも、そんな事が清水さんに知れたら、僕はFクラスのみんなだけじゃなく、清水さんにも殺されてしまう」

瑞希は苦笑いを浮かべて断ろうとするが明久は天音の家での夕飯と言う事に彼なりの葛藤があるのか真剣に悩み始め、

「吉井くん、ダメですよ。いくらなんでも、今日始めて会った人の家に上がるなんて何か間違いが起きたらどうするんですか？」

「ひ、姫路さん！？ い、いきなり、どうしたの？」

瑞希は明久の態度が気に入らないのか笑顔だが背後には天音の殺意にも負けないくらい真つ黒な殺意を背中にまとい、明久は瑞希の様子に身の危険を感じたようであり、顔を引寄せながら後ろに下がります。

「あ、あ、あれが殺意？ 姫路さん？ …… 姫？ さ、流石は姫さんの殺意だ」

「し、真海さん、わけのわからない事で納得してないで、た、助けてよ」

「吉井くん、助けてって言うのはどう言う事でしょうか？」

天音は瑞希の様子に何かを感じたようで大きく頷くが明久は命の危険を感じているようで天音に助けを求めるがその一言が瑞希の殺意をさらに1段階引き上げる形になり、

「し、真海さん、姫路さん、僕、今日是用事があった事を思い出した。ごめん。荷物持ちはまた今度にして」

「はい。私はかまいませんけど」

「吉井くん、待ってください。まだ、お話は終わっていません」

明久は全力で逃げ出し、瑞希は明久の後を追いかけて行き、

「吉井くんの鈍さの項目を最高評価に、後は姫路さんとの関係を…」

…
L

2人から手に入れた情報をつぶやきながら、家路に戻って行く。

第42問

「……」

「真海さんはどうしたんだい？　Eクラスとの試召戦争の事を考えているのかい」

源二はFクラスとの試召戦争の翌日に登校してくると机に座り、真剣に天音が何かを考えている姿を見て美紀に声をかけるが、

「たぶん、違うと思うよ。たぶん、今は召喚獣のレベルアップにあたってスキルの3つ何を取るかって考えてるんだよ」

「スキル？　レベルアップ？」

美紀は天音が召喚獣をTRPGのゲームのキャラクターと同様に考えていると気づいているようで苦笑いを浮かべるが源二は意味がわからないようで首を傾げると、

「うん。天音ちゃんは設定に凝るタイプだから、考え始めたら、平気で半日とか考えてるよ」

「……いや、そんな事になると試召戦争に負けそうだからね」

美紀はここからは長いと言い、源二が大きいため息を吐いた時、

「失礼するわ。代表をお願いしたいんだけど」

「真海さんと坂本の予想通り、きたね」

気の強そうな別のクラスの女子生徒が数名の生徒を引きつれて教室に入ってきて源二を呼ぶ。

「真海さん、予想通り、Eクラスの宣戦布告の使者がきたよ」

「……はい。わかりました」

源二は天音の身体を揺すると天音はゆっくりと現実に取り戻されたようで返事をし、

「それじゃあ、今日も誰かに話を引っ張って貰うかい？」

「いえ、今日はダメです。昨日は吉井くん1人でしたけど、今日は……代表の中林さん自ら使者としてきているわけですし、それに彼女の性格を考えると宣戦布告の前に無駄な時間の引き延ばしは逆効果でしょう」

源二は昨日の明久の対処と同様にEクラスから情報を得ようとするが天音は昨日とは状況が違っていると首を横に振り、

「それでは代表、行きましようか？」

「了解。今日も任せるよ。軍師様」

「はい。クラスのために精一杯頑張らせていただきます。こちらに通してください」

2人は教室の中央の席に座るとEクラスの宣戦布告の使者を招き入れる。

「Eクラス代表の中林宏美よ」

「Dクラス代表の平賀源二だ」

「同じく新海天音です」

Eクラスの使者は天音の言った通り、Eクラス代表の『中林宏美』だと名乗ると天音と源二は自分達も名乗り、

「早速だけど良いかしら、EクラスはDクラスに宣戦布告をするわ
！！」

「中林さん、すいません。笑えない冗談はやめてください」

宏美は天音と源二を前に声高に宣戦布告を宣言するが天音は彼女の作戦なのか源二に何も言う事なく表情を変えずに宏美の宣戦布告を『冗談』だと言い切り、宏美だけではなく教室にいた全員は天音の返しは予想していなかったようで一瞬、空気が凍りつき、

「し、真海さん、いきなり、何を言うんだい？ 上位クラスは下位クラスからの宣戦布告を断れないルールだよ」

「そうなんですけど、代表は上の設備を狙って一丸になっている私達にEクラスと戦うような無駄な時間があると思っていますんですか？ Eクラスですよ。成績がわるいのを部活のせいになっている現実が見れない人達ですよ。部活を言訳にしていますけど部活はバカでもできますけど、バカでは試合に勝てないんですよ。そんな人達の集まりのEクラスの相手をしると」

源一は天音を止めようとするが彼女はEクラスを挑発し始める。

第43問

「あなた、私達をバカにしているの！！」

「そうですね。バカにされるだけの行動をしていますから」

宏美は天音につかみかかる勢いで立ち上がるが天音は彼女から視線を逸らす事なく言い切るがその瞳には迷いなど存在しなく、

「Fクラスは實力は足りませんでした、Aクラスを倒すと言う目的を掲げ、その足掛かりとしてDクラスに挑んできました。ですけど、あなた達はなんですか？　ただ、私達の戦力が落ちているから挑んできた」

「な、何よ。それが試召戦争のルールでしょ」

「そうですね。だけど、その戦いには戦うべき人間が掲げる信念も何もない。そんなものを喰らっても楽しくもないですし、私達の身にもなりません。それにFクラスには姫路瑞希、吉井明久と言う戦況をひっくり返すだけの力がありました。あなた達にそれがありませんか？　Fクラスもあなた達Eクラスとは戦う価値がないと思ってDクラスに仕掛けてきたんですよ」

天音は宏美達Eクラスには戦うほどの価値がないと鼻で笑う。

「ちょっと待ちなさいよ！！　姫路さんはまだしも、私達が観察処分者以下だつて言うの？　FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けたのは姫路さんが居ればDクラスくらいになら勝てるって考えた浅はかな考えでしょ！！」

「何を言ってるんですか？ まさか、自分達に彼を倒せるほどの実
力があるとしても？」

宏美は文月学園で最低の評価を持つ明久以下と言われた事に完全に
血が頭に昇っているようであるが天音は彼女の怒りなど気にする事
なく挑発を続け、

「当然でしょ。私達が観察処分者^{バカ}に負けるわけがないでしょ！！」

「……そうですか。戦力の分析もまともにできない指揮官の下では
どうしようもありませんね」

宏美達Eクラスは罵倒の対象をDクラスではなく観察処分者である
明久個人とバカクラスだと思い込んでいるFクラスに向け始め、天
音はEクラスの生徒達の行動を見苦しいと言いたげな表情で見て頷
き、

「代表、すいませんが軍師^{フオーキヤスター}としては間違いないのかも知れませんが、
人間として、ここまで同盟クラスであるFクラスと友人である吉井
くんをバカにされては黙っているわけにはいきません」

「そうだね」

天音はFクラスとの同盟を強く『見せる』ためにEクラスを挑発し
たようであり、源二に目配せをすると源二も何となくだが天音の考
えを理解したようで大きく頷く。

「中林さん、開戦は何時からが都合が良いですか？ ……失礼しま
した。弱った相手にしか攻撃をして来れないような。クラスですか

らHRが終わったなら直ぐにですよ。9時からと理解させていただきます。何も問題がないなら教室から出て行っていただけませんか？ 酷く見苦しいので」

「な、何よ。真海って言ったわね。私達をバカにしすぎよ！！ 絶対に補習室送りにしてあげるわ！！」

「お断りします。あなたのように周りを見る事もできない。威勢だけの人間に倒されるほど私は愚かではありませんから」

天音はEクラスを追い払うような態度をとるとその態度がEクラスから更なる怒りを買う事になるが天音はにっこりと笑いながら挑発を続け、Eクラスは天音への怒りを隠す事なくEクラスの教室に戻って行き、

「……緊張しました」

「真海さん、流石に言い過ぎじゃないかな？」

天音はEクラスの生徒達が教室から出て行った後に大きく息を漏らすと源二は天音の様子にため息を吐くが、

「すみません。どうしてもEクラスを『味方に引き入れるために必要な事』だったので」

「天音ちゃん、Eクラスを味方に引き入れるってどう言う事？ 私としては天使ちゃんをあそこまでバカにするのは許せないんだけど」

「美春も一緒ですわ。他の豚野郎はどうでも良いですがお姉さまをバカにされたのは許せませんわ」

天音は必要な事だと苦笑いを浮かべるとEクラスの態度に不快感を示しているのか美紀と美春が声をかけてくる。

第44問

「それでは時間がないですから簡単に今日の作戦を話します」

「ああ。みんな聞いてくれるかい？」

天音は美紀と美春の様子に苦笑いを浮かべると今日の作戦を話したいと伝え、源二は頷くとクラスメート達に話を聞いて欲しいと呼びかけ、クラスメート達は天音と源二に視線を向けると天音と源二は黒板の前に移動し、

「それじゃあ、真海さん、頼めるかい？」

「はい。まあ、今日の作戦と言っても特に難しい事はありません」

源二は天音に作戦の説明を頼むと天音は特に難しい事はないと話すと、

「難しい事はない？ 正面から戦うとか？」

「はい。Eクラスは今日は前のめりに『私』を狙ってきます」

源二は首を傾げ、天音は苦笑いを浮かべるとEクラスの攻撃対象はすでにDクラス代表の首ではなく、自分に移っていると笑う。

「天音、待ちなさい。それは自分を囷にしたと言う事ですかー！」

「はい。そうなりますね」

「ちょっと、どう言う事ですか。なぜ、そんな事を天音がする必要があるんですか!!」

美春は天音が囹になるつもりだと知ると彼女がそんな事はする必要がないと叫ぶと、

「天音ちゃん、それって、自分が補習室送りになる事も想定してるって事で良いんだよね?」

「はい。私は単体で前に出ます。私に攻撃が集中すればその分、Eクラスの視界は狭まります。そこを昨日分けた美春ちゃんと美紀ちゃんの部隊で狙ってください」

美紀は天音はすでに覚悟を決めていると理解したようであり、天音の覚悟を確認するように聞くと天音は囹になるだけではなく単身で前線に立つと言い、反撃を美紀と美春の2人に任せると笑顔を見せると天音の様子にクラスメート達は大きく頷くが、

「……納得がいきませんわ」

「美春ちゃん?」

美春1人は納得がいけないと叫ぶ。

「なぜ、天音が1人で犠牲になる必要があるんですか!!」

「それは作戦は私が立てたわけですし……」

「真海さんが召喚獣の扱い方が1番、上手いしね」

美春は天音が囧になる事に納得がいつていないようで声をあげると天音は美春の反応が嬉しいようだ。源二は天音の考えている事が理解できているようであり、

「そう言う事です」

「ですけど、美春は納得できません!!」

「美春ちゃん、落ち着いて。天音ちゃんが補習室に送られるとは限らないわけだし」

天音は苦笑いを浮かべて頷くが美春は納得できないようであり、天音に詰め寄ろうとする様子に美紀は2人の間に割って入り、

「大丈夫です。私は負けないですから、代表、HRが終わったら直ぐに開戦です。作戦としては先ほども言った通り、私は1人で前に出ます。その後ろに美紀ちゃんと美春ちゃんの部隊を私の部隊は3等分に分かれて」

「真海さんの部隊だった人は玉野さんと清水さんの部隊に2つに分かれて、後は昨日、俺に付いてくれた人も半分を2人の部隊に付ける」

天音は美春を安心させるようににっこりと笑うと部隊を再編しようとするが源二は割って入り、天音を助けるためなのか美紀と美春の部隊を増やし、

「だ、代表？」

「悪いね。確かに真海さんを囧にするのは効果的なのかも知れない

けど、真海さんが負けた場合は士気が下がる可能性もあるからね」

天音は源二の言葉に驚きの声をあげると源二は天音を倒されるわけにはいかないと笑う。

第45問

「代表、何を言ってるんですか？ そんな事をしたら作戦の意味が、この作戦は私が補習室に送られる事が前提での作戦なんです。攻撃を増やしてはダメなんです」

「さっきも言っただろ。ウチのクラスは真海さんが要の1人なんだよ。重要な人間が負けると士気にかかわるんじゃないかな？ それにね。あれだけの挑発をしたんだ。それなのに囷で戦線離脱は代表として許さないよ。真海さん、君は何かあつた時の対応もして貰わないといけないんだ。それが君の言う軍師の仕事じゃないのかい？」

天音は源二の指示に囷作戦が自分が補習室に送られる事にあると言うと源二は真剣な表情をして、天音の作戦は最善かも知れないが最良ではないと言い、

「で、ですけど」

「代表、すいませんが美春は天音と一緒に囷になりますわ」

「それじゃあ、私も」

天音は納得ができないようであり、反論を開始しようとするが天音の反論を遮るように美春と美紀は天音と一緒に囷になるとまで言い始める。

「ダ、ダメです。美春ちゃん、美紀ちゃんは部隊の指揮を」

「聞けませんわ」

「そうだね」

天音は2人を説得しようとするが2人は天音の言葉を聞きいれる気もなく、

『それじゃあ、作戦は決まったみたいだし、あれをやるうよ』

『賛成』 真海さん、玉野さん、清水さん、3人ともこっちに来る
女子生徒達数名は天音にこれ以上は何も言わせない気のように3人を引き寄せると、

「ま、まさか、あれをやるつもりですか？」

『当然、昨日も勝ったし、勝利のジンクスは作るべきだよ』

美春は昨日は余程恥ずかしかったようであり、顔を引きつらせるが女子生徒達は美春に覚悟を決めるように言い、

「……し、仕方ありませんわ。天音、早くやりますわよ」

「う、うん」

「それじゃあ、やろうか」

美春は恥ずかしいようで目を逸らしながら天音を呼び、美紀は天音の背中押して天音、美春、美紀の3人は顔を合せて苦笑いを浮かべると、

「「「みなさんに女神アリアンロードのご加護がありますように」」」

3人は顔を見合わせたまま、神に祈るようなしぐさをして声を合わせると同じように女子生徒達は天音達と声を合わせて祈りを捧げる。

「そ、それでは行きますわよ」

「うん。天音ちゃんも行くよ」

「ま、待ってください。ですから、囃は私1人で良いんです」

「良いから、良いから」

「往生際が悪いですわよ」

美春は祈りをささげた後に逃げるように教室を出て行こうと入口に向かって歩き始め、美紀は美春に続くように天音の手を引っ張り、3人で囃になるために廊下に出て行き、

「それじゃあ、清水さんと玉野さんの部隊の指示を……」

源二は美春と美紀が天音と一緒に囃を買って出たため、源二は新に部隊長を決め始め、Dクラスは開戦の準備を始めるが、

「「「……」」」

『はい。試召戦争でやる気になるのはわかりますがHRを始めますよ』

H Rが終わっていないため、担任が先に廊下に出た天音、美紀、美春を連れて帰って来て席に座るように言い、H Rを始める。

第46問

「美春ちゃん、美紀ちゃん、本当に良いんですか？」

「しつこいですわ。いい加減にしないと美春も怒ります」

「美春ちゃん、それは怒っているのと変わらないよ」

HRが終わり1時間目の授業開始の鐘の音とともにDクラス対Eクラスの試召戦争が幕を開け、天音、美紀、美春の3人はEクラスの囷になるために先陣にかけ出し、

『さ、3人だと舐めてるのか？』

『あいつが真海だ！！俺達Eクラスをバカにした張本人だ！！補習室に送ってやる！！』

Eクラスの前線部隊には10人を持ってきたようであり、その生徒の中には宣戦布告の使者としてきていた生徒もいるようであり、天音の姿を見つけて敵意を向けて駆け寄ってくる。

「行きますわよ。Dクラス清水美春」

「同じく玉野美紀」

「真海天音がEクラス前線部隊に数学勝負を挑みます」

「『『試^{サモン}獣召喚！！』』」

3人はEクラスがこちらに向かってきたのを確認すると試召戦争のフィールドを展開するために準備していて貰っていた『長谷川教諭』に数学のフィールドの展開を頼むと床には機械的な魔法陣が浮かび上がり、1対の魔導銃キャリバーを手にし、レザージャケット姿の天音の召喚獣とグラディウスにロリカ・セグメンタを装備した美春の召喚獣、そして、手には杖を持ちウィッチハットとローブをまとった美紀の召喚獣が現れ、

『す、数学かよ』

『気にするな。相手は3人だ。人数的にはこっちが有利だ』

Eクラスの生徒は数学が苦手な生徒が多かったようで苦虫をかみつぶしたような表情をするが人数差もあるため、直ぐに切り替えて3人に向かって襲いかかってくると、

「……行きます。まずは目の前の2人にエンゲージ」

「天音ちゃん、数学、苦手なんだから下がってよ」

天音は召喚獣を呼び出すと目つきは鋭くなり、彼女の召喚獣はEクラスの2人の生徒の召喚獣に近づいて行くが美紀は天音があまり数学が得意ではないため、後ろに下がるように言うが、

「遊んでいるヒマはありません。メジャーアクションでバッシュを乗せます!!」

「……スイッチが入りましたわね」

「……うん」

天音の召喚獣の魔導銃は素早くEクラス2人の生徒の召喚獣を撃ち抜き、完全に戦闘モードに入った天音の姿に美春と美紀は苦笑いを浮かべる。

『な、いきなり、2人もやられたぞ！！ 増援要請を出せ。一気に攻めきるぞ』

「……指示を出すのが遅いです。もう少し、戦況を見て攻めてくるべきでしたね」

Eクラスの前線部隊を指揮していた男子生徒はいきなり2人が補習室に送られた事に1つ上のクラスの事を甘く見ていたと思ったようでまだ召喚フィールドに拘束されていない生徒に増援要請を出した瞬間には天音の召喚獣が彼の召喚獣の目の前に移動しており、

「……やはり、言った通り、Fクラスより齒ごたえがないです」

『い、いやだ！！ 鬼の補習はイヤだ！！』

天音の召喚獣は男子生徒の召喚獣の眉間を魔導銃で撃ち抜くと縦横無尽に召喚フィールドを駆け抜け、人数的に圧倒的に不利な状況にも関わらず、Eクラスの生徒の召喚獣の点数を削って行き、

「美春ちゃん、私達も行くよ」

「わかってますわ」

点数が減ったEクラスの生徒の召喚獣は美紀と美春に倒されて行く。

第47問

「……バカにしてるわ。私達にはあの人数で良いって事？」

Eクラス代表の中林宏美は前線部隊10人が天音達3人に直ぐに蹴散らされた事に舐められていると思ったようであり、眉間にしわを寄せると、

「許せないわ！！ Eクラス全軍、出るわよ。私達をバカにしたDクラスを打ちのめすわ！！」

頭上がった血をそのままに感情的にDクラスへ向けて総攻撃の指示を出す。

「……きましたわね」

「そうだね。流石にこの人数差はきついよね」

「美春ちゃん、美紀ちゃん、下がってください。Eクラスの目的は私です」

廊下の先に現れたEクラス全軍の様子に美春は真剣な表情をし、美紀は苦笑いを浮かべると天音はこれ以上は2人に迷惑はかけられないと1人で向かって行こうとするが、

「天音ちゃん、今更かな？」

「すでに美春達も完全に敵扱いですわ」

Eクラスの生徒の敵意は10対3で戦った事にすでにDクラスに舐められていると判断しているため、天音1人を補習室に送るだけでは済まされないようであり、

「……すいません。ここまで、単純だとは思いませんでした」

「もしかしたら、Fクラス以上に単純かもね」

「みたいですわ」

3人はEクラスの生徒の様子に大きくため息を吐くとその様子がさらにEクラスの生徒達の怒りに油を注ぐ行為でしかない。

「天音、どうするのですか？ このまま、迎撃で良いのですか？」

「召喚フィールドから出ないように後退しながら戦います。私達の目的はEクラスの生徒の成績を削る事です。無理に倒す必要はないです」

「うん。了解だよ」

「わかりましたわ」

天音は完全に美紀と美春を巻き込んでしまった事に罪悪感があるようだ。が、美紀と美春はそんな事を気にしておらず、天音の指示に大きく頷くとすでに10倍にもなった人数差に怯む事なく、召喚獣に指示を出し、

『下がったぞ。このまま、突っ込め!!』

『行くぞ。勢いは俺達にある!!』

天音達の後退はEクラスの生徒達に勢いづけるものには見えるがそれは錯覚にすぎず、天音の召喚獣の武器である魔導銃キャリバーから放たれる光と美紀の召喚獣の杖から放たれる火球はEクラスの生徒の召喚獣を倒す事はできないが確実に点数を削って行き、3人に飛びかかってきた召喚獣を美春の召喚獣が弾き返して行く。

『……代表、そろそろ、俺達も出るべきじゃないか?』

『そうよ。いくら罔とはわかってても3人を犠牲にするわけにはいかないよ』

源二の元に天音達が作戦通り、後退してきたと言う連絡が届き、クラスメート達の多くは天音達3人を助けようと源二に詰めより、

『そうだね。Dクラス全軍、出るよ。良いかい。真海さん、玉野さん、清水さんを全力で守るんだ!!』

『待てよ。代表、それだと真海が決めた作戦と違ってくるぞ。作戦には犠牲も付き物だし』

源二は総攻撃の指示を出す数名の生徒が天音の指示通りに動いた方が良いのではないかと源二に聞くが、

『違う。確かにそれもあるかも知れないけど、誰も欠けずに戦い抜く事、それが最善手だ!!』

『まったく、仕方ねえな。行くぞ。3人を補習室に送らせるな!!』

源二は首を横に振るともう1度、全軍に総攻撃の指示を出し、このどこか冷徹になりきれない代表にクラスメート達は好感を持っているように誰1人欠ける事なく、Eクラスに攻めかかって行く。

第48問

「真海さんって言ったわよね？　どう、バカにされた人間に見下される気分は？」

「そうですね。悪くはないですよ。これも計算無いですし」

宏美は何も考える事なく、Eクラスを挑発した天音、美紀、美春の3人をEクラスは取り囲むように陣取り、宏美は3人の前に立ち、見下すように笑うが天音は最初から自分は補習室送りになる前提での作戦のため、宏美の言葉に悔しさなどは全く見せず、

「そうだね。時間稼ぎも点数も削らせて貰ったし、私達3人の仕事としては充分すぎるくらいかな？」

「そうですね。正直、Eクラスがここまでバカだとは思いませんでしたわ」

美紀と美春も天音と同じ意見であり、悔しいと言う表情はしなかっため、

「負け惜しみはもう良いわ！！　Eクラス代表、中林宏美がDクラス深海天音、清水美春、玉野美紀に数学勝負を挑むわ。試獣召喚！
！」

「……代表なのにさんざん点数を削った教科で仕掛けてくるなんて情けないですわ」

「ちよつとね」

宏美は見せしめのために代表自らEクラスをバカにした3人を倒そうとするがその態度がさらに宏美が三下に見えたようで美春はため息を吐き、美紀は苦笑いを浮かべると、

「良いから、召喚獣を呼びなさいよ！！　すぐに補習室に送ってあげるわ！！」

「そうですね。脇役はそろそろ舞台から下りないと幕が締めまりませんから」

宏美は3人を怒鳴りつけ、天音は宏美の反応が予想通り過ぎるようであり、苦笑いを浮かべる。

「Dクラス真海天音」

「清水美春」

「同じく玉野美紀、受けます」

「「「^{サモン}試獣召喚！！」」」

3人は宏美の誘いに乗り、召喚獣を呼び出すとすでに召喚獣の数学の点数は20点以下になっており、

「すぐに片付けて、あなた達の首を持ってDクラスに攻め落としてあげるわ！？　って、何？　何が起きたの！？」

宏美が3人の召喚獣に攻撃を仕掛けようとした時、総攻撃の指示を受けたDクラスの生徒達が天音達を救出するために声をあげてEク

ラスの生徒に襲い掛かり始め、宏美はまったく考えてもいなかったのか驚きの声を上げ、宏美の慌てようにEクラスは混乱し始める。

「天音ちゃん？」

「攻撃が早いです。このままじゃ、Dクラスにも戦死者が多く出ます」

美紀は天音に何があったかと聞くと天音はDクラスの生徒の声に源二が総攻撃の指示を出した事に気づき、作戦より時間が早いため、Dクラスの被害を計算し始めるが、

「天音、今はそんな事を考えているヒマはありませんわ。せつかくの状況なんですから」

「そうですね。ここまで来たら、やるしかないですね」

「元々、私達は困ったわけだしね」

美春は完全に浮足立ってしまったEクラスの様子に自分達のやるべき事を理解したようであり、天音に声をかけるとすでに3人で死地をぐりぬけている天音と美紀は美春の言いたい事を直ぐに理解し、

「……行きます。美紀ちゃん、援護をお願いします」

「うん」

「まったく、どうして、遠距離でも攻撃できるのに前に行くんですか？」

天音の言葉と同時に彼女の召喚獣は宏美の召喚獣に向かい駆け出して行き、その後方からは美紀の召喚獣が宏美の召喚獣に向かい火球を放ち、天音の召喚獣に続くように美春の召喚獣は駆け出して行く。

第49問

「ちょ、ちょっと、わざわざ、補習室に送られにきたわけ？」

「……そう思っている間は勝てませんよ」

天音の召喚獣が宏美の召喚獣との距離を一気に縮めると宏美の召喚獣は武器であるバットを天音の召喚獣に振り下ろすが、

「な、何！？」

天音の召喚獣はバットを避ける事なく、宏美の召喚獣に体当たりを喰らわせるとバットには力が伝わりきらなかったようで、

「まだ、補習室送りにはなりませんよ」

「すぐに送ってあげるわよ」

天音の召喚獣の点数はついに1ケタに突入するが天音は宏美など相手ではないと言いたげに笑うと宏美の怒りはさらにもう1段階引き上げられ、

「……完全に天音のペースですわね」

「そうだね」

美紀と美春は2人の様子に苦笑いを浮かべる。

「さっさと終わらせてあげるわ！！」

「……」

宏美の召喚獣は天音の召喚獣に向かい、再び、バットを振り下ろすが天音の召喚獣は横に飛び、バットを交わすと宏美の召喚獣に向かって魔導銃キャリバーの引鉄を引き、光が宏美の召喚獣を撃ち抜き、

「もう、ちまちまとうとうしいわね!!」

宏美はわずかずつでも攻撃を仕掛けてくる天音が目障りなようで天音を怒鳴りつけた時、

「よそ見してて良いのかな？」

「な、何!？」

「そう言う事ですわ。だいたい、あなたは美春達3人に挑んでいたはずですわ」

美紀の召喚獣から火球が放たれ、宏美の召喚獣を直撃した直後、美春の召喚獣が宏美の召喚獣の前まで移動しており、グラディウスが宏美の召喚獣を薙ぎ払う。

「3体1なんて汚いわよ」

「……いや、そうしたのは中林さんだよ」

3人の連携攻撃に宏美は点数はあまり削れてはいないものの少しだけ不利だと思ったようで3人に罵声を浴びせるが美紀は苦笑いを浮かべて答え、

「どうやら、後がなくなってきたのではないですか？」

「そんなわけないでしょ！！　あなた達の点数なんて1発でも当たれば終わりでしょ！！」

「そうですね。与えられたらですけど」

天音と美春は美紀を守るように宏美と美紀の間に立つと宏美は感情に任せて飛びこんで行くが、

「……感情的に動くしかできないなんて、あなたに国を指揮する資格はないです」

天音の召喚獣は宏美の召喚獣の横に回り込み、魔導銃キャリバーの引鉄を引き、バランスを崩したところに美春の召喚獣のグレイウスが襲い、宏美は向きになり美春の召喚獣を襲うが魔導銃から放たれた光が宏美のバットの軌道を逸らし、美春がバットを交わしたところで美紀の火球が宏美を狙う。

「な、何で、あなた達はそんなに召喚獣を使うのが上手いのよ。点数なんてもうないでしょ！！」

「すいません。それなりに戦場を経験してきましたから」

「3人でね」

宏美の召喚獣は地味に点数を削られ、最初の点数から半分以上に点数が下げられている事に気づき、忌々しそうに3人を見ると天音と美紀はただやみくもに戦っていたではないと笑った時、

「そう言う事ですわ」

美紀の火球が宏美の召喚獣に向けられ、宏美の召喚獣は何かその火球を交わすが美春はその瞬間を狙っていたように美春の召喚獣のグレイウスは宏美の召喚獣の頭に振り下ろされ、

『終結!!』

宏美は美春の攻撃に反応する事はできず、彼女の召喚獣は真つ二つにされ、試召戦争の終結の音が響く。

第50問

「ど、どうして？」

宏美は圧倒的な点数差があつたにも関わらず、戦況をひっくり返されるとは思っていなかったようで自分が負けた事が信じられないように膝から崩れ落ちると、

「勝利を確信した時にこそ。気を引き締めるべきでしたね。それに中林さんは代表なんですから、目の勝利ではなく全体に目を向けるべきでしたね」

「まったくですわ」

天音は宏美に手を差し出してにっこりと笑い、美春は宏美が自分達を見下した態度を取っていたのが気に入らないように見え、

「まあ、美春ちゃんも落ち着いてよ。そうなるように作戦として挑発したわけだし」

「そうですね」

「仕方ありませんわね」

天音と美紀は美春に機嫌を直して欲しいと頼むと美春は2人から言われると納得するしかないとため息を吐く。

「真海さん、清水さん、玉野さん、3人とも無事？」

「はい。何とか補習室に送られないくらいには」

「天音ちゃんは1桁に突入してるけどね」

「……回復試験の申請をお願いしますわ」

源二は宏美が討ち取られた事で呆然と立ち尽くしているEクラスの生徒をかきわけて3人に駆け寄ってくると3人は苦笑いを浮かべ、

「わかってるよ。3人だけじゃなく、他のみんなもギリギリだからね。結局、正面からぶつかったわけだし」

「そ、そうです。どうして、動いたんですか？」

源二は3人が無事だった事に安心したようで胸をなで下ろすと天音は源二に総攻撃を仕掛けた理由を聞くと、

「みんなが3人を補習室に送るわけにはいかないって言うてね。俺達は3人を見捨てる事ができなかったんだよ」

「で、ですけど、それだと作戦を立てた意味がありませんし」

「なら、次はそんな作戦を立てないように頼むよ。それにね。真海さん」

「な、何ですか？」

源二はクラスメート達の総意だと天音に伝えるが天音は納得ができないようであり、そんな天音の様子に源二は表情を引き締めて彼女を呼び、

「開戦前にも言ったけど、次は自分が囷になるなんて作戦は立てないで欲しいな。戦場は変化してくわけだし、早くに真海さんが退場されると俺だけじゃ、クラスをまとめきれないからね。この総攻撃だってクラスのみんなの総意だし」

「は、はい。気を付けます」

源二は改めて、天音に軍師としては作戦を立てるだけで終わって欲しくないと伝えると源二に続いて集まってきたDクラスの生徒も同じ意見のようで大きく頷き、天音は肩を落とし、小さく頷く。

「それじゃあ、話はここまでにしようか？ 戦後処理もあるし、真海さん、お願いできるかな？」

「は、はい。わかりました」

源二は小さくなり反省している天音の様子に苦笑いを浮かべると戦後処理を始めようと声をかけ、天音は大きく頷くと、

「それではEクラス代表の中林さん、これから戦後処理に移らせていただきますが、問題はありませんか？」

「……ええ。お願いするわ」

天音は落ち込んでいた顔を直ぐに引締め、宏美に向き合うと宏美はDクラスがFクラスにとった戦後処理もあるためかどこかでこの敗戦を無しにして貰えると希望的な思いがあるように見える。

第51問

「と言っても、これと言って何も言う事はないんですけど、EクラスにはFクラスと違って情けをかける価値などありませんし」

「な、何ですって!!」

天音はやはり、DクラスがFクラスに取った結果でEクラスは根拠もなく自分達の身を安全だと思っている事に気づいており、Eクラスに試召戦争を引き分けて終わらせる価値はないと言い切ると宏美は驚きの声をあげるが、

「どうしました？ まさか、戦後で弱っているところに卑怯にも攻撃を仕掛けてくるようなクラスを信頼できるとでも思っているんですか？ ここで情けをかければあなた達はまた同じ事を繰り返しますよね？」

「そ、それは」

天音は自分でEクラスとの試召戦争を企んでおきながらも、Dクラスは被害者でEクラスは卑怯者と思い知らせたいようであり、その言葉にどこかで気が緩んでいたであろう宏美達Eクラスの生徒は気まずそうに目を伏せる。

「私達がFクラスと手を組んだのはFクラスの上を狙う姿勢に感化されたからです。確かに学力は最低ランクかも知れませんが、Fクラスの代表はDクラスに勝つためにわずかな時間で勝てる策を練って挑んできました。Dクラスを倒せた場合の事も考えてです。それに対してEクラスは目の前に弱った相手がいたから付け込んできた。

評価としては正当だと思いますけど、何か反論はありますか？」

「だ、だって、それが試召戦争のルールでしょ？」

「そうかも知れませんが、あなた達はそれで勝って胸を張れるんですか？」

天音はEクラスの評価は最低だと言い切り、Eクラスには部活動で活躍している生徒達もいたため、自分達の行動を恥じてきたようだが、宏美は代表としてクラスを守る必要があるため、クラスメートの意思統一ができなくなってしまう事を恐れて試召戦争のルール的には問題ないと反論しようとするが天音はEクラス全員に問いかけるとEクラスは完全に黙り込んでしまう。

「私達は卑怯な真似は許せません。確かに試召戦争は……いえ、文月学園は実力主義です。だからと言っても本当にそれで良いんでしょうか？ 召喚戦争の意味はクラスの仲間と協力して上へ挑む事、協力して仲間を守る事にあるんじゃないでしょうか！！」

「……真海さん、また、おかしなスイッチが入ったね」

「そうですわね」

「まあ、これも天音ちゃんだからね」

天音は拳を握りしめ、EクラスだけではなくDクラスの生徒、他の教室で自習を行っている生徒達にも聞こえるように演説を始め出し、そんな天音の様子に源二は苦笑いを浮かべると美春や美紀は天音の行動になれてきたのは大きく頷き、

「それで、天音はいつまであのままにしておいたら良いと思いますか？」

「もう少しあのままでも良いと思うよ。何か、盛り上がってるし」

「……そうだね」

美春は戦後処理を早く済ませたいようだが、天音の演説にDクラスの生徒達は声を上げ始め、彼女を支持し始めており、それに続くようにEクラスの生徒達も自分達の非を完全に認めたようで宏美の周りに集まり、何かを相談し始めている。

第52問

「平賀くん、真海さん、迷惑をかけたわね」

「え？」

宏美は盛り上がっている天音の周りに苦笑いを浮かべながら源二に頭を下げると源二は宏美の意図がわからないように首をかしげ、

「真海さんの言葉で私達は自分達がいかに卑怯な事をしたか考えさせられたわ。だから、戦後処理は終わり、Eクラスは設備を落とす少し反省するわ」

「反省してくれたなら良いんですよ。代表、中林さん、今回の試召戦争は引き分けにしましょう」

「天音ちゃん、どう言う事？」

「そうですわ」

宏美は答えが出た事で晴れやかな表情をして設備を落とす事を告げると天音は宏美達Eクラスがその答えを出すのを待っていたようであり、美春と美紀は天音の考えが理解できないように天音に聞き返し、宏美達Eクラスは天音の言葉に鳩が豆鉄砲を喰らった時のように間抜け面をする。

「私達の目的は下位クラスの設備を下げる事じゃありませんし」

「他に何か考えがあるって事だね。それじゃあ、よろしく頼むよ。」

真海さん」

「はい」

天音は他に考えがあるようであり、源二は苦笑いを浮かべると天音に戦後処理を頼むと天音は宏美に向きあい、

「先ほども言わせていただきましたが私達の目的は別にEクラスの設備を下げるためではありません。ただ、『卑怯な真似』が許せなかっただけです。ですから、次は正々堂々と向かって来てくれる事を望みます」

「情けをかける気？」

天音はEクラスが仕掛けてくるなら、次も受けて立つと笑うと宏美は目つきを鋭くするが、

「そう思うなら別にかまいませんよ。ですから、設備を落としたいなら勝手にお願いします」

「……」

天音はDクラスからEクラスに出す条件は何もないと言い切り、宏美は天音の本心を確認しようとしているのか天音をじっと見ると、

「天音、どう言う事ですか！！ 美春は納得がいきませんわ」

「清水さん、落ち着いて」

美春は天音のEクラスへの処分が納得できないように声を上げ、源

二は苦笑いを浮かべて美春を止める。

「それで、天音ちゃん、どうして、Eクラスに設備を落とすように言わないの？」

「さつきも言いましたけど、私達に利点ってありますか？ わざわざ、設備を落として恨みを買うのは気が引けます」

「そう言われるとそうなんだけど」

美紀も天音の考えがわからないようで苦笑いを浮かべると天音はEクラスの設備を落とす利点は何1つないと言い切り、

「Eクラスのみなさんは部活が中心で身体を鍛えていると言っても壊れたちやぶ台と腐った畳では身体を壊してしまうかも知れませんか」

「それは確かにそうだね。誰かが体調崩すと俺達も罪悪感を覚えそうだ」

天音はEクラスの体調を考えていると言い、源二は天音の考えもわかると大きく頷き、天音の言葉にDクラスの生徒達はそこまでの責任を持ちたくないように見え、

「ここで私達がEクラスの設備を落として誰かに何かあったら、流石に責任を取れませんか。土気にも影響が出てきてしまいますから、後の事を考えた結果です」

「そう言う事なら、引き分けにさせて貰うわ。その代わり、何もしないと情けをかけられた気もするから、何か私達にできる事ってな

い？」

天音の言葉に宏美はDクラスにもDクラスで引き分けに終わらせる利点があると思ったようだ、このままでは何か収まりが悪いと思ったように何か協力できる事はないかと聞くと、

「それなら」

「……出たよ。真海さんのノート」

天音はノートを手にEクラスに他のクラスの戦力データを集め始める。

第53問

「……根本の彼女がCクラスの代表？ それは本当か真海？」

「疑いますか？」

「いや、一応、聞いてみただけだ。真海のまとめた情報は信じるさ」

天音は家に帰った後、Eクラス戦で手に入れた情報でFクラス対Bクラスの試召戦争でFクラスの雄二が知っておいた方が良い情報を抜粋して雄二に電話で伝えたと雄二は1度、手を合わせた事もあり、次の天音との対戦の事も考えているのか天音を見極めようとしている部分があるのは見え隠れしているが天音は気にする事はなく、

「他にも主力だと思われる生徒の成績データもありますけど、それは後でメールで添付します。できれば携帯だと面倒なのでパソコンのアドレスがあるならそちらに送信したいんですけど」

「ああ。助かる。この電話が終わったらアドレスを送る」

「それなら、1度、切りましょう。情報を見て貰った方が話をしやすいですし」

「わかった。1度、切るぞ」

「はい」

天音の言葉に雄二は頷くと1度、電話を切ると自宅のパソコン用のメールアドレスを天音の携帯電話に送信すると天音はノートにまと

めた各クラスのデータをパソコンでまとめており、雄二に直ぐにBクラスの生徒のデータを送信すると、

「……良くここまで集めたな」

「情報は何にも勝る武器ですから」

雄二はメールを開くとBクラス全員の平均得点、性格、人間関係等が書かれており、天音から送られてきた膨大な情報に顔を引きつらせるが天音は気にする様子もなく、

「データを見て貰うとわかるようにBクラスは全体的に点数は良いですが、土屋くんのように単体教科で特出した人間はいませんから、保健体育を主力にして教科変更されたら姫路さんにフォローして貰うのが戦いやすいと思います」

「ああ。保健体育は受験教科でもないから、まともに勉強している人間もいなさそうだな」

2人はBクラス戦は康太と瑞希を使つての戦争になると話し始める。

「しかし、室外機が壊しての奇襲ができないと根本まで行けるのか？」

「え？ 坂本くん、わざわざ、根本くんのところまで姫路さんや土屋くんを進めるつもりですか？」

「そりゃ、俺達で根本を倒せるのは姫路とムッツリーニ、後は無傷だったら島田の数学か？」

雄二は純粹な火力ではBクラスを倒すのは難しいため、首をひねるが天音はそんな必要はないと言い、雄二は天音の言葉に首を傾げると、

「姑息で卑怯で自分以上の策士はいないと思っている根本くんが代表なんですよ。坂本くんみたいに勝手に墓穴掘って、墓穴落ちて、墓穴に生き埋めになると思いますよ」

「……もう少し、言葉を選んでくれ」

「そうですね？ まあ、Bクラスの弱点は根本くんと考えて問題ないと思います。一先ずは坂本くんはBクラスを教室に閉じ込めるように動いて下さい。その過程でBクラスが接触してくると思いますから、その時に次の指示を出します」

天音はBクラスの弱点は根本だと言い切ると彼女にはすでにFクラス対Bクラスの結果が見えているのか楽しそうに笑い、

「そうそう。私は霧島さんに睨まれたくないのできちんと履歴は消しといてくださいね」

「……そんな事までしないといけないのかよ」

「良いじゃないですか。嫉妬してくれるなんて愛されてる証拠ですよ。おかしい意地を張らなければ良いんですよ」

「い、意地なんて張ってねえよ!？」

「そう言うことにしておきます」

天音は雄二をからかうと雄二は全力で否定するなか、電話を切る。

第54問

「始まったね。真海さん、本当にFクラスはBクラスに勝てると思うのかい？」

「そうですね。私達しだいです」

廊下からFクラス対Bクラスの試召戦争の声が聞こえるなか、Dクラスは自習時間になっており、源一は天音に声をかけると天音はDクラスがこの試召戦争の力ぎを握っていると笑い、

「それより、問題は何を伸ばすかですね」

「天音は何をしているのですか？ 次の策を考えているんですか？」

天音はまだ自分達が動く時間ではないと思っているようで自習のために教科書を机の上に並べて腕を組むと美春は天音がまた何か考えていると思ったようで後ろから覗き込む。

「美春ちゃん？ そう言うわけじゃないです。この先、試召戦争を続けていく上で主戦力になる教科の1つか2つあった方が良いと思いますして」

「確かにそうだね。俺達は良いも悪いも可もなく、不可もなくって成績だからね」

「確かにそうかも知れませんが、簡単に成績が上がるなら誰も苦労はしませんわ」

天音は苦笑いを浮かべると試召戦争に力ギになるであろう単体教科を強化しようとしているようであり、源二は天音の意見に頷くが美春は簡単に成績は上げられないと首を横に振ると、

「天音ちゃん、私は家庭科を伸ばそうと思うよ。被服系はそれなりに良いから調理系を伸ばそうと思うんだ」

「そうですね。美紀ちゃんは家庭科の成績はまだ伸びしろがあると思います」

美紀も天音と同様に考えていたようで家庭科の勉強を始めると宣言し、天音は大きく頷くが、

「待つて。玉野さん、家庭科を伸ばしたって試召戦争に役に立つのかい？」

「そうですね。それなら、数学や英語と言った教科を伸ばすべきじゃないかもしれませんか？」

源二と美春は美紀が家庭科を伸ばす意味がわからないようで声をあげる。

「いえ、間違っていないと思いますよ。何の教科でも総合得点に関わってきますし、土屋くんの保健体育もそうですが、受験にあまり関係ない教科ですから、メインにして勉強する生徒も少ないはずです。上手く単体教科のフィールドに持ち込めれば充分な戦力になると思っています」

「確かに受験科目にないと勉強は後回しになるのはあるね」

天音は受験に使うような教科以外でも伸ばす意味はあると言い、源二はその言葉に頷くと、

「後はテストの傾向から言えば、やはり、家庭科や保健体育と言った教科は選択問題が多いんです」

「……真海さん、あなたは何を調べているんですか？」

天音は表紙に『教科別テスト傾向と対策』と書かれたノートを取り出すとノートには各教科の選択問題の割合や教師ごとで良く使われる問題の傾向がびっしりと書かれており、美春は眉間にしわを寄せ、

「でも、選択問題が多いなら逆に言えば勉強をしなくても点数が取れるって事だろ。それなら、他の教科の方がよくないかな？」

「確かにその考えもあると思います。でも、選択問題が多いと言う事は時間をかけずに点数を稼げる可能性が高いと言う事です。日本史や世界史も選択問題は多いですが説明をしないといけない問題も多いですし、こちらの方が効率的に良いと思います」

「でも、それって試召戦争のための勉強であって、進学の事を考えるとやっぱりそっちに時間をかけられないよ」

源二は天音の考えは理解できるもののそれでも自分ではできないとため息を吐き、

「それは仕方ないですよ」

「……………真海、いるか？」

「土屋くん、Bクラスが動いたんですか？」

天音は強制ができない事を理解しているため、苦笑いを浮かべた時、音もなく康太がDクラスの教室に現れる。

第55問

「……………空き教室で試召戦争の時間についての取り決めをしたいと言ってきた」

「そうですね？ 時間としては放課後になったら、その日の戦線を維持して明日の朝から再開って事でしようね。姫路さんの体力を考えると坂本くんは受けないわけには行けませんからね。まあ、小者にしては上出来ですね」

康太は接触してきたBクラスからの話の内容を天音に伝えたと直ぐに天音は瑞希の弱点を突いてきている恭二の作戦に小さくため息を吐くと、

「真海さん、何か作戦があるのかい？ 姫路さんの体力を考えれば必要な事なんだろ。それなら、受けるしかないんだよね」

「そうですね。受けるしかありませんよ。その代わり、そんな迂闊で見え見えの作戦を立てていた三下以下の小者に思い知らせてあげましょう」

源二は天音に恭二の作戦に付いて聞き、天音は小さく口元を緩ませ、
「土屋くん、坂本くんはわかっていると思いますがこの誘いに乗るようになしてください」

「……………誘いに乗る？」

「天音、そんな事をして良いのですか？」

天音は康太に伝言を頼むと康太と美春は首を傾げるが、

「良いんですよ。代表、FクラスとBクラスの会談が始まってしばらくしたところに私達はFクラスの教室に向かいます」

「え？ どう言う事だい」

天音は恭二の作戦など見えているようでくすりと笑い、ガンジは意味がわからないように首を傾げる。

「……………一先ずは策があると言う事で良いんだな？」

「はい。坂本くんにもこちらは上手くやりますと伝えてください」

「……………わかった。俺は戻るぞ。すぐに戦線に戻らないといけな
いしな」

康太は天音の言葉に頷くと音もなく、教室を出て行き、

「土屋くんはまさにシーフ/ニンジャって感じですよな」

「…………いや、同意を求められても困るんだけど」

天音は康太の動きに目を輝かせて同意を求めるがクラスメートの反応は酷く悪い。

「す、すいません」

「まあ、良いよ。真海さん、それで俺達がFクラスの教室に乗り込

むって言うのはどう言う事だい？」

「代表、土屋くんがどこで坂本くと根本くんが会うつて言うてたか覚えてますか？」

「え？ 会談を求めるんなら、普通は自分がFクラスの教室に行くか、どこかの空いている教室でだろ」

天音が謝る姿に源二は苦笑いを浮かべると天音は会談の場所を聞くが源二は場所を聞き逃していたようで首を傾げると、

「はい。空き教室です」

「待つてください。天音、それはBクラスが待ち伏せをしていると考えて良いのですか？」

美春はBクラスは会談で卑怯な方法で雄二を倒そうとしていると思ったように眉間にしわを寄せて伏兵を考えているのではないかと聞くが、

「それも手ですが、小者ですからね。こんなところでは仕掛けてきませんよ」

「そこはバカにするんだね」

天音はBクラスが伏兵は恭二の性格ではそれはしてこないと言い切り、源二はため息を吐き、

「はい。だって、この会談の裏でやろうとしている事が透けてますからね」

「天音ちゃん、Bクラスは何をするつもりなの？」

「簡単ですよ。Bクラスは坂本くんを空き教室に呼び出したんですから、さてとそろそろ頃合いでしょうか？ 代表、行きましょう」

天音はくすりと笑うと廊下に向かって歩き出し、

「ま、待つて。1人で行かないでくれ」

「まったく、一先ずは全員ではなく、半分で行きましょう」

「そうだね。私が残るから、美春ちゃんは天音ちゃんを追いかけて」

源二は慌てて天音の後を追いかけて、美春はため息を吐くと美紀と2人でFクラスに向かう生徒を振り分ける。

第56問

「……まさか、こつくるとはね」

「仕方ないですよ。策略家や謀略家を気取っているだけの三下以下が代表なんですから」

源二は天音の後を付いて、Fクラスの教室を覗き込むとBクラスの生徒数名がFクラスの教室の設備のちゃぶ台などを破壊しており、源二は大きいため息を吐くと天音はBクラス代表の根本恭二を三下と言い切り、

『お、お前ら、こんなところに何の用だ？』

『バカクラスが何の用だよ』

天音と源二に気が付いたBクラスの生徒は不味いと言う表情をしながらも実力主義の文月学園ではまるで自分達の行動が肯定されているかと思いきや、こんでいるのか高圧的に天音と源二を追い払おうとするが、

「すいません。犯罪者に罵倒される言われはありませんよ」

「そうだね。設備破壊に個人の持ち物を故意的に壊してるんだ。君達は犯罪者だよ」

天音と源二はBクラスの生徒を軽蔑するような視線で見ると現実を突きつけ、

「ベルフト王子、すいません。Bクラスの生徒がFクラスの設備を

破壊しています」

「……真海、おかしい呼び方をするな」

天音は廊下の先で戦死者を抱えて歩いている西村教諭を呼び付けるとため息を吐きながら西村教諭がこちらに向かって歩きはじめ、

『て、鉄人だと！？　に、逃げるぞ。こんなところで捕まるわけにはいかな！？』

「……すいませんが、犯罪者を見逃すほど美春達は甘くありませんわ」

「そうだね」

Bクラスの生徒達は現行犯で捕まらなければ逃げ切れると希望的なものを持っていたようでFクラスの教室から逃げ出そうとするがすでにDクラスの生徒が逃げ道をふさいでいる。

「真海、助かったんだがお前達はこんなところで何をしているんだ？」

「ベルフト王子、すいません。Bクラスの代表じやくさがあまり良い噂を聞かない根本くんだったので胸騒ぎをしてFクラスの教室を覗いてみたらこのような事になっていました。代表は自習用のプリントを取りに行くついでに付いてきて貰いました。他のみんなはBクラスの生徒が設備を破壊しているのに逃げられたら困るので援軍を頼みました」

西村教諭はFクラスの設備を破壊していたBクラスの生徒を捕まえ

ると天音達にここにいる理由を聞くが天音は平然と偶然だと言いつた時、

「げっ！？ 鉄人、がつ！？」

「……坂本、西村先生と呼べ」

雄二と雄二の護衛なのかFクラスの生徒数名が教室に戻ってくるが雄二は余計な事を言って西村教諭に拳骨を喰らう。

「……それで、真海、平賀、Dクラスが雁首をそろえてお前達は何をしてるんだ」

「坂本、あれを見る」

「これは酷いな」

雄二は西村教諭に拳骨を落とされた頭を押さえながら、天音達がここにいる理由を聞くと源二はFクラスの教室を覗き込むようにと指を差し、雄二は予想はしていたようだが眉間にしわを寄せると、

「ベルフト王子、このままではFクラスは補給試験もままなりません。試召戦争が終わるまでは2学年は自習ですし、Fクラスの回復試験はDクラスの教室で行えるようにしていただけませんか？」

「そうだな。確かに真海の言い分もわかるな」

天音は西村教諭にFクラスが大出を振ってDクラスに入れるように頭を下げ、西村教諭は天音の言葉に納得する点もあるようで腕を組んで考え始め、

「……平賀、真海が頭を叩かれないのはひいきだと思っただが」

「いや、坂本の場合は去年の実績だろ」

雄二は天音が西村教諭から拳骨を落とされないと事に納得がいかなさそうな表情をするが源二は大きくため息を吐く。

第57問

「真海さん、Fクラスを教室に呼んでどうするつもりだい？」

「どうするも何も打ち合わせしやすくなっただろ」

「そうですね。回復試験も戻る距離が短くなりましたし」

西村教諭は天音の提案に頷き、雄二は瑞希と康太がBクラスを教室に閉じ込めた後ろを通ってDクラスの教室に移動すると源二は天音の提案の理由がわからないように首を傾げるが天音と雄二はあくまでも回復試験のためだと笑うと、

「まあ、一先ずはここまでは予定通りと言う事で次は根本がどう動くかな。この後も予定通り動いてくれれば良いんだけどな」

「そうですね。このまま動かなくてもやり用はいくらでもありますからね」

雄二は次のBクラスの行動に小さく口元を緩ませると天音はくすりと笑い、

「……どうして、この2人を引き合わせると不安を感じるんだろう」

「だけど、心強い気はするんだよね」

源二は天音と雄二の様子にため息を吐き、美紀は苦笑いを浮かべ、

「一先ずはFクラスの回復試験のために席を半分くらい開けておけ

「は良いか」

「そうだな。平賀、頼めるか？」

「ああ。後は」

「代表、私はFクラスの教室を片付けてますね。また、同じ事をし
てこないとは限りませんし」

源二はDクラスの教室をFクラスの回復試験に使わせるために席を
開けようすると天音はFクラスの教室の片づけをしに行くと
言っ
て教室を出て行く。

「まったく、美春も天音の手伝いをしてきますわ」

「代表、私も行くね」

「ああ。よろしく頼むよ」

美紀と美春を中心にしたDクラスの生徒の半分が天音の後を追いか
けて行き、

「何か、何から何まですまん」

「まあ、真海さんの場合、他にも何か考えがありそうな気がするん
だけだね」

雄二は苦笑いを浮かべて源二に頭を下げると源二は天音が何か考え
ていそうだとため息を吐く。

「あれ？ 真海さん、どこに行くの？」

「吉井くん、木下くんはどこに行くつもりですか？ 回復試験はDクラスで行ってくださいと指示があったはずですけど」

天音がFクラスの教室に向かう途中で後ろから明久と秀吉が声をかけてくるが天音は2人がFクラスの教室に向かい歩いてきた意味がわからずに首を傾げると、

「ちょっとね。教室が荒されてるのは知ってるけど、僕の筆記道具が壊されてなければ回収しときたいと思ってさ」

「そうなんですか？ そんな思い入れのあるものがあるんですか？」

明久は苦笑いを浮かべて、自分の筆記道具を探したいと言い、天音は明久の筆記道具が大切なものなのかと思ったようであり、

「うん。ストライカーシグマファイブやシャイニングアンサー。正解率良いんだよ」

「……あの。吉井くん、それって鉛筆を転がすって事ですか？」

「え？ そうだけど、どうかしたの？」

天音は明久の言葉で1つの答えを導き出したようであり、眉間にしわを寄せるが明久は天音が疑問に思っている意味がわからないようできょんとした表情をするが、

「……いえ、何でもありません。とりあえず、それなら行きましょ

「うか？」

「うむ」

「うん」

天音は明久の表情にこれ以上は話す事はないと思ったたようにフクラスの教室に向かって歩き出す。

第58問

「これは酷いのじゃ」

「ホントだよ……まだ、少ししかいなかったけど、それなりに良い思い出も……ないね」

「うむ。特に何もないのじゃ」

明久と秀吉は設備を壊されたFクラスの教室を見て、悲しそうな表情をして教室での思い出を語ろうとするが1週間程度では何も思い出と言っようなものはなく、

「……豚野郎どもはいつたい、何をしているのですか？」

「天音ちゃん、子猫ちゃんに、これを着せても良いかな？」

「美紀ちゃん、今は吉井くん達は試召戦争中だから止めてあげて」

美春は2人の様子にため息を吐く隣で明久に襲い掛かろうとしている美紀を天音が必死に抑えており、

「……玉野さんも落ち着いてください。それで、天音は何の企みがあつてここにきたのですか？」

「企みだと言葉が悪いよ。1つは本当に片づけをしにきたんだよ。それにFクラスの私物がここに残っていると脅迫とか材料を探しに来る可能性もあるからね」

「流石に西村先生に捕まっている生徒が出ているんですから、また、設備を破壊しにくる必要はないのではないですか？」

美春は天音にFクラスの教室に戻ってきた理由を聞くと天音はBクラスが再度、仕掛けてくる可能性もあると言うが美春はいまいち、納得がいかないようで首を傾げる。

「美春ちゃん、違うよ。くるとしたら、Fクラスの主力の私物を盗みにくるんだよ。その私物が大切なものなら返す代わりに動くなどか言いだしそうですから」

「……それは最低ですわね」

「特にFクラスの最大火力は姫路さんですから、そう言うのには酷く弱そうですしね」

「……そうですわね」

天音は美春の様子に苦笑いを浮かべるとBクラスは脅迫のネタを探しにくる可能性があるためにその警戒をしに来たと話し、美春は瑞希が脅迫を受けた時に何もできなくばっている姿が思い浮かんだように頷き、

「豚野郎ども、遊んでいるなら、さっさと試召戦争に戻りなさい。不本意ですがここは美春達を守りますわ」

「そうだね」

「う、うん。清水さん、玉野さん、ありがとう」

美春と美紀は明久と秀吉にFクラスの教室はDクラスが警護する旨を伝えると明久はDクラスの生徒に頭を下げ、

「お礼は子猫ちゃんの」

「じゃあ、任せたよ!!」

美紀はお礼に明久に女装をして貰うと言いかけるが明久は身の危険を感じたよう逃げ出して行き、

「それでは頼むのじゃ」

「はい」

秀吉は明久が逃げた後に改めて、頭を下げて明久を追いかけて行く。

「さてと、それじゃあ、お掃除をしましょうか？」

「天音、今更ですが、掃除をする必要はあるのですか？ FクラスがBクラスに勝てばこの設備がBクラスのものになるのですよね。それなら、片づけをする必要はないんじゃないでしょうか？」

天音は掃除用具が入ったロッカーに手を伸ばすと美春はFクラスが勝つなら掃除をする必要はないのではないかと首を傾げると、

「えーと、FクラスはBクラスに勝っても設備交換はしないですよ。できれば、考え直して欲しいんですけど……」

「……あれだね。Eクラスから掃除用具、借りてこようか？」

「……そうですわね」

天音は苦笑いを浮かべながら雄二はBクラスの設備を取る気はない
と言いつ、ロッカーを開けるが掃除用具はまともなものはなく、美春
と美紀はため息を吐きながら、Eクラスの掃除用具を借りに行く。

第59問

「……しかし、あれだな。1度、捕まってるのにわざわざFクラスに物を盗みに行かせるか？」

「……まったくね。いくらなんでも許せないわ」

「まあ、それだけ後がなくなってるって事ですよ」

Bクラスの代表『根本恭二』からの提案を受けたため、放課後になり不戦の時間帯になると天音がEクラスに協力を頼んだようで再びFクラスにきたBクラスの生徒達を西村教諭に引き渡した事をEクラス代表の『中林宏美』がDクラスの教室に報告に現れると雄二は眉間にしわを寄せ、宏美は大きく肩を落としている。

「でも、これでBクラスは後がなくなっただけだよな」

「処分待ちだけだな。6人が生徒指導室に送られたわけだしな」

「充分に戦力は削る事ができましたわね」

明久はBクラスの生徒が西村教諭に捕まっているため、こちらが有利になってきたと思ったようでその言葉に源二と美春が頷くが、

「だけど、それでもBクラス相手よ。決定打に欠けるわよ。実際、瑞希しかまともに戦えないんだから」

「そうなのじゃ。このままではじり貧なのじゃ」

美波と秀吉は戦いっぱなしの瑞希の体調を気にかけているようであり、眉間にしわを寄せると、

「わ、私は大丈夫です」

「姫路さん、ごめんなさい。もう少し頑張ってください。上手く行けばもうすぐ終わりますから」

瑞希は大丈夫だと笑顔を見せるがその笑顔には明らかに疲れの色が見え、天音は作戦を立てた事もあるため申し訳なさそうに頭を下げる。

「待つんじゃ。もうすぐ終わるとはと言う事じゃ。勝負は明日までお預けなのではなかったのか？」

「4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の9時からするんだったか？」

「ああ。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。って条件でな」

秀吉は天音の言葉に首を傾げると今のFクラスとBクラスの試召戦争の状況を源二と雄二が補足すると、

「それなら、今日は終わりですよ。早く帰ろうよ」

「明久、良い事を教えてやる。これは戦争なんだ。時間外でも仕掛ける事なんていくらでもあるんだぜ」

「そうなの？」

「ああ。現にあの卑怯な小者は次の手に移ってるはずだ」

「はい。そうですね。自分の策がダメになってきているのに直ぐに次の策を考える知謀も持ち合わせていませんしね。自分の策を強行しようしますよ」

明久はいつまでも学園に残っている理由もないと思ったよう帰ろうと言うが雄二は口元を緩ませ、天音は口元を緩ませた時、

「……………雄二、真海、Cクラスの様子がおかしい」

「ム、ムツツリーニ、それってどう言う事？」

康太が教室に戻ってきてCクラスの動きが怪しい事を告げ、天音と雄二以外はCクラスがFクラスとBクラスの試召戦争が終わりしい試召戦争を仕掛けれると思ったようで教室は静まり返るが、

「まさか、本当に仕掛けてくるとはな」

「仕方ないですよ。小者なんですから」

「……………真海さん、坂本くん、何を企んでいるの？」

天音と雄二は計算内なのか呆れたようなため息を吐いており、宏美はその様子に眉間にしわを寄せる。

第60問

「簡単な事ですよ。この噂は『Bクラスが流しているんですから、Fクラスはこれを協定違反と判断します』」

「ちょ、ちょっと待つて。真海さん、それはいくらなんでも無理があるだろ」

天音は笑顔でBクラスは協定違反をしたと言い切り、源二は無理があると声をあげるが、

「問題ないですよ。協定内容は4時から明日の9時までは『召喚戦争に関わる一切の行為を禁止する』ですから」

「待つのがじゃ。だとしても、これは噂であって、事実とは言えんのだじゃ、流石に無理があるのだじゃ」

天音はBクラスとの協定を逆手に取る気だがそれでも源二や秀吉を始めとしたメンバーは天音の作戦では納得がいかないようであり、

「それなら、その噂はどこから出てきましたか？」

「どこからって、ムツツリーニ、どこから？」

「……………情報の出所ははっきりしていない」

天音は噂の出所に注目して欲しいと言い、明久は噂の出所を康太に聞くが康太はそこまではつかみ切れていないようで首を横に振ると、

「まず、D、Fは問題外ですね」

「ああ、俺達が噂を出す理由がないからな」

「ああ。俺達Dクラスもそんな噂は出してない」

天音はDクラス、Fクラスともに噂を流していない事を話し、源二と雄二は頷く。

「なら、Aクラスがそんなくだらない噂を流すと思いますか？」

「…… Aクラスにはそんな事をする意味がないですわ。となると残りは3クラスですね」

「わ、私達だってそんな噂をしてないわよ。だいたい、私達はこの間のDクラスとの試召戦争でそんな卑怯な真似はしないと誓ったんだから」

次に天音は噂の出所はAクラスかと聞くと美春は意味がないと首を振り、Eクラスである宏美に視線が集まると宏美は大きく首を横に振り、

「そうなると残りはBとCの2クラスね」

「普通に考えるとCクラスが本当に試召戦争を仕掛けるつもりなら、情報は伏せるべきです。それが漏れているのはCクラスにとっては得策ではありません」

「それはBクラスが故意的に噂を流しているって事ですか？」

美波は宏美の言葉で噂を流すクラスが絞られてきたため、真剣な表情をすると天音はCクラスが漁夫の利を狙う上で噂を広げる事は愚策ではないと言い切り、その言葉で噂の出所はBクラスだと判断するのに充分であるが、

「それにもう1つ。Cクラス代表の『小山友香』さんはBクラス代表の『根本恭二』くんとお付き合いしています」

「そうなんだ……ムツツリーニ、カッターが良いかな？」

「……………まずは捕まえてから、屋上からヒモなしバンジーの刑」

天音は2クラスの代表の関係を話すと明久と康太を中心にしたDクラスの教室に残っていたFクラス男子が嫉妬と殺意に飲まれ始め、

「土屋くん、それは根本くんが死んじやいますからね。拷問と言うのは生かさず、殺さずが基本です。簡単に殺すとつまらないじゃないですか」

「……………真海さん、そのまき上がる殺意を押さえようか、話が進まないから」

Fクラス男子から溢れ出す殺意は天音に感染し、源二は大きくため息を吐くと、

「わ、私は殺意なんか出してません!？」

「……………いや、もう手遅れだから」

「そ、そうですね」

天音は慌てて殺意など出していないと否定するがその様子に集まっているメンバーは苦笑いを浮かべる。

第61問

「はい。天音ちゃん、深呼吸、落ち着いて」

「は、はい」

美紀は天音に落ち着くように言うと天音は大きく深呼吸をし、

「後はこの協定はあくまでもFクラスとBクラスの協定です」

「うむ。それがどうかしたのか？」

「それじゃあ、質問です。今、根本くんはどこにいますか？」

「えーと、普通は放課後になったわけだし、帰ってるんじゃないのか？」

天音は落ち着いたようで話を戻そうと恭二の居場所を聞くと源二は天音の質問の意味がわからないようで首を傾げながら下校時間だし帰っているはずだと言いが、

「それなら、確認してみましよう。坂本くん、根本くんがどこにいるかわかりませんか？ 代表の居場所はわかるようになってるんですよ」

「ああ」

「ちょっと待って。もう、今日の試召戦争は終わってるんだよ」

「でも、今は試召戦争中ですよ。試召戦争中は各代表の位置はわかるようになっていきます。これは学園のルールですから、クラス間の協定は関係ありません」

天音は今の状況でも恭二の居場所は確認できると言い切り、

「ああ。真海と俺の予想通り、根本はCクラスの教室に居るぜ」

「決まりですね」

「待ちなさい。根本とCクラスの代表は付き合ってるんでしょ。それなら、放課後に彼女のところに行っても問題はないでしょ」

雄二は恭二の居場所を確認すると天音はくすりと笑うが美波は無理があると天音と雄二の次の行動を止める。

「それはその時ですよ。本当にその状況なら、それで終われば良いんです。美紀ちゃん、Fクラスの生徒が先生を呼びに行くとBクラスに見つかった時に面倒な事になりますから大島先生を呼んできてくれますか？」

「了解だよ」

「それじゃあ、Dクラスは廊下で世間話をしているふりをしながら、Bクラスの生徒がCクラスに入らないようにしましょう」

天音はCクラスにいる恭二を襲撃するためにFクラス最大の火力である康太と瑞希の2枚看板で攻めきると言うに残っているDクラスの生徒に指示を出し、Dクラスの生徒は世間話をしながら廊下に出

て行き、しばらくして美紀が保健体育の大島教諭を引きつれて戻ってくる、

「それじゃあ、行くか。姫路、ムツツリーニ、お前達2人が作戦のカギだ。頼むぜ」

「……………了解」

「は、はい。頑張ります」

雄二は立ち上がるとFクラスを率いてCクラスの教室に向かおうとするが、

「待ってください。代表、私達も行きましょう」

「俺もかい？ 邪魔にならないかな？」

「良いんですよ。私達は私達でCクラスに宣戦布告をしないといけませんから」

天音はFクラスを引き留めると源二にCクラスへの宣戦布告をしに行く、と笑う。

「何だ？ 俺はDクラスは次はBクラスを攻めると思ってただけだな」

「まあ、FクラスがBクラスの設備に興味がないから、それでも良いんですけどね。私達が今、欲しいのは経験値です。試召戦争を知る事、それに私達は私達の『正義』の名の下で戦ってますから、卑怯者は潰さないといけませんから」

「……結局、天音が戦いたいただけではありませんか」

「そ、そんな事はありません」

雄二はDクラスの次の相手がCクラスだと言う事に首を傾げるが天音には考えがあるようであり、くすりと笑うが美春は天音が試召戦争をしたいだけのため息を吐き、

「真海さんの殺意が明日も溢れ出るわけだね」

「平賀、お前も大変だな」

源二が大きく肩を落とす姿に雄二は苦笑いを浮かべる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473x/>

バカとテストと戦略眼

2012年1月9日19時52分発行